宮崎県文化財調査報告書

第 27 集

昭和59年3月

宮崎県教育委員会

宮崎県文化財調査報告書

第 27 集

昭和59年3月

宮崎県教育委員会

序

宮崎県教育委員会におきましては、文化財指定のための調査、また、開発工事等によって発見された遺跡についての緊急発掘調査の結果をまとめて、毎年報告書を刊行しております。

本年度は、別記のとおり調査を実施しておりますが、今回は昭和48年から50年まで数次にわたり調査された大萩地下式横穴群の未報告となっておりましたものを報告するものであります。特に人骨については、数次にわたる調査で出土しました人骨を人類学的立場から観察を行い、他資料との比較検討した結果をまとめてあります。

本書を本県の歴史解明のための学術資料として研究に活用していただくとともに、社会教育・学校教育の資料として役立てていただきたいと存じます。

なお、本書発行にあたり執筆いただいた松下孝幸氏、分部哲秋氏および調査にあたり協力いただいた地元の方々、地元教育委員会の方々に深甚の謝意を表します。

昭和59年３月31日

宮崎県教育委員会

教育長　後藤　賢三郎

総　　目　　次

1．大萩地下式横穴墓群

1）遺　構　編（第1次調査分）　…… 1

2）人　骨　編　　古墳時代人骨　…… 53

古墳時代小児・成年骨　…… 113

（付）昭和57・58年度埋蔵文化財発掘調査一覧　…… 133

大萩地下式横穴墓群

―― 遺構編 ――

例　　言

1. 本報告は、昭和48年度に宮崎県教育委員会が実施した大萩地下式横穴墓群Ｂ・Ｃ地区の発掘調査による成果を、昭和58年度において編集したものである。
2. 発掘調査時から10年余りを経て、残された資料には不明あるいは断片的なものが多かったが、可能な限りの再編成を試みている。
3. 本報告の編集は、北郷泰道が行ったが、執筆の分担と執筆年は次の通りである。

Ⅰ．発掘調査の経過と報告に至る経緯	岩　永　哲　夫	昭和59年
Ⅱ．地下式横穴墓群の群構造	北　郷　泰　道	昭和59年
Ⅲ．地下式横穴墓群の遺構と遺物	〃	昭和59年
Ｂ—５出土の鉄鏃	茂　山　　護	昭和49年
Ⅳ．土壙等出土の遺構と遺物	〃	昭和49年
Ⅴ．大萩Ｂ－13号墓出土の研磨刀剣について	〃	昭和55年（昭和59年一部手直し）

4. 遺構実測図は、調査時における石川恒太郎氏をはじめとする調査員らの原図を、茂山護氏（現埋蔵文化財センター主任）、田之上哲氏（現飫肥小学校教諭）が、昭和51年にトレースしたものである。
5. 遺物実測図は、昭和52年に面高哲郎・田之上・北郷が作成し、田之上・北郷がトレースしたものである。
6. 地下式横穴墓の番号は、調査時に調査員らによって便宜的につけられた「旧番号」を、昭和51年に岩永哲夫（現埋蔵文化財センター主任主事）が遺構実測図・遺物を対照し作成・整理した一覧表の「新番号」を使用している。

　なお、茂山護氏の「大萩遺跡の地下式横穴一覧表」（『宮崎県文化財調査報告書』第22集）の番号との対照及び誤認と思われるものについては、本報告の一覧表で示すとおりである。

本　文　目　次

Ⅰ　発掘調査の経過と報告に至る経緯 …… 1

Ⅱ　地下式横穴墓群の群構造 …… 2

1.　B　地　区 …… 2

2.　C　地　区 …… 2

3.　全体の構成 …… 4

Ⅲ　地下式横穴墓群の遺構と遺物 …… 5

Ⅳ　土壙等出土の遺構と遺物 …… 41

Ⅴ　大萩B－13号墓出土の研磨刀剣について …… 45

Ⅰ．発掘調査の経過と報告に至る経緯

大萩遺跡は西諸県郡野尻町大字三ケ野山に所在し、弥生終末期の土壙墓群、住居跡群、古墳時代の地下式横穴墓群の遺跡として知られている。昭和48年以前の大萩地区は県指定野尻村古墳（昭和８年12月５日指定）と昭和34年に発掘調査された地下式横穴墓１基が周知されているのみであった。ところが、昭和48年から県西諸県農林振興局による瀬戸ノ口地区特殊農地保全整備事業が実施されることになり、地下式横穴墓をはじめとして遺跡の発見が相つぎ、俄かに大萩地区が注目されるところとなった。

昭和48年度の事業地区はＡ、Ｂ、Ｃ地区と呼ぶ瀬戸ノ口から柿川内へ抜ける農道の西側の一帯であったが、昭和48年12月から翌年３月まで23基の地下式横穴墓が発見され、工事と平行して県教育庁文化課による慌しい調査が行われた。当時の県教育委員会の埋蔵文化財保護体制は極めて未熟なものであり、昭和48年度に社会教育課から文化課が独立設置されたが、陣容は社会教育課時代と変わらず、発掘調査はすべて外部に依頼しなければ行えない状況であった。したがって、当然のことながら、大萩地区での事業が進行するにつれて、ブルドーザーによる玄室天井部破壊という形で次々に発見される地下式横穴墓の発掘調査は調査員不足となりその確保のためにほん走する有様であった。県単事業で行われたこの発掘調査には石川恒太郎（県文化財専門委員）、日高正晴（同）、田中茂（県総合博物館学芸課主任）、茂山護（同主事）の各氏に調査員として依頼し、どうにか調査を終了することができた。翌昭和49年度には文化課に県埋蔵文化財調査員会を設置し、石川恒太郎氏をはじめ県内の研究者に調査員を委嘱し、県教育委員会の行う発掘調査に参加してもらうことにした。大萩遺跡の調査結果について報告書を作成すべく調査員会を開き、執筆分担などについて協議を行ったが、諸々の事情により執筆が大幅におくれるおそれがあり、早急な報告書作成は困難と思われた。その後文化課の方で資料の整理を進め、大方について終了したので今回、早急に公表の責務もあるので十分ではないが文化課でまとめ得た成果を報告することにした。

なお、瀬戸ノ口地区特殊農地保全整備事業は以後数年に亘って続けられたが、県教育委員会も昭和49年度から51年度まで国庫補助事業として工事前に発掘調査を実施し、既に報告書も発行しているので参考にしていただきたい。調査員として参加いただいた上記の方々および遺跡発見から調査まで種々御協力いただいた当時高原町立広原小学校長真方良穂氏（現野尻町教育長）、地元の野尻町教育委員会には記して感謝申し上げる。

註

1. 宮崎県教育委員会「大萩遺跡（１）」瀬戸ノ口地区特殊農地保全整備事業に伴なう埋蔵文化財発掘調査報告　1974
2. 同　上　「大萩遺跡（２）」　同　上　1975
3. 同　上　「柿川内第Ⅰ第Ⅱ遺跡」　同　上　1976

Ⅱ．地下式横穴群の群構造

1. B　地　区

B地区は、F地区の西にD地区土壙墓群を挟み存在するものである。一部、D地区と関係すると考えられる３基の土壙墓が、県指定の円墳の北方に検出されているが、地下式横穴墓の密集はその西側に見られる。

B－１号は、円墳下B－２号の南南西約20mに在り、B－３号は、B－２号のほぼ北方約40mにある。又、B－４号はB－３号から北北東約10m、B－５号は、B－３号から東約５mにある。さらに、B－５号に対面してほぼ５mの間隔でB－６号があり、この２基の関係は、いわゆる＜円的構成＞にあると考えられる。

これらB－３～６の４基の北方には、B－７、８、10、11号があるが、B－８号の所在及び方位については実測図や記録が不明である。一つの推定としては、B－４号に対面して、いわゆる＜円的構成＞されていた可能性がある。一方、B－10号はB－７号と方位を同じくし、南方約13mに在り、B－11号はB－10号の北西約14mにある。

B－９号は、B－２号の西50mにあるが、B－12号はB－９号からさらに南西約70m、B－13号は南42mにあり、台地縁辺にグループとしては別に構成された可能性がある。

それと同様、B－14、15号も密集グループの西方に100 m近く離れており、やはり別に構成された可能性がある。

2. C　地　区

B地区の北西に、約150 mの間隔をおいてC地区が存在する。最もB地区よりに位置するのがC－６、７号で、この２基の方位は対面して存在している。さらに、C－７号の北西約60mにC－１～３号があり、この３基の方位はまちまちで相互にほぼ10～13mの間隔をもっ

第１図　大萩地下式横穴墓群分布模式図

ている。

C－4号は、これら3基のさらに北西約60m、C－8号は北東約200 mにあり、C－8号に近接して昭和53年には大萩36号も検出されており、群の構成を異にしていると思われる。

3. 全　体　の　構　成

調査地区は、東からF・D・B・C地区と分れるが、F地区が12基の地下式横穴墓と2基の土壙墓からなり、D地区は17基の土壙墓からなる。F地区に認められる2基の土壙墓は古墳時代のもの、すなわち地下式横穴墓と大きな時間差が認められるものではなく、D地区の弥生時代終末期の土壙墓とは区別されると考えたい。

平面分布上では、F地区が最もまとまりが良く、B地区は北東の部分が比較的まとまっているほかは拡散的である。グルーピング上は、指定古墳周辺とその南西の部分とは別の構成とみた方がよい。これと同様、C地区もC－1～7号までの地下式横穴墓とC－8号周辺（現在までに3基ほどが追加されている）とは明らかに別グループに属する。

一方、垂直分布にも着目をしておきたい。F地区は、F－9号を除き、すべて標高200 m上に立地している。また、弥生終末の土壙墓も同様に200 m上にある。これに対し、B・C地区は195 m～200 mまでの比高差5 mの間に分布している。

また、垂直分布の意味合いについて言えば、現地表面上での等高線とは別に、丘陵地上の地層の起伏には微妙かつ著しいうねりがみられるもので、うねりに対応した占地意識も問題とされる必要がある。

Ⅲ．地下式横穴墓群の遺構と遺物

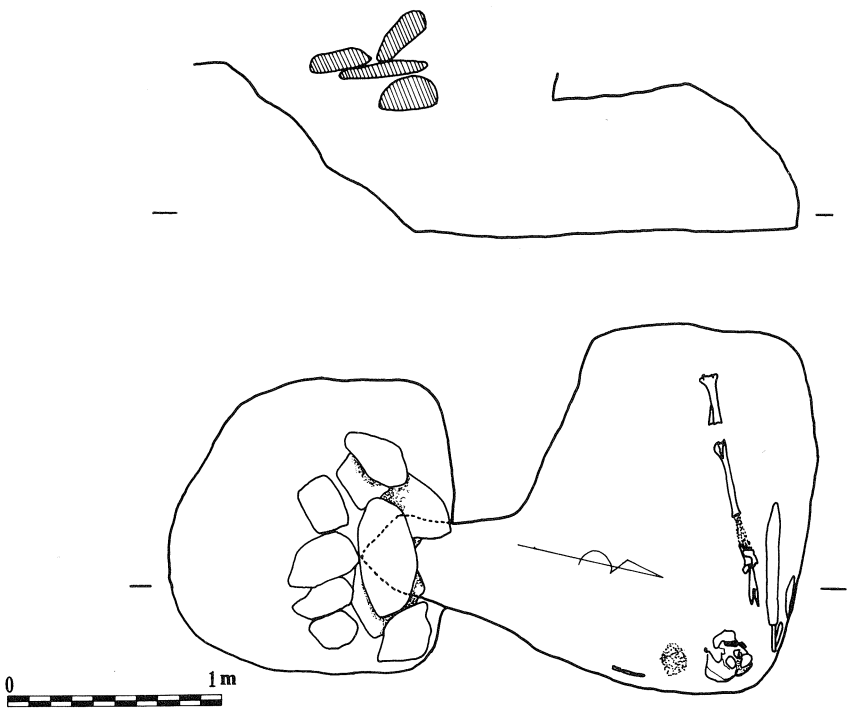
B－1号地下式横穴墓

主軸の方向をほぼ南北にもち、玄室を北、竪壙を南にする平入り型の片袖の地下式横穴墓である。天井部の造りは明瞭でないが、棟が表現されたとみられる屈折が、断面図に認められるため、ドーム状の天井ではなく、切妻か寄棟の家形に整形されていたものと考えられる。

又、羨門の閉塞には、幼児大から人頭大の比較的大きな河原石が用いられていたとみられる。

主軸長290㎝、竪壙は半楕円状を呈し、竪壙最大幅140㎝、羨門部幅40㎝、玄室短軸130㎝、玄室長軸170㎝、天井の高さ70㎝をそれぞれ計る。

副葬品には、直刀ないしは鉄剣、刀子などの遺物を認めることが出来るが、現在実物の所在が明らかでない。被葬者は1体で、奥壁に片寄せて葬られている。



第2図　大萩B－1号地下式横穴墓

B－2号地下式横穴墓

県指定の高塚古墳の下に位置する地下式横穴墓である。古墳墳丘の発掘はなされていないが、墳丘自体に他の埋葬施設の存在する可能性は少なく、当地下式横穴墓を古墳の主体部として認めてよいであろう。

主軸の方向をやや北東方向にし、竪壙を南、玄室を北にもつ、長方形プランを呈する両袖の地下式横穴墓である。天井部が屋根形を成さず平天井であるため、妻入り・平入りの区別は微妙なところであるが、被葬の状態からみれば、基本的には平入り型を想定していたものと思われる。棚状施設は、玄室の東壁にのみ造られている。

主軸長480㎝、竪壙は1辺120㎝強のほぼ正方形を成す。羨門部幅70㎝、羨道の長さ55㎝、玄室の長軸300㎝、短軸240㎝程で、天井の高さ90㎝を計る。又、棚状施設の幅は20㎝程度である。

被葬者は5体で、奥壁に添いほぼ肩を接する間隔で葬られており、玄室の羨門寄りにはまだ1m程のスペースが残されている。

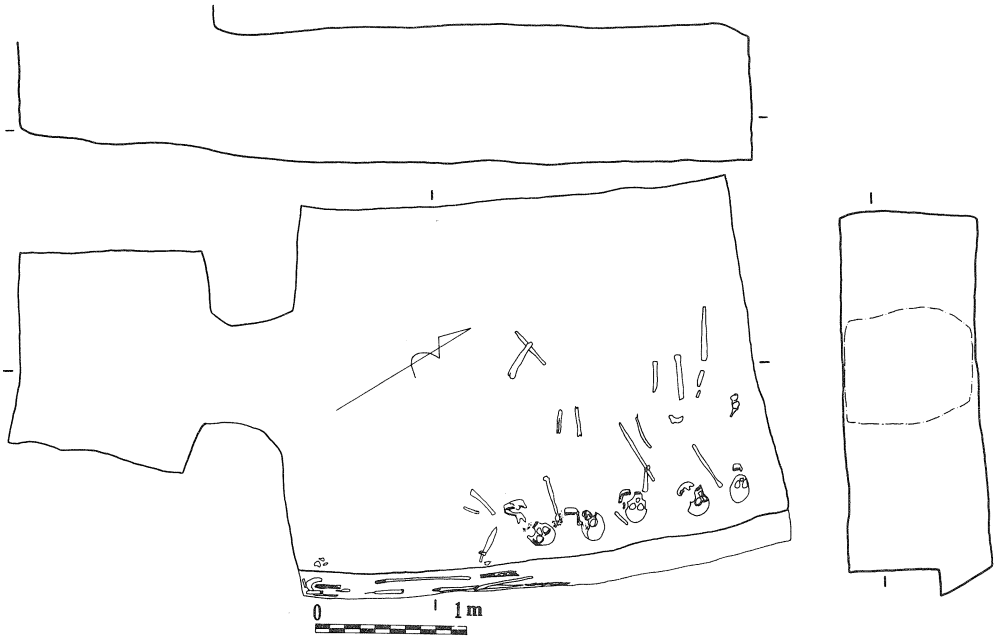
副葬品の多くは棚状施設上に、しかし玄室入口寄りの半分に集中して置かれている。これは、被葬者を奥壁寄りに先行して葬ったため、埋葬者たちにとって、その上部の棚状施設が使用し難いものとなり、被葬された遺体のない床面上の棚状施設に副葬品を集中して置かなければならなくなったものと推定される。又、床面上にも副葬品と思われるものの幾つかが認められるが、これらが棚状施設上から落下したものか、当初から置かれたものかは明らかでない。

B－3号地下式横穴墓

主軸を南西の方向にもち、玄室を南、竪壙を北にする平入り型の両袖の地下式横穴墓である。

竪壙の長軸150㎝、短軸90㎝を計り、羨門、羨道部にかけては崩れた形をしており、明瞭ではないが、羨門の幅は130㎝を計る。又、玄室も不整形で長軸200㎝、短軸120～160㎝を計り、天井の高さは85㎝である。天井部の形状はカマボコ形を呈する。

被葬者は1体とみられ、奥壁よりに頭骨が確認されている。



第3図　B－2号地下式横穴墓

表1　B－2号出土鉄剣一覧

図面番号	全長	刃部			茎部			備考
		長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	
4－1	87.0	71.0	3.2～4.8	0.6	16.0	2.0～3.5	0.4	鏑。目釘穴3
〃－2	69.2	54.6	3.3～4.5	0.5	13.4	1.5	—	鞘部に平織りの糸巻き有り。目釘穴2
〃－3	59.1	47.2	2.6～3.6	0.6	11.9	1.7	—	鏑
〃－4	56.6	43.2	2.7～3.7	0.4～0.6	13.4	1.4～2.5	0.3	鏑。目釘穴2
〃－5	41.1	29.0	1.7～2.9	0.4	12.1	1.4～1.9	—	鹿角装有り。柄部の長さ 10.2㎝
〃－6	55.5	42.6	—～3.8	—	12.9	1.5～2.5	—	直弧文鹿角装有り。目釘穴2
〃－7	40.5	—	1.9～2.8	0.4	—	1.4	0.3	

（　）は現存長　単位＝㎝

表2　B－2号出土鉄鏃一覧

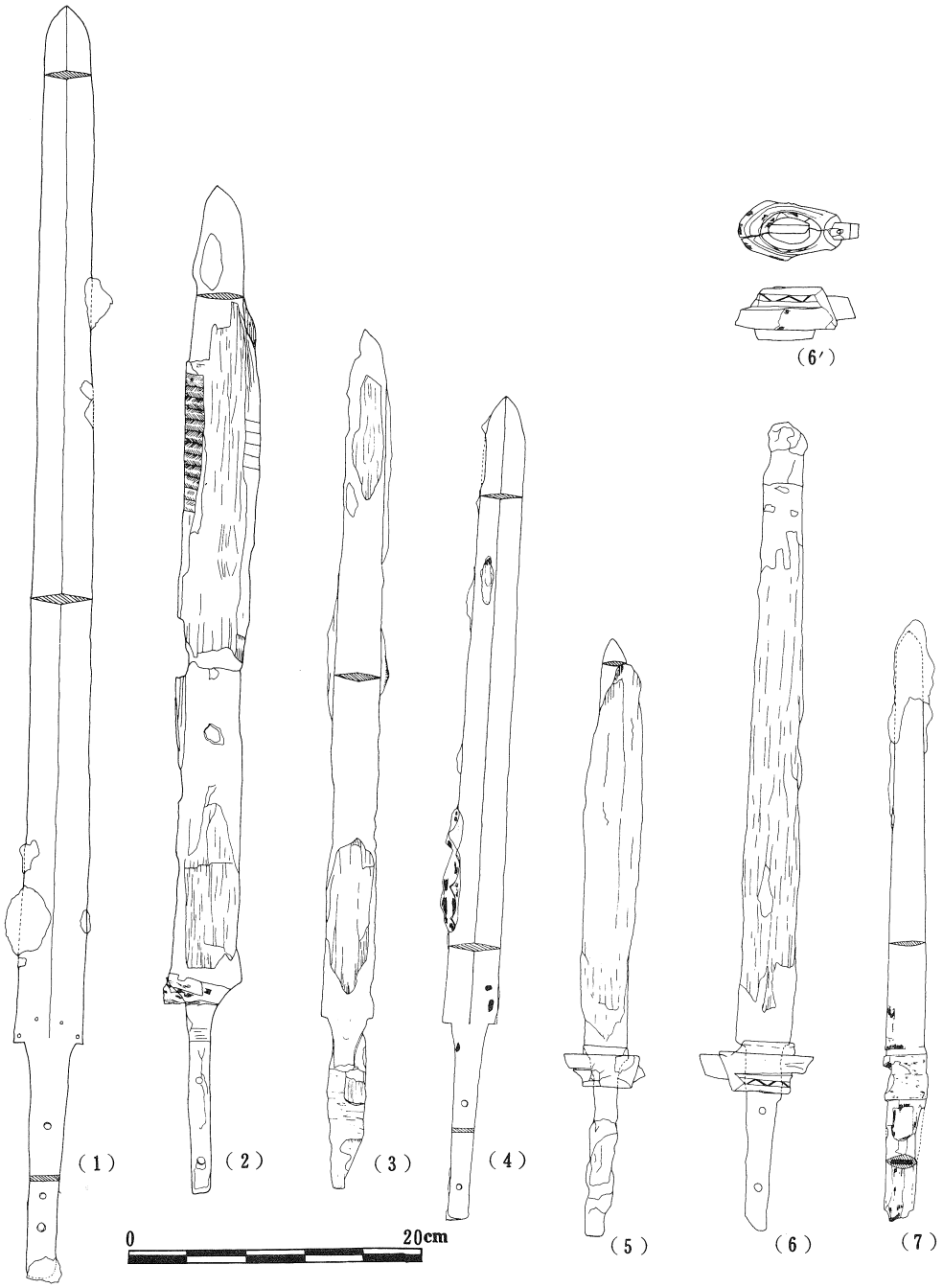
図面番号	鉄鏃形式	全長	鏃身		茎部		矢柄		備考
			幅	厚さ	幅	厚さ	長さ	径	
5－8	変形圭頭斧箭式	17.0	3.2	—	1.1	—	4.9	1.2	
〃－9	〃	18.3	(3.5)	0.4	1.0	—	6.1	1.1	
〃－10	〃	24.1	3.3	0.3	1.0	—	13.0	1.4	
〃－11	〃	17.5	3.7	0.4	0.8	—	4.0	1.2	
〃－12	圭頭斧箭式	13.2	2.3	—	0.8	0.3	—	—	
〃－13	変形圭頭斧箭式	24.8	(3.6)	0.4	1.0	0.3	12.1	1.1	
〃－14	〃	14.1	3.9	0.4	0.9	0.4	1.7	1.0	
〃－15	〃	9.9	3.0	0.4	0.9	0.4	—	—	
〃－16	〃	18.8	3.6	0.5	1.0	0.4	6.3	1.1	
〃－17	〃	9.8	2.3	0.2	0.8	0.3	—	0.9	
〃－18	〃	9.4	2.6	0.3	0.8	0.3	—	—	
〃－19	片丸造鑿箭式	10.8	1.1	0.2	0.5	0.3			
〃－34	〃								鉄斧に付着

（　）は現存長　単位＝cm

表3　B－2号出土刀子一覧

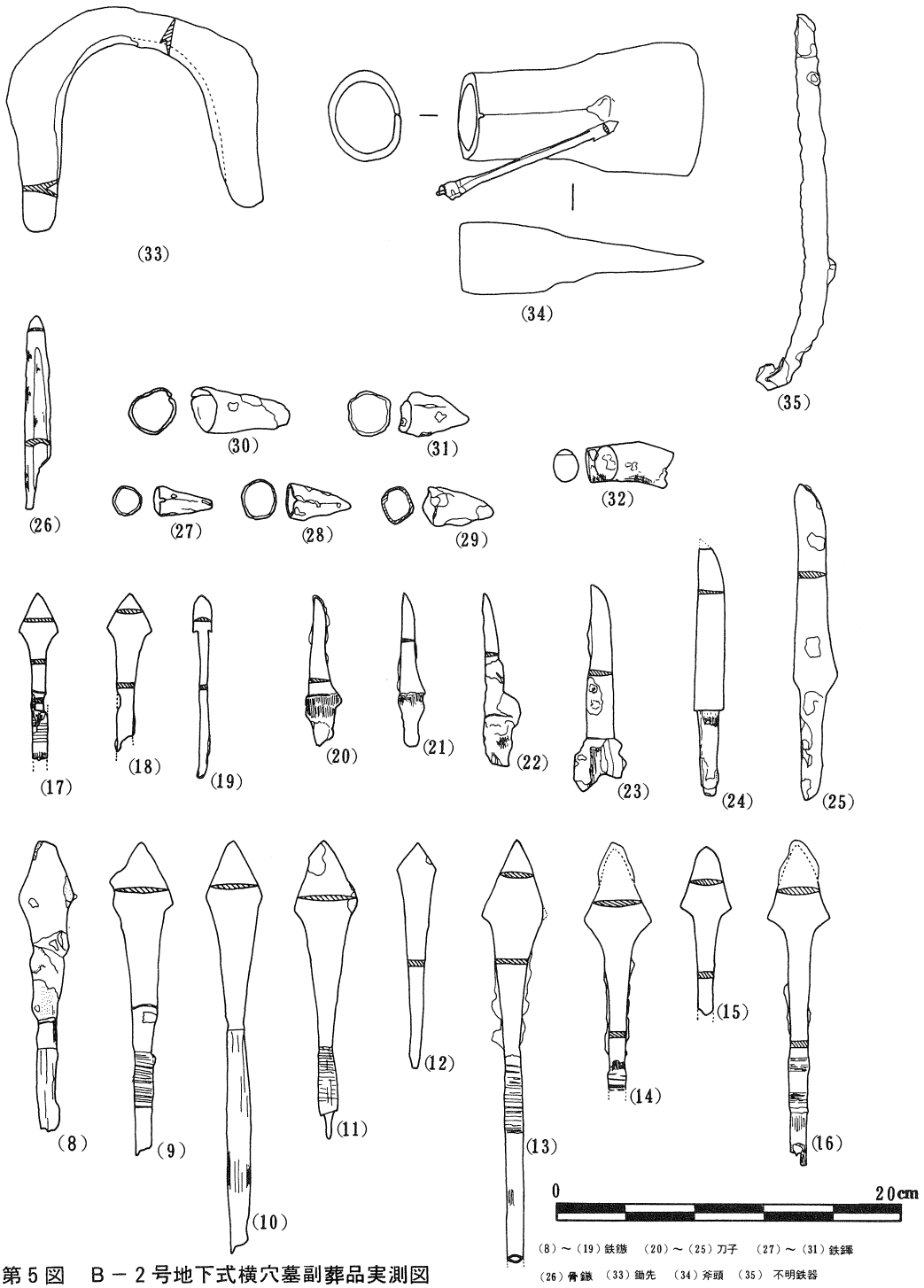
図面番号	全長	刃部			柄部			備考
		長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	
5－20	8.7	5.8	0.6～1.4	0.3	2.9	1.7	—	
〃－21	9.0	5.9	0.7～1.5	0.3	3.1	1.6	—	
〃－22	10.1	—	0.8	0.3	—	1.7	—	
〃－23	12.1	9.0	1.0～1.6	0.4	—	—	—	
〃－24	(14.4)	(9.4)	1.5～1.7	0.3	5.0	1.1	—	
〃－25	18.5	—	1.5～2.6	0.4	—	1.1		

（　）は現存長　単位＝cm



第４図　Ｂ－２号地下式横穴墓副葬品実測図

(1)～(7)　剣　　(6′) (6)の鹿角装部



(8)～(19)鉄鏃　(20)～(25)刀子　(27)～(31)鉄鎌
(26)骨鏃　(33)鋤先　(34)斧頭　(35)不明鉄器

第5図　B－2号地下式横穴墓副葬品実測図

B－4号地下式横穴墓

主軸を南西の方向にもち、竪壙を北、玄室を南にする、平入り型の両袖の地下式横穴墓である。天井部が崩壊して発見されたものらしく、その形状は明らかでない。

竪壙は台形状を呈し、その長辺に羨門が開口している。竪壙の長辺180㎝、短辺110㎝、羨門部幅80㎝、玄室長軸220㎝、短軸140㎝を計り、天井部の高さは実測図での推定60㎝程である。

実測図では、3体の被葬を確認しているが、副葬品については明らかでない。

B－5号地下式横穴墓

主軸をほぼ南北にし、北に玄室、南に竪壙をもつ、平入り型の両袖の地下式横穴墓である。竪壙と玄室の大きさはほぼ等しく、竪壙の底面は台形状を呈し、羨門のつく台形の長辺は150㎝、短辺は120㎝を計る。又、玄室の長軸は185㎝、短軸は80㎝を計り、計測し得る範囲での天井の高さは50㎝である。天井部の形状はカマボコ形を成す。羨門の幅110㎝、羨道部は20～30㎝の長さである。

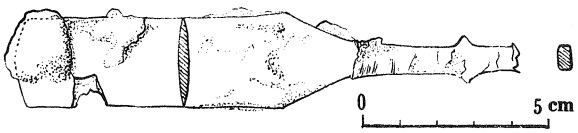
被葬人骨については明らかでない。

B－5号出土の鉄鏃（第6図）

5号の副葬品は、玄室の右隅に発見された鉄　が1本だけで、ほかに副葬品はなかった。

鉄鏃は、身幅2.3㎝、身厚0.3㎝と、薄手両刃の、一見パレットナイフ形の平根造である。鋒は銹化のため明瞭でないが、低平な圭頭乃至円頭形と考えられる。身と茎の境は、両削関の形をとっており、逆刺はない。茎は断面矩形を呈し、末端が折れているため全長は不明である。部分的に糸巻き痕がみえるが、矢柄は伴わない。鋒の尖りはみられないが、全形から柳葉式からの変形と考えられる。

現長13.5㎝、身長9㎝を計る。

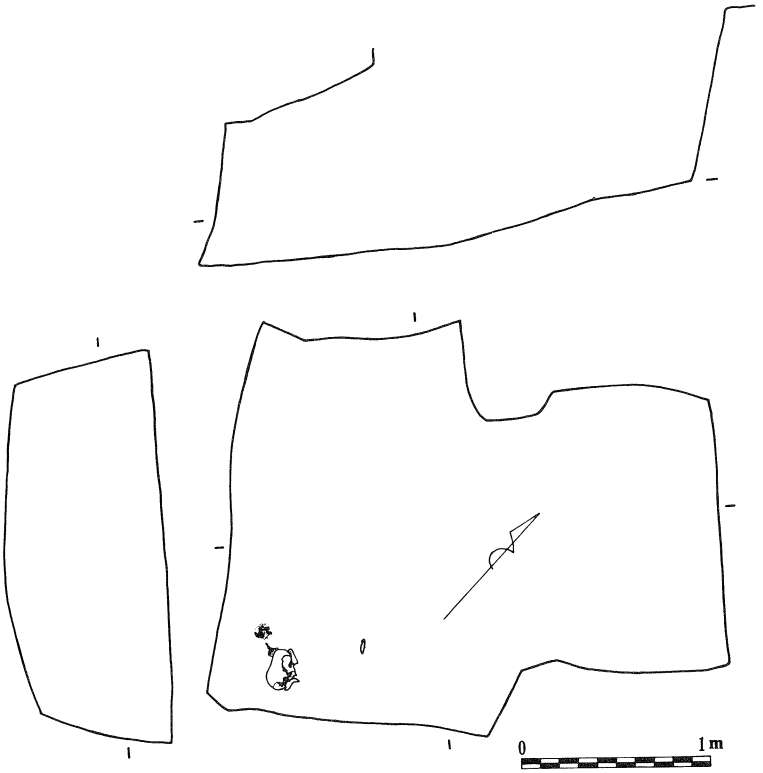


第6図　B－5号出土の鉄鏃

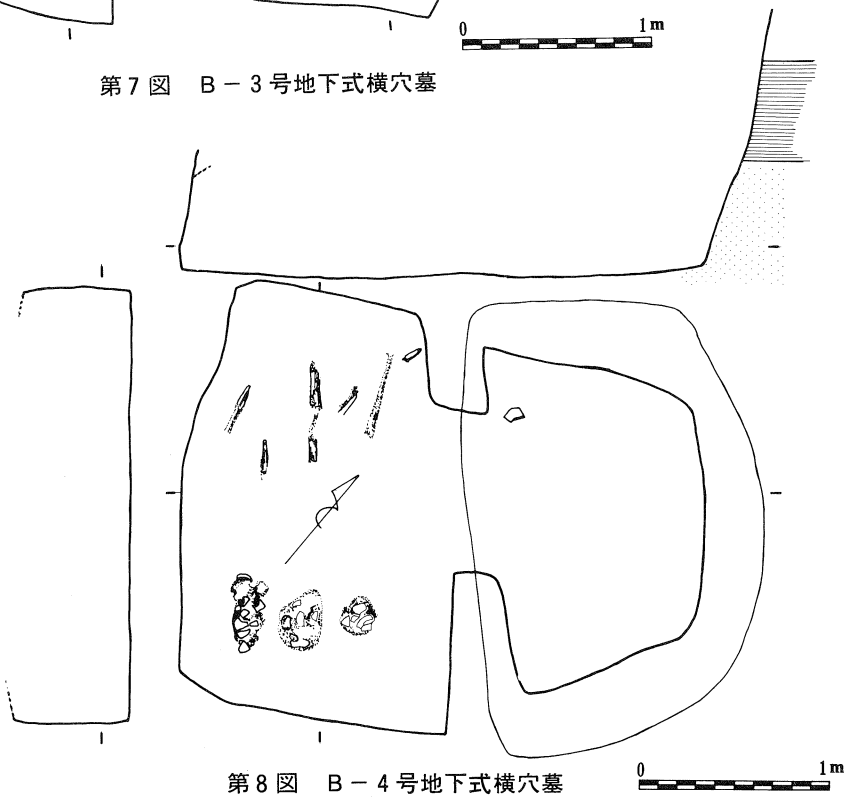
B－6号地下式横穴墓

主軸をほぼ南北にし、竪壙を北、玄室を南にもつ、平入り型の両袖の地下式横穴墓である。竪壙の底面の長軸220㎝、短軸80～100㎝で、玄室の長軸230㎝、短軸155㎝、天井の計測し得る範囲での高さは75㎝である。

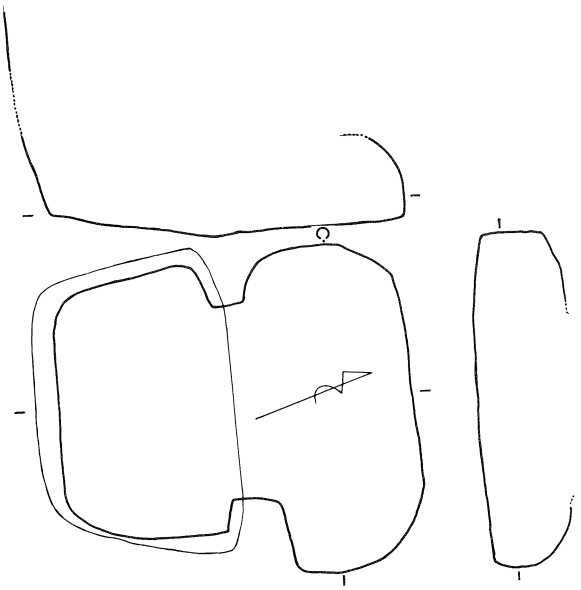
玄室床面には朱の散布面が二箇所認められ、また一箇所骨片の散乱らしき箇所もあり、3体の被葬の可能性が考えられる。副葬品には、刀子状のもの一箇が、実測図中に認められる。



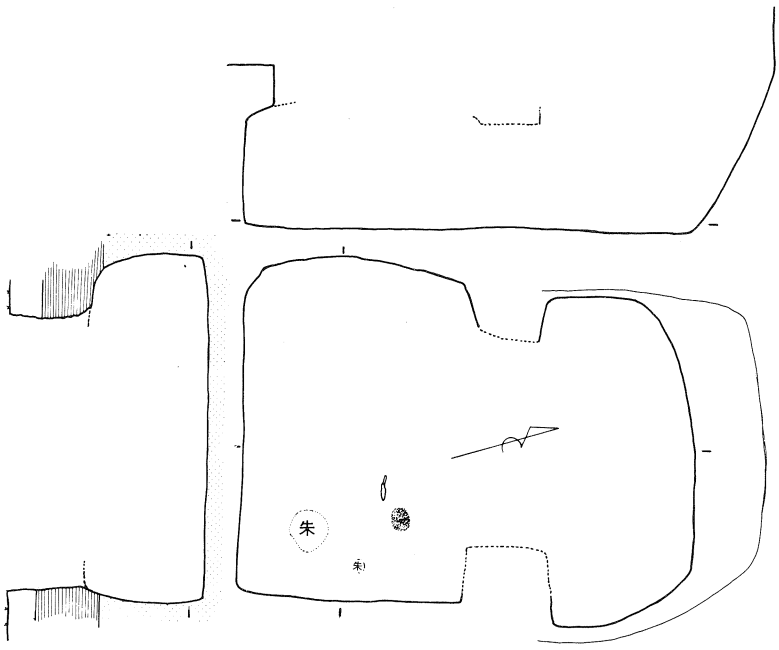
第7図　B－3号地下式横穴墓



第8図　B－4号地下式横穴墓



第9図　B－5号地下式横穴墓



第10図　B－6号地下式横穴墓

B－7号地下式横穴墓

主軸を北北西の方向にもち、竪壙を南、玄室を北にする、定形化された切妻・平入り型の片袖の地下式横穴墓である。

竪壙の底面は一辺90～100㎝のほぼ正方形状を成し、羨門の幅55㎝、羨道の長さ30～40㎝、高さ70㎝、玄室もほぼ正方形を成し、一辺150～160㎝で、天井の高さは棟木造り出し部まででで110㎝である。

羨門の閉塞には、幼児大から人頭大の河原石を用いている。玄室の四周には、5～15㎝幅の棚状施設がめぐらされており、天井部には棟木、切妻の壁面には束木を表現したと思われる部分がある。

被葬人骨は4体と思われ、袖のある西側壁添から3体が相添い、1体の人骨がやや離れて検出されている。

副葬品はB－2号の例と同じく、被葬遺体のない東壁から、奥壁の部分は被葬遺体の上部にかかる程度の棚状施設上に限られて、副葬されている。

B－9号地下式横穴墓

主軸の方向を南北にもつ、定形化された片袖の地下式横穴墓である。実測図によれば、この地域において極めて注目すべき妻入り型の地下式横穴墓とみられる。河原石による閉塞であったと思われるが、竪壙は失われ、その形状は明らかでない。

玄室はほぼ正方形に近く、西壁が190㎝、奥壁が230㎝である。天井部の高さは、頂点で140㎝を計る。四周には、最小幅8㎝、最大幅28㎝の棚状施設が設けられている。

被葬人骨は、4体ほどあったと推定され、奥壁に添い被葬され、副葬品は奥壁上及び西壁の奥壁よりに置かれている。これらの副葬の在り方は、B－2号・B－7号の被葬人骨を避けた副葬例とは異なり、被葬に先行してか、一体埋葬時に副葬されたものと考えられる。

表4　B－9号出土直刀・鉄剣等一覧

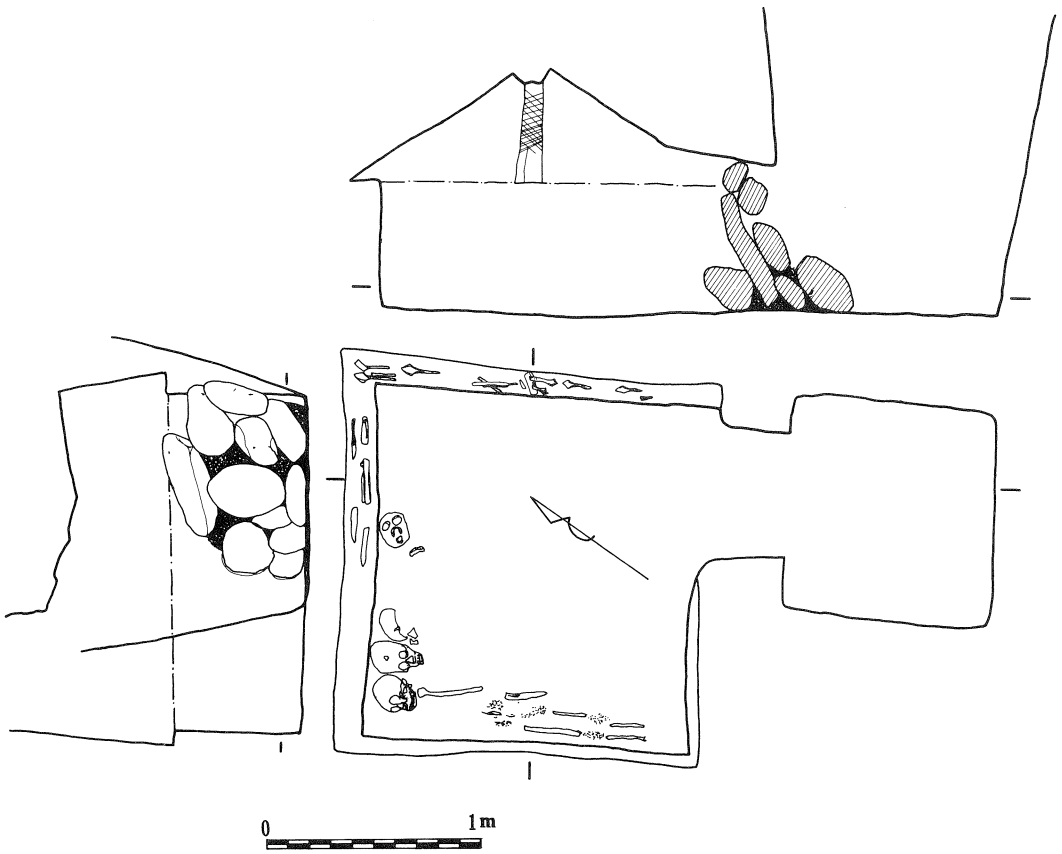
図面番号	全長	刃部			柄部			備考
		長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	
12－1	72.5	57.1	1.8～3.0	0.7	15.4	2.2	—	直刀
〃－2	(59.8)	(47.0)	3.1	0.5	(12.8)	—	—	鉄剣
〃－3	40.5	23.8	2.5～3.5	0.5		2.2		鉾
〃－17	(14.5)	—	1.9	0.4	—	—	—	刀子
〃－18	7.3	4.7	0.8～1.4	—	2.6	—	—	〃
〃－19	5.5	—	1.4	0.4	—	—	—	〃

（　）は現存長　単位＝cm

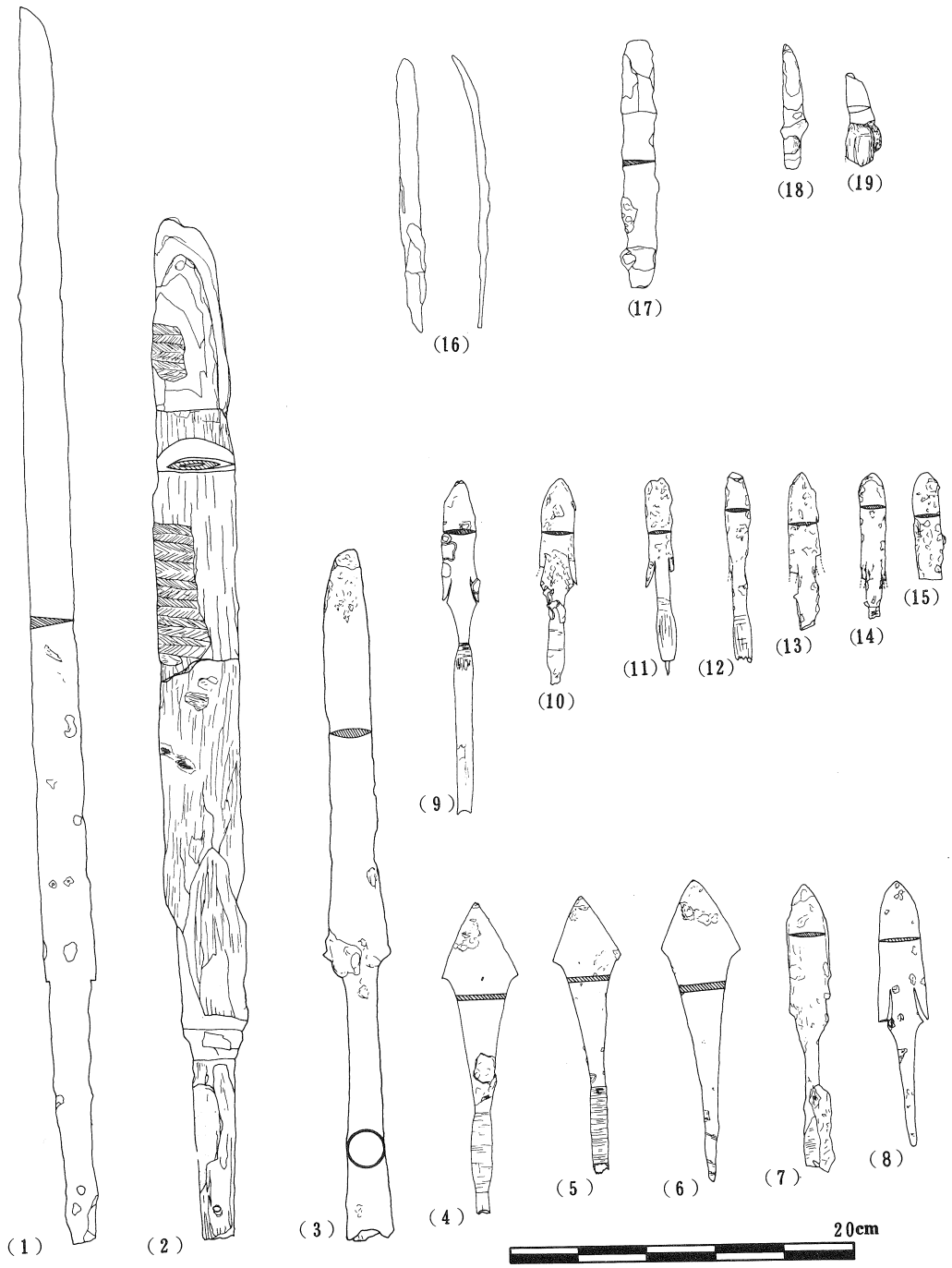
表5　B－9号出土鉄鏃一覧

図面番号	鉄鏃形式	全長	鏃身		茎部		矢柄		備考
			幅	厚さ	幅	厚さ	長さ	径	
12－4	変形圭頭斧箭式	18.3	4.4	0.3	1.3	0.3	5.9	1.1	平造り
〃－5	〃	16.3	4.0	0.3	1.0	0.4	5.1	1.0	〃
〃－6	〃	17.7	4.6	0.4	—	—	—	—	〃
〃－7	腸抉柳葉式	16.6	2.1	0.3					
〃－8	〃	15.6	2.5	0.2	1.0	—	—	—	
〃－9	〃	19.6	1.9	0.3	0.5	—	10.0	1.0	
〃－10	〃	12.1	1.8	0.2	—	—	4.7	0.9	
〃－11	〃	(11.6)	1.4	0.2	0.8	—	3.6	1.0	
〃－12	〃	11.1	1.4	0.2	0.8	—	2.8	—	
〃－13	〃	9.3	1.6	0.2	—	—	—	—	
〃－14	〃	8.5	1.5	0.3	0.7	—	—	—	
〃－15	〃	6.3	1.6	0.2	—	—	—	—	

（　）は現存長　単位＝cm

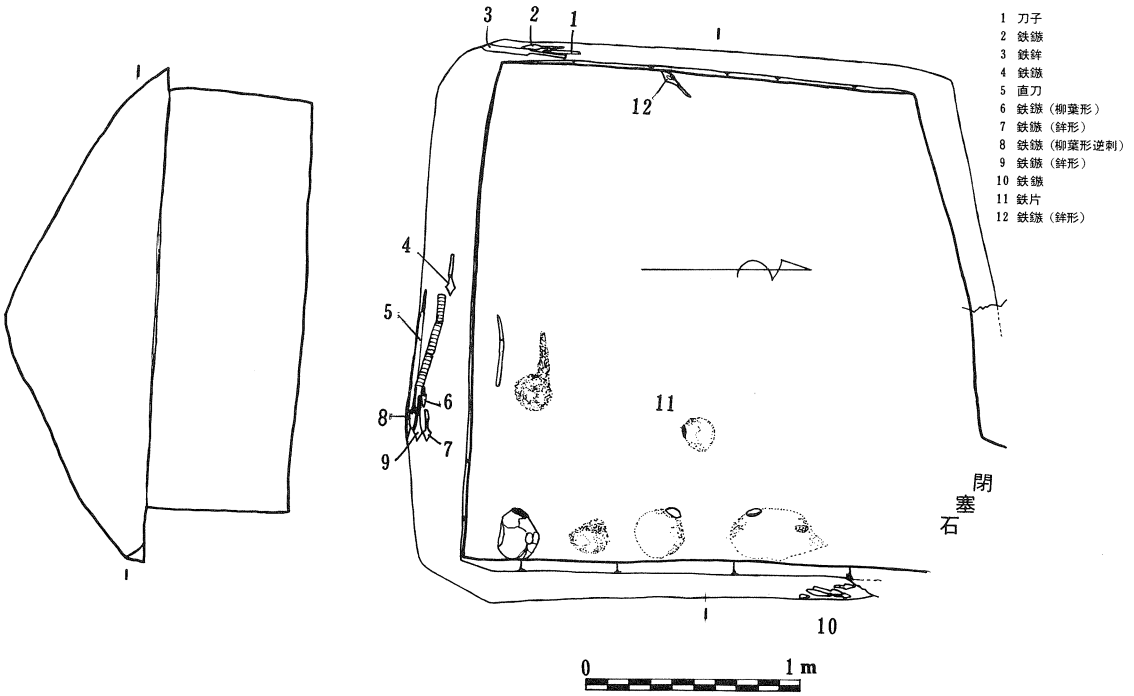


第11図　B－7号地下式横穴墓



第12図　B－9号地下式横穴墓　副葬品実測図

(1) 直刀　(2) 鉄剣　(3) 鉄鉾　(4)～(15) 鉄鏃　(16) 鉇　(17)～(19) 刀子



第13図　Ｂ－９号地下式横穴墓

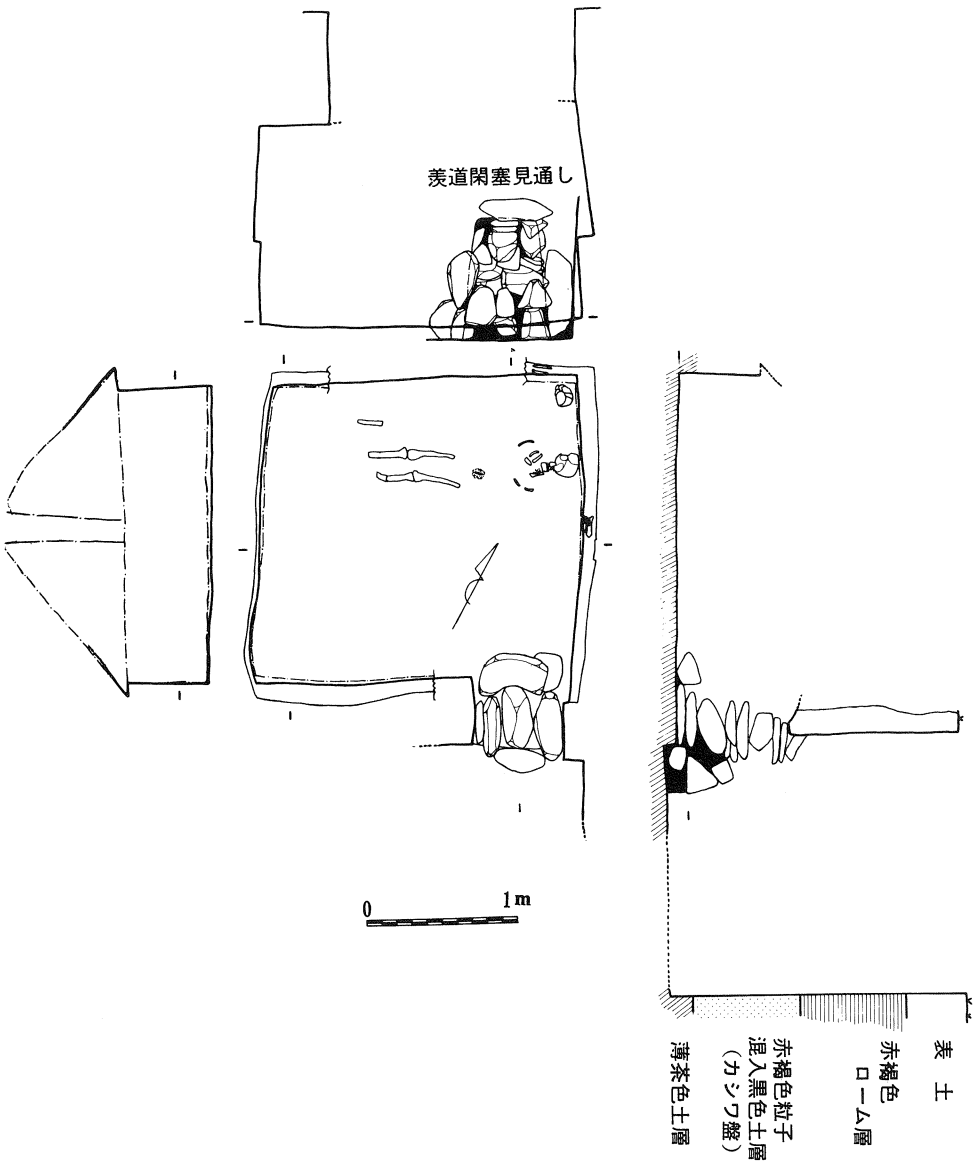
Ｂ－10 号 地 下 式 横 穴 墓

主軸を北北西の方向にもち、竪壙を南、玄室を北にする。定形化された切妻・平入り型の片袖の地下式横穴墓である。閉塞には、幼児大から人頭大の河原石を用いている。

竪壙は一部を残して破壊されているが、形状はＢ－７号などと同じように、正方形に近い定形化されたものが、残された竪壙から推定される。

玄室もＢ－７号と同じくほぼ正方形に近く、一辺 190 ～ 210 ㎝を計る。玄室の天井の高さは 130 ㎝程である。さらに、玄室東壁面には束木と思われる浮彫があり、壁面の四周には、奥壁に崩壊が認められるものの、幅10～20㎝程度の棚状施設がめぐらされている。羨門部の幅は60㎝、羨道の長さ35～45㎝、高さ75㎝を計る。

被葬人骨は２体で、奥壁に添い被葬され、副葬品は棚状施設の上に二箇所認められる。



第14図　B－10号地下式横穴墓

B－11号地下式横穴墓

主軸を東西方向にもち、玄室を西、竪壙を東にもつ、不整形で小型の、平入り型の両袖の地下式横穴墓である。

玄室は南北に長軸をもち、165㎝、短軸は60～70㎝を計る。北側の2隅は角ばるが、南側は丸み帯びる。天井部の高さは、推定される範囲で95㎝程度である。

羨門幅は75㎝、羨道の長さは30～40㎝である。竪壙は大きく、全体の形状は、B－5号に近い。確認出来る竪壙部幅は135㎝程度で、隅は角ばっている。

副葬品としては、直刀のほか鉄鏃の存在が示されている。又、被葬人骨の推定は難しいが1骨片あるいは頭骨を示す箇所が2箇所、朱の痕跡が1箇所確認されている。

第15図　B－11号地下式横穴墓

表6　B－12号出土鉄剣一覧

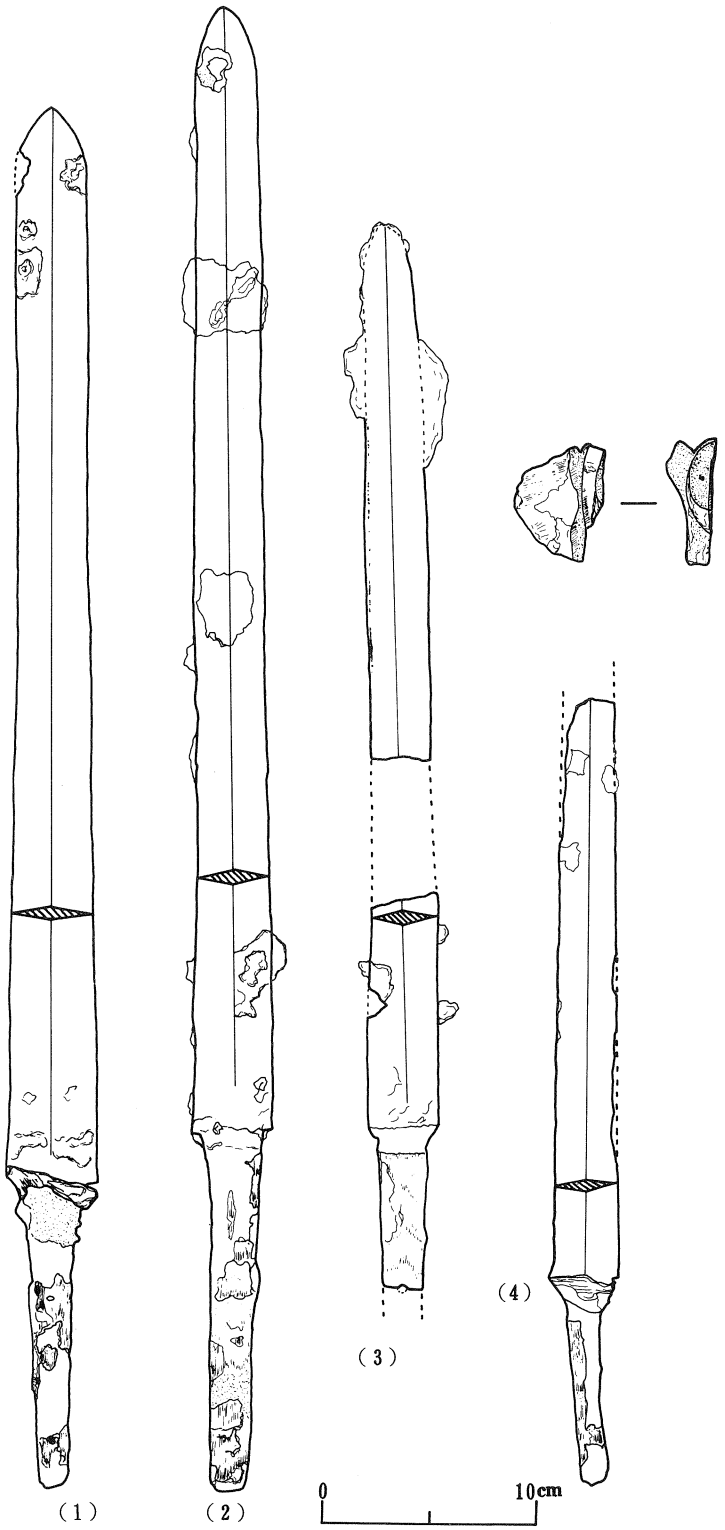
図面番号	全長	刃部			柄部			備考
		長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	
16－1	64.4	50.2	3.3～4.3	0.6	14.2	1.6	—	鏑
〃－2	69.2	52.5	2.8～3.7	0.7	16.7	2.0	—	鏑
〃－3	25.0 18.5	—	2.4～3.3	0.7	(7.0)	2.1	—	途中欠損。鏑
〃－4	36.6	(27.0)	3.0	0.5	9.7	1.4	—	鏑。鹿角装有り

(　) は現存長　単位＝cm

表7　B－13号出土直刀・鉄剣等一覧

図面番号	全長	刃部			柄部			備考
		長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	
18－1	(76.0)	(67.9)	2.4～3.8	0.5	8.1	—	—	直刀。直弧文鹿角装有り
〃－2	(63.7)	(57.4)	3.1～3.8	0.6	4.3	—	—	直刀
〃－3	(80.0)	(64.4)	3.6～4.9	0.6	(15.2)	—	—	鉄剣。鏑
〃－4	26.3	20.6	3.0	0.5	5.7	—	—	鉄剣
〃－5	(11.2)	(11.2)	3.2	0.8	—	—	—	直刀残欠
〃－6	(9.2)	—	—	—	(9.2)	—	—	柄部残欠
〃－7	(9.1)	—	—	—	(9.1)	—	—	〃
〃－8	(6.2)	(2.9)	1.0	0.3	(3.3)	—	—	刀子

(　) は現存長　単位＝cm



第16図　B－12号地下式横穴墓 副葬品実測図

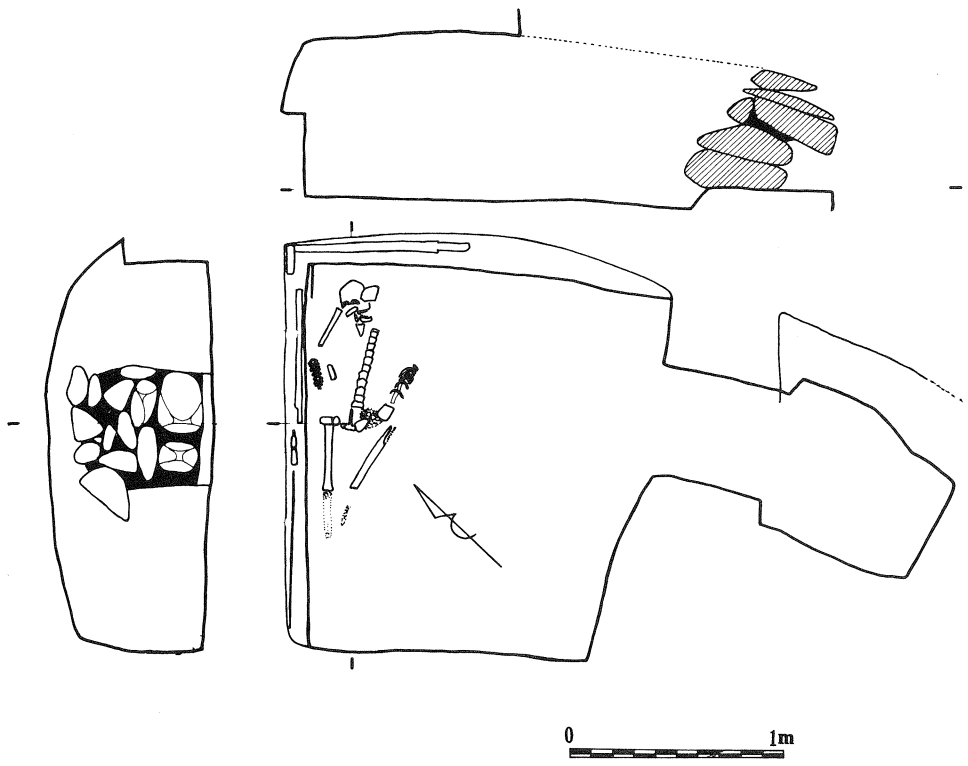
B－13号地下式横穴墓

主軸を北西の方向にもち、玄室を北、竪壙を南にもつ、竪壙と玄室の関係のやや歪つな、平入り型の両袖の地下式横穴墓である。閉塞には、幼児大から人頭大の河原石を用いている。

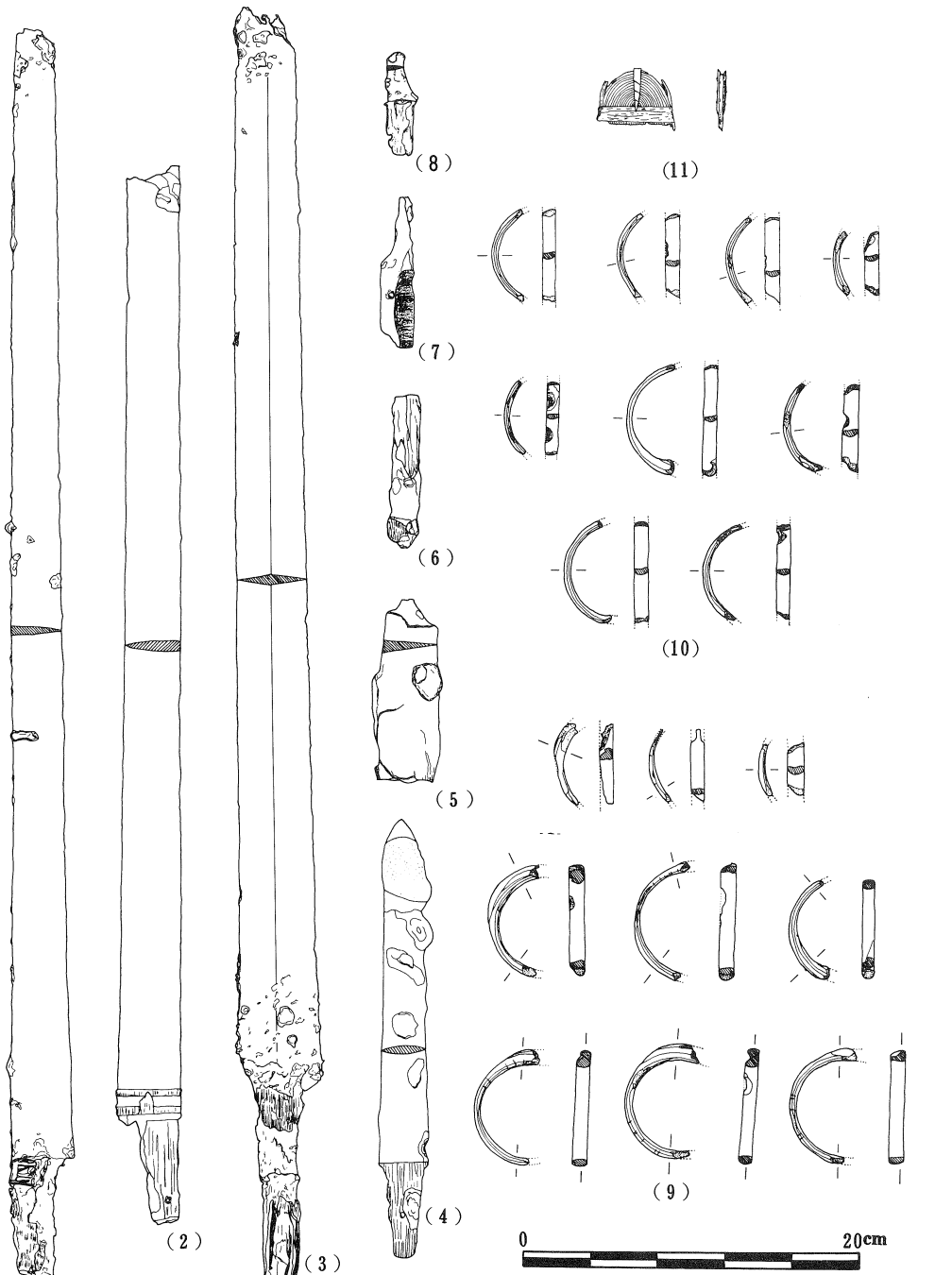
玄室の東壁170㎝、西壁130㎝を計り、奥壁はおおよそ180㎝を計る。棚状施設は、東壁と奥壁にのみみられ、10～20㎝の幅である。天井までの高さは80㎝ほどで、天井の形状は稜線をえがかず、丸い。

竪壙は、ほぼ南北に長く、長軸75～85㎝、短軸50～70㎝を計る。羨門部幅50㎝、羨道の長さ50～60㎝である。

被葬人骨は奥壁に寄り1体で、両腕には貝輪が着装されている。副葬品は棚状施設上に置かれている。



第17図　B－13号地下式横穴墓



(1)～(2)直刀　(3)剣　(4)短剣　(5)刀　(6)柄部　(7)～(8)刀子
(9)～(10)貝輪　(11)櫛

第18図　B－13号地下式横穴墓 副葬品実測図

B－14号地下式横穴墓

主軸をほぼ東西にし、玄室を東、竪壙を西にする、定形化された切妻・平入り型のタイプであるが、両袖の形はやや偏した地下式横穴墓である。竪壙の形状は明らかでないが、羨門の閉塞には河原石が用いられたものと思われる。

玄室は、南北壁が180㎝、奥壁が200㎝を計り、天井の高さは75㎝である。10～20㎝幅の棚状施設は、南北壁と奥壁の3面にみられる。羨道はやや南に偏して付いており、幅は60㎝程である。

被葬人骨は奥壁に2体認められ、副葬品は南壁にのみみられる。

第19図　B－14号地下式横穴墓

表8　B－14号出土直刀・刀子一覧

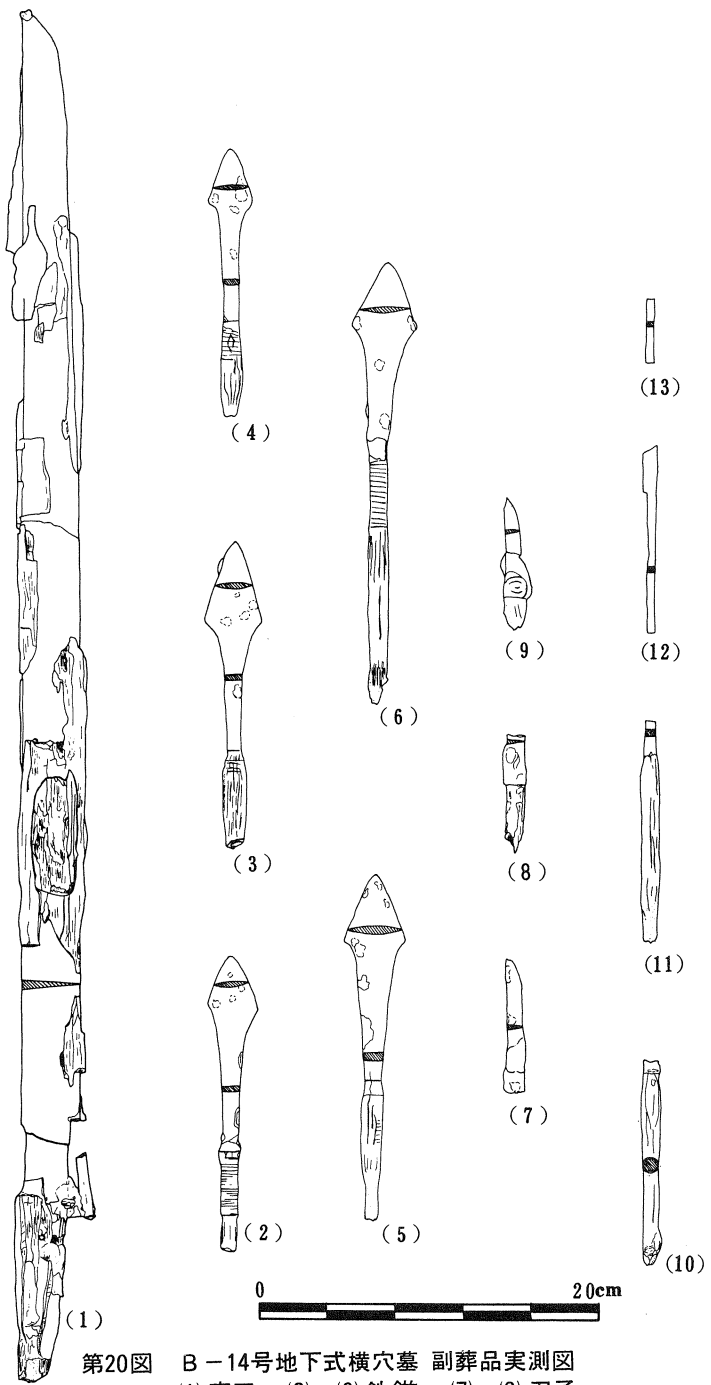
図面番号	全長	刃部			柄部			備考
		長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	
20－1	80.8	65.4	2.0～3.5	0.6	15.4	2.5	—	直刀
〃－7	(8.0)	6.7	0.7～1.1	0.3	—	—	—	刀子
〃－8	(7.0)	(3.0)	1.0	0.3	(4.0)	1.1	0	〃
〃－9	(7.8)	—	0.9	0.3	—	—	—	〃

(　) は現存長　単位 = cm

表9　B－14号出土鉄鏃一覧

図面番号	鉄鏃形式	全長	鏃身		茎部		矢柄		備考
			幅	厚さ	幅	厚さ	長さ	径	
20－2	変形圭頭斧箭式	17.5	3.0	0.4	1.0	0.3	6.6	1.0	
〃－3	〃	18.1	3.3	0.4	1.0	0.4	5.8	1.4	
〃－4	〃	15.8	2.6	0.3	1.0	0.4	5.6	1.3	
〃－5	〃	20.5	3.6	0.5	1.1	0.5	8.3	1.3	
〃－6	〃	26.0	3.8	0.4	1.3	—	14.5	1.2	
〃－10	—	(12.1)	—	—	—	—	(12.1)	0.9	矢柄のみ
〃－11	—	(13.2)	—	—	0.6	0.4	11.2	1.1	〃
〃－12	片刃箭式	(11.1)	0.9	—	0.5	0.4	—	—	
〃－13	〃	(3.7)	—	—	0.5	0.3	—	—	

(　) は現存長　単位 = cm



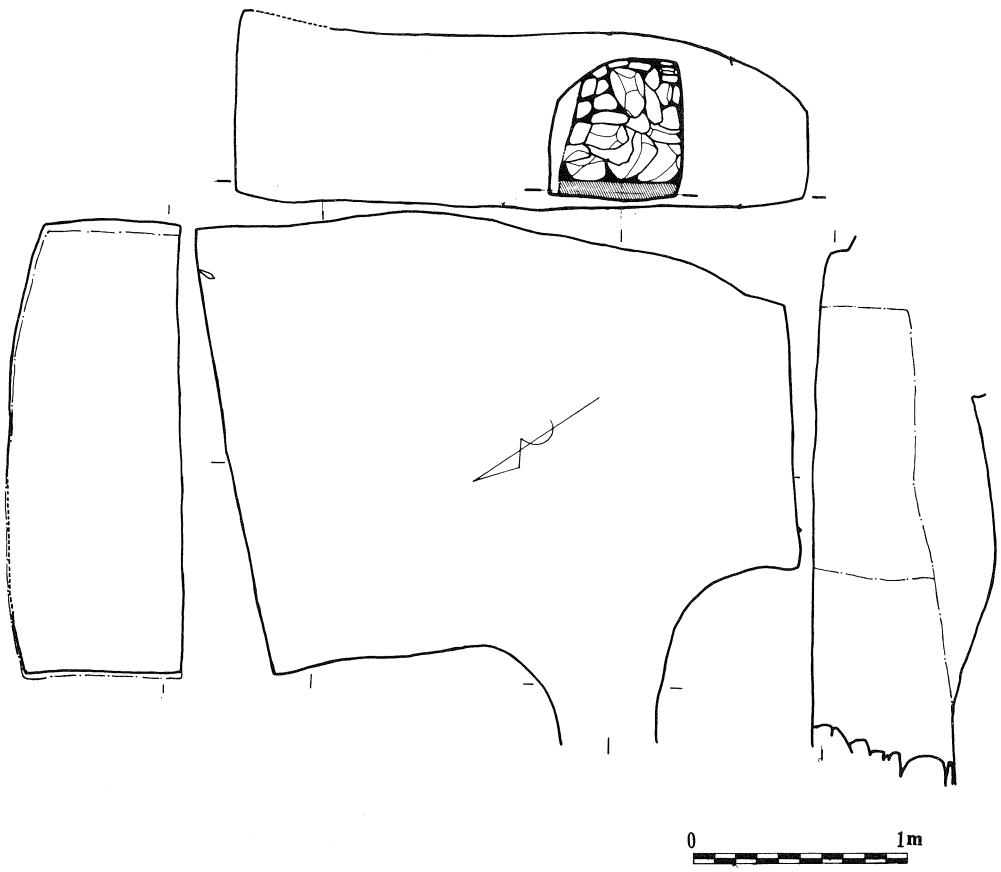
第20図　B－14号地下式横穴墓 副葬品実測図
(1) 直刀　(2)～(6) 鉄鏃　(7)～(9) 刀子
(10)～(13) 矢柄

B－15号地下式横穴墓

主軸を南東の方向にもつ、不整形の平入り型両袖の地下式横穴墓である。

竪壙は失われているが、閉塞は人頭大の河原石の平積みで、羨道部の確認し得る部位での幅は44cmと狭い。玄室の長軸は260 cm、短軸は北壁幅で210 cm、南壁幅で120 cm、天井の高さ80cmを各々計る。

人骨の被葬の痕跡は、実測図中に記されていないが、刀子が北東隅に1本認められる。



第21図　B－15号地下式横穴墓

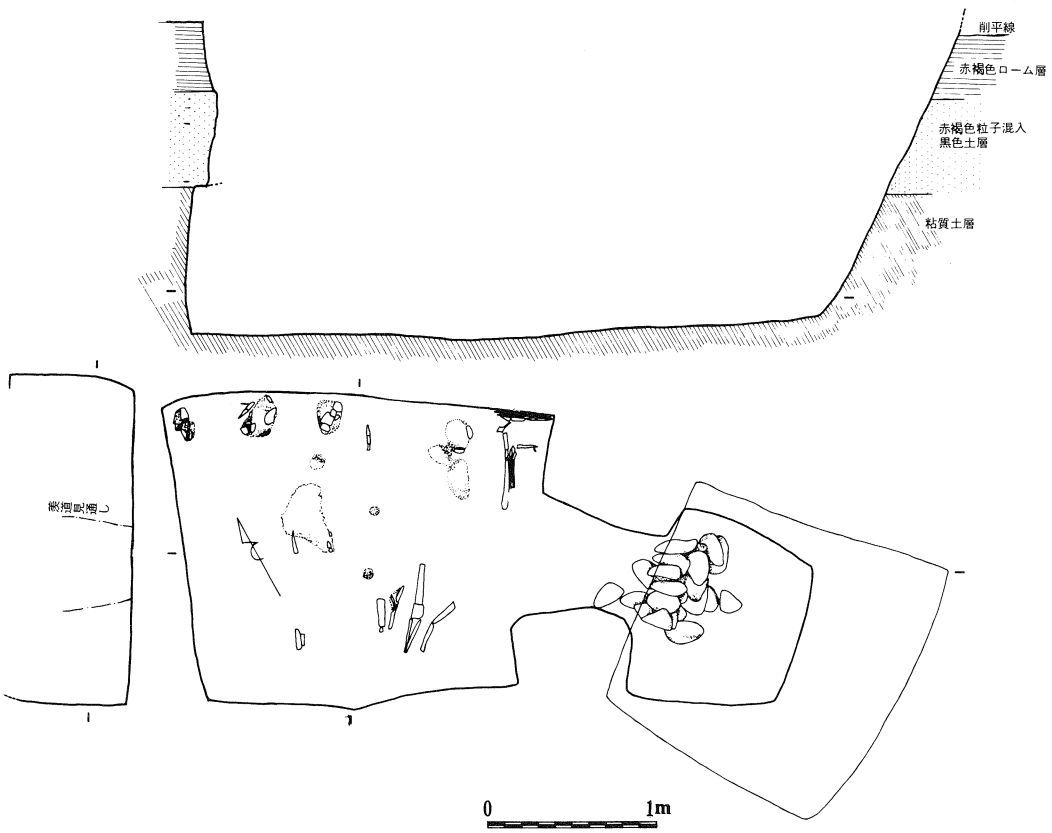
C－1号地下式横穴墓

主軸をほぼ東西にもち、玄室を西、竪壙を東にする、竪壙と玄室の関係が歪つな両袖の地下式横穴墓である。

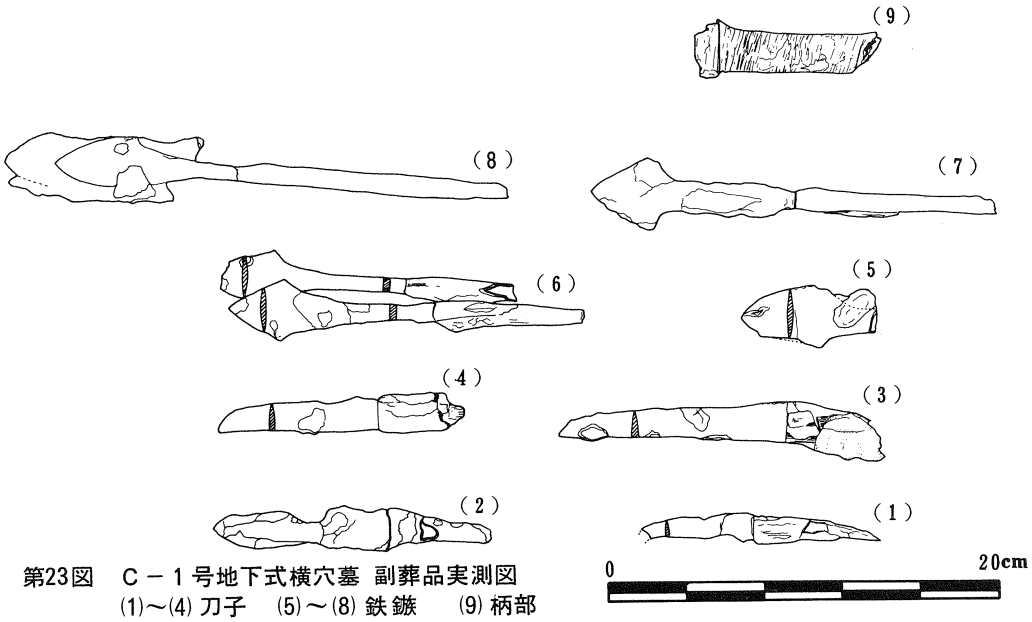
竪壙の掘り方は1辺140～160㎝の正方形に近く、底面は台形状を呈し、その長辺に羨門が付く。台形状の長辺110㎝、短辺80㎝で幅90㎝を計る。羨門の閉塞は河原石積みであるが、全体に小ぶりの人頭大の河原石を用いている。

羨門部幅50㎝、羨道の長さ70㎝を計る。玄室も歪つであるが、北壁が230㎝と長く、奥壁は170㎝、南壁は180㎝を各々計る。

被葬人骨は奥壁添いから4体認められ、副葬品の多数は玄室入口の右隅に一括されている。



第22図　C－1号地下式横穴墓



第23図　C－1号地下式横穴墓 副葬品実測図
(1)～(4) 刀子　(5)～(8) 鉄鏃　(9) 柄部

表10　C－1号出土刀子一覧

図面番号	全長	刃部			柄部			備考
		長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	
23－1	(12.4)	(5.8)	0.8	0.2	6.6	—	—	
〃－2	14.4	—	—	—	—	—	—	
〃－3	16.8	11.6	1.0～2.1	0.4	5.2	2.2	—	
〃－4	12.7	8.3	1.1～1.6	0.3	4.4	2.0	—	
〃－9	(9.4)	—	—	—	(9.4)	2.1	—	柄部残欠

(　) は現存長　単位＝cm

表11　C－1号出土鉄鏃一覧

図面番号	鉄鏃形式	全長	鏃身		茎部		矢柄		備考
			幅	厚さ	幅	厚さ	長さ	径	
23－5	変形圭頭斧箭式	(7.0)	(3.2)	0.3	—	—	—	—	残欠
〃－6	〃	18.3 15.4	3.1	0.3 0.3	0.8 0.7	0.4 0.4	7.8 5.9	1.1 1.1	
〃－7	〃	20.0	3.8		0.9		10.4	1.0	
〃－8	〃	23.4			0.7		14.1	1.0	

(　) は現存長　単位＝cm

C－2号地下式横穴墓

主軸を南西の方向にもち、玄室を南、竪壙を北にもつ、平入り型のやや楕円形のプランを呈する地下式横穴墓である。閉塞は河原石積みによる。

竪壙は長軸80～90cm、短軸60cm程度、羨門の幅60cmを計る。玄室は、長軸200 cm、短軸100 cmで、実測図で推定される天井の高さは70cm程である。

被葬者は1体とみられる。

C－3号地下式横穴墓

主軸を北東の方向にもち、玄室を北、竪壙を南にもつ、両袖の妻入り型とみられる地下式横穴墓であるが、全体に造りは荒く不整形である。

竪壙の底面は長方形状を成し、長軸170 cm、短軸60～90cmである。羨道幅は75cm程度、高さは100 cmを計る。玄室の長軸は280 cm、短軸は190 cmを計り、推定される天井部の高さは110 cmである。

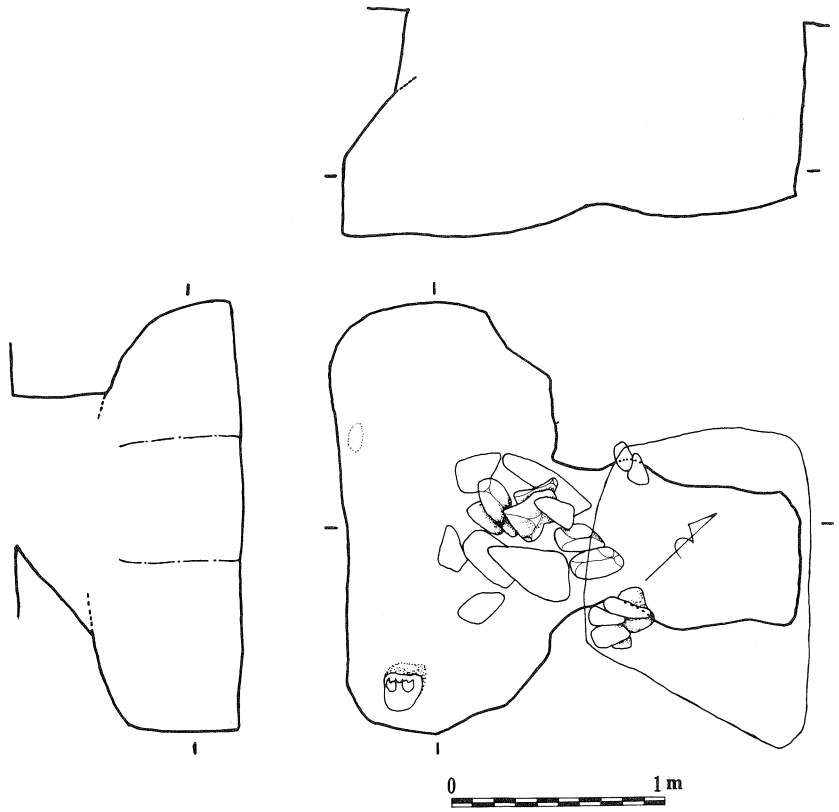
被葬人骨は、玄室の長軸に添い検出されており、南壁寄りに被葬されている。

C－4号地下式横穴墓

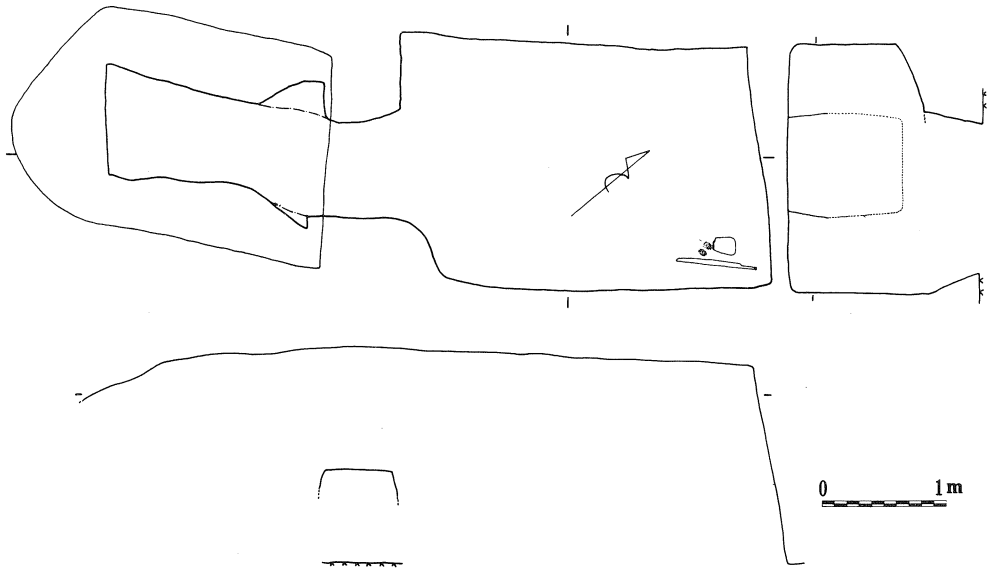
主軸をほぼ東西にもち、玄室を東、竪壙を西にする、平入り型の両袖の地下式横穴墓である。

竪壙の掘り方は長方形を呈するが、底面は極端に狭く、長軸80cm、短軸45cmを計る。玄室は台形状を呈し、奥壁が170 cmと狭い。南北壁共160 cm程で、入口壁は220 cmで、天井部の高さは推定で90cm程である。幅15cmの棚状施設は南壁にのみ認められる。羨門の閉塞は河原石積みである。

被葬人骨は奥壁に添い1体認められ、直刀・刀子などが被葬者に相添い副葬されているほかは、鉄鏃など棚状施設上に副葬されている。



第24図　C－2号地下式横穴墓

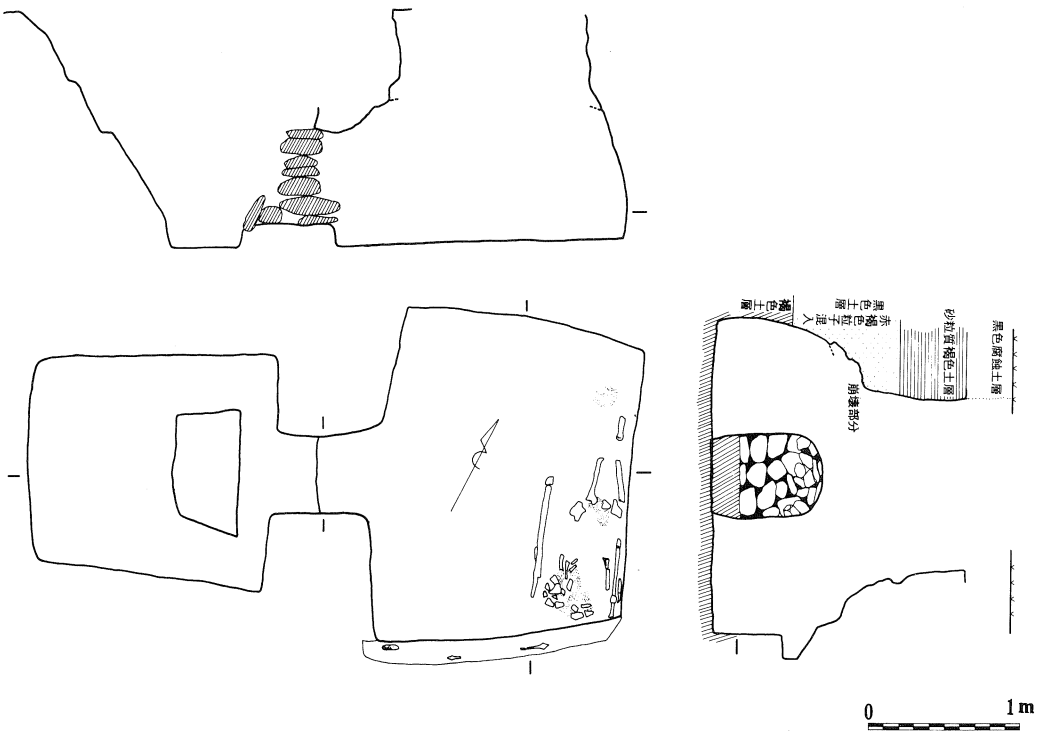


第25図　C－3号地下式横穴墓

表12　C－3号出土鉄剣・刀子一覧

図面番号	全長	刃部			柄部			備考
		長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	
27－1	(64.0)	(50.6)	3.2	0.5	(12.7)	1.9	0.4	細紐巻き柄。鉄剣
〃－2	(63.5)	(50.2)	3.1	0.4	(13.3)	1.7	—	細紐巻き柄。鉄剣
〃－3	(15.4)	11.5	1.1～1.5	0.3	(3.9)	1.2	—	刀子

(　　)は現存長　単位＝cm



第26図　C－4号地下式横穴墓

表13　C－4号出土直刀・鉄剣等一覧

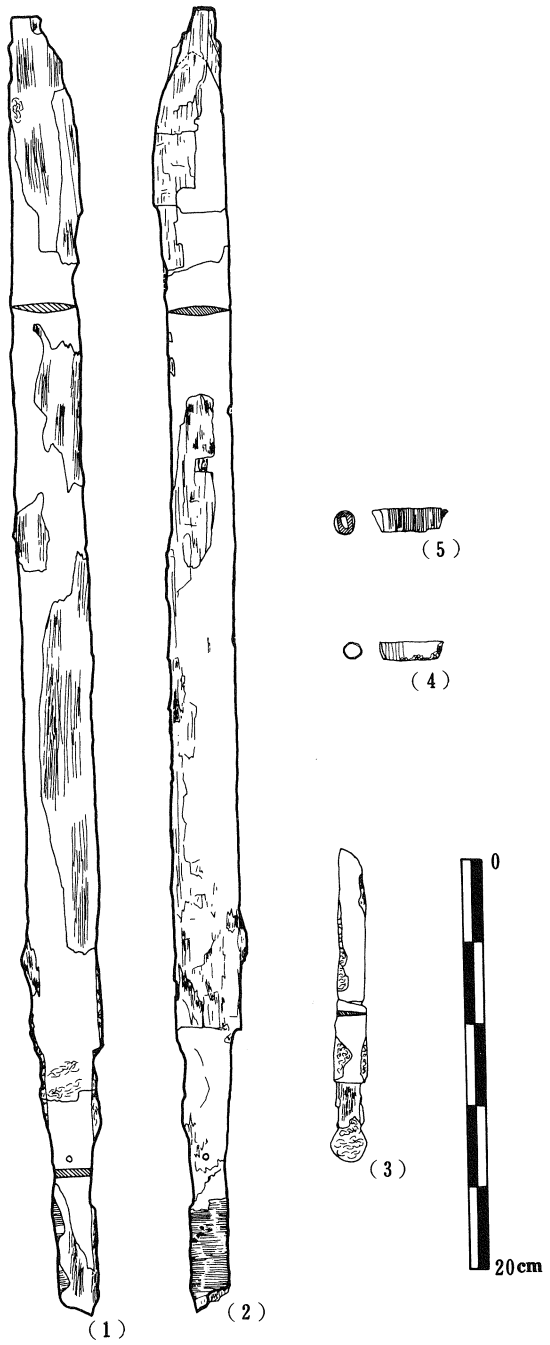
図面番号	全長	刃部			柄部			備考
		長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	
28－1	(67.1)	(59.3)	3.5	0.8	(7.8)	—	—	直刀
〃－2	53.8	38.2	2.7～3.5	0.5	15.6	—	—	平織り糸巻き柄。鉄剣
〃－3	32.5	—	—	—	—	—	—	
〃－4	17.0	7.4	1.0～1.6	0.3	9.6	1.5	—	刀子

(　　) は現存長　単位＝cm

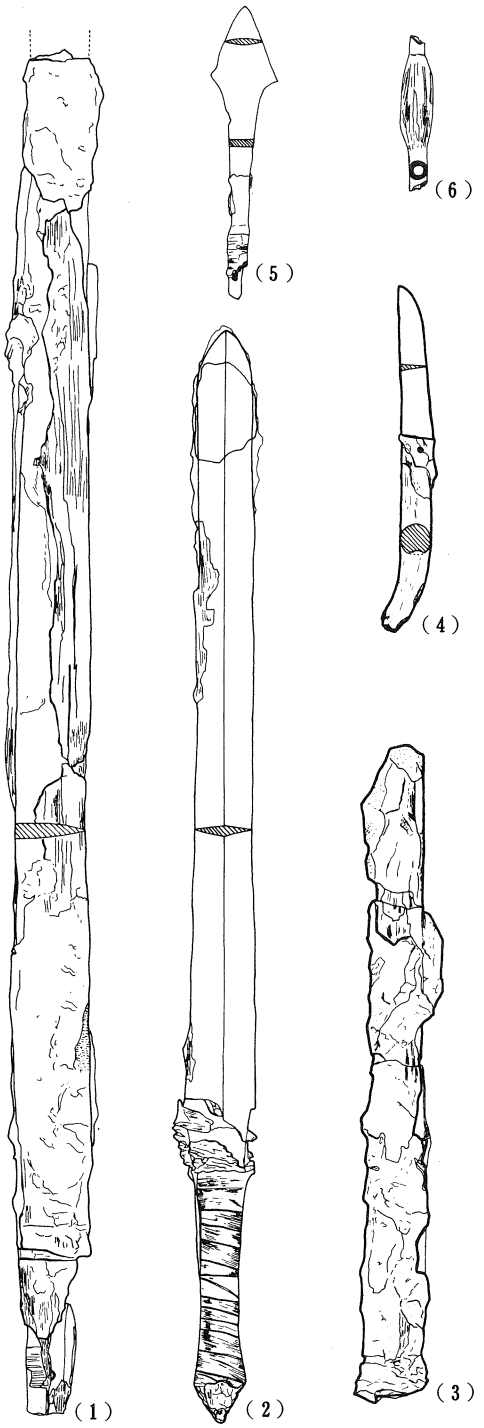
表14　C－4号出土鉄鏃一覧

図面番号	鉄鏃形式	全長	鏃身		茎部		矢柄		
			幅	厚さ	幅	厚さ	長さ	径	
28－5	変形圭頭斧箭式	14.4	3.2	0.3	1.0	0.4	5.0	1.0	

(　　) は現存長　単位＝cm



第27図　C－3号地下式横穴墓副葬品実測図
(1)～(2) 剣　(3) 刀子　(4)～(5) 矢柄



第28図　C－4号地下式横穴墓副葬品実測図
(1) 直刀　(2)(3) 剣　(4) 刀子
(5) 鉄鏃　(6) 矢柄

C－6号地下式横穴墓

主軸をほぼ東西にもち、玄室を東、竪壙を西にする両袖の地下式横穴墓である。

竪壙の底面は1辺70㎝のほぼ正方形を成す。羨道部幅50㎝、長さ70㎝、高さ70㎝を各々計る。

玄室もほぼ正方形に近く230～240㎝で、棚状施設は南壁にのみあり、奥壁に向い35㎝程の幅広なものとなる。

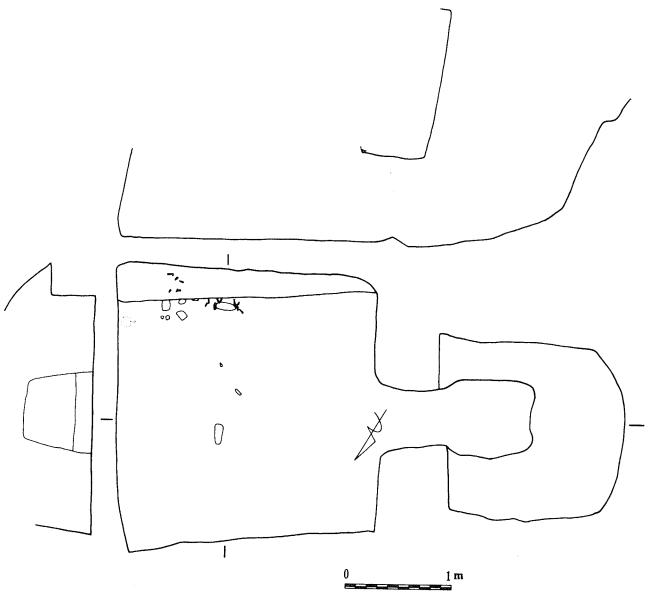
副葬品は、棚状施設及びその下床面に認められる。

C－7号地下式横穴墓

主軸をほぼ東西にもち、玄室を西、竪壙を東にする両袖の切妻・平入り型の地下式横穴墓である。羨門の閉塞は河原石積みである。

竪壙の掘り方は上面で長方形を呈し、長軸175㎝、短軸150㎝で、底面は長軸120㎝、短軸80㎝を計る。玄室は長軸230㎝、短軸190㎝、天井の高さ105㎝である。

被葬人骨は奥壁添いから2体埋葬されていたものと思われ、副葬品は頭部及び足下の3箇所で検出されている。



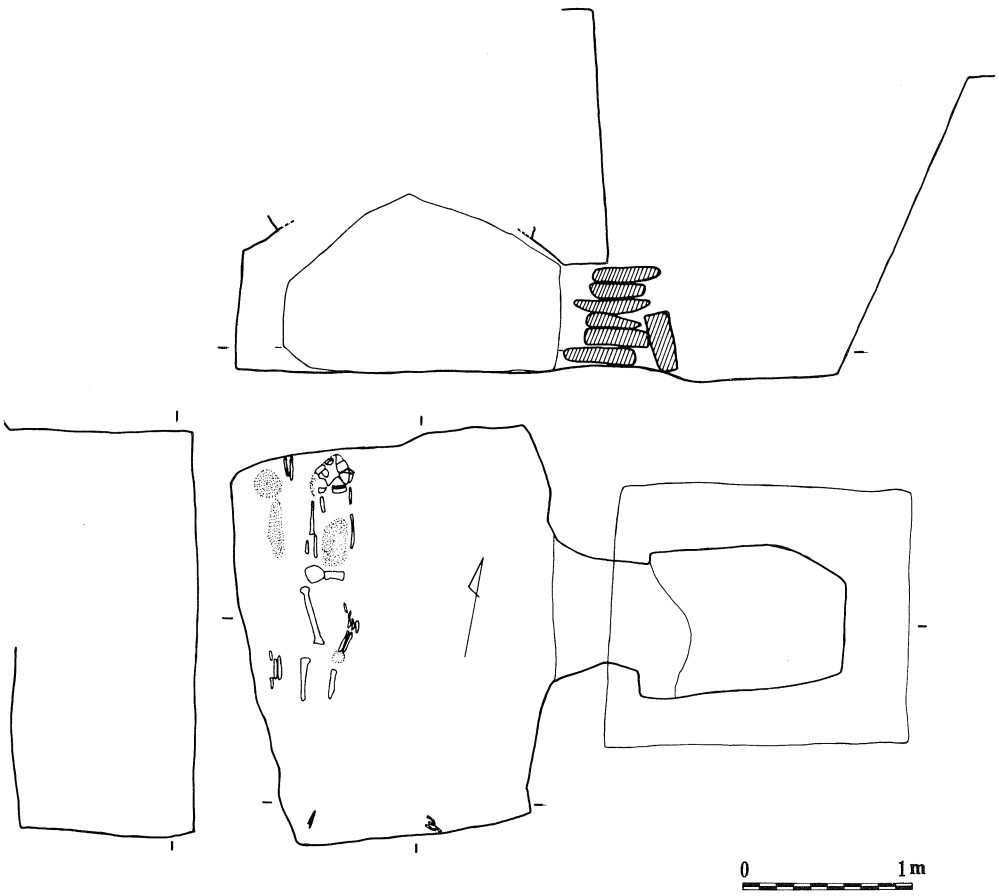
第29図　C－6号地下式横穴墓

C－8号地下式横穴墓

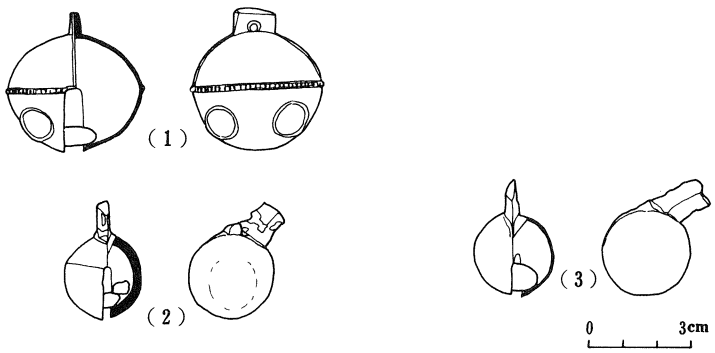
主軸をほぼ東西にもち、玄室を西、竪壙を東にする両袖の平入り型の地下式横穴墓である。全体に荒い造りであるが、寄棟に造られた屋根形がはっきりしており、四周には幅5㎝前後の不整形な棚状施設がめぐらされている。

竪壙は台形状を成すが、北半分は破壊されている。羨門幅55㎝、羨道の長さ50～60㎝、羨道部の高さ70㎝を計る。玄室の長軸240㎝、短軸180㎝、棟木造りの長さ150㎝、天井の高さ100～120㎝を計る。

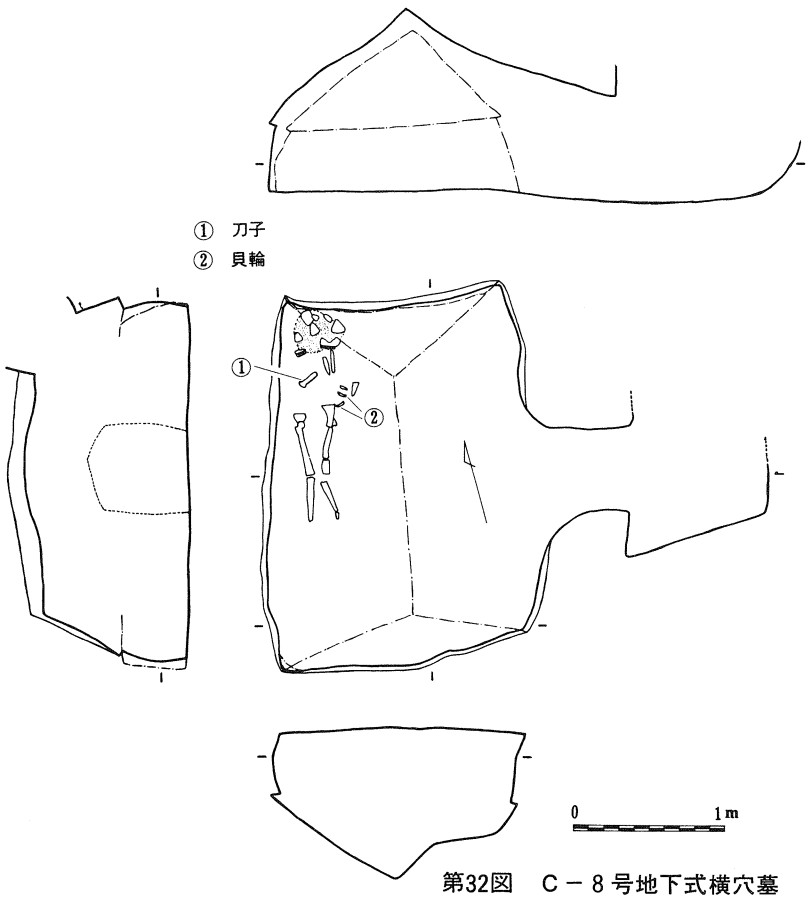
被葬人骨は、奥壁に添い1体認められ、　左腕には貝輪が着装されている。



第30図　C－7号地下式横穴墓



第31図　C－6号地下式横穴墓鈴実測図



第32図　C－8号地下式横穴墓

表15　B地区地下式横穴墓一覧

地下式横穴墓番号	第22集 表番号	第22集 分布図	構造形式 ※方位（竪壙～玄室）	被葬者数	副葬品	備考
B－1	同	同	平入り・左片袖・河原石積み閉塞（南～北）	1体	（鉄剣1，刀子1～3）	
B－2	〃	〃	両袖棚状施設（1壁面のみ）（南南西～北北東）	5体	鉄剣7（鹿角装）刀子6，骨鏃1，斧頭1，U字型鋤先1，石突（鉄鐸）5，不明鉄器1	
B－3	〃	〃	平入り・両袖（北東～南西）	1体	（刀子1）	
B－4	〃	〃	平入り・両袖（北東～南西）	3体		竪壙に土器片(?)
B－5	〃	〃	平入り・両袖（南～北）	?		
B－6	〃	〃	平入り・両袖（北北東～南南西）	3体(?)	（刀子1）	
B－7	〃	〃	平入り・左片袖・河原石積み閉塞・切妻屋根形棚状施設（4壁面）	4体	（鉄鏃7～8、直刀あるいは鉄剣4）	束木浮彫り
B－8	〃	〃				図面なし
B－9	B－9	B－10	妻入り・右片袖・河原石積み閉塞　棚状施設（4壁面）（北～南）	4体	直刀1，鉄剣1，鉾1，刀子2，鉇1，鉄鏃12	
B－10	B－11	B－11	平入り・左片袖・河原石積み閉塞・切妻屋根形棚状施設（4壁面）	2体	（鉄鏃ほか）	束木浮彫り
B－11	B－10	B－12	平入り・両袖（東～西）	2体		
B－12	B－12	B－13			鉄剣4（鹿角装）	図面なし
B－13	B－13	B－14	平入り・両袖・河原石積み閉塞　棚状施設（2壁面）（南東～北西）	1体	直刀2～3，鉄剣2，刀子1，貝輪10～12，櫛1	
B－14	B－14	B－15	平入り・両袖・河原石積み閉塞　棚状施設（3壁面）（南西～北東）	2体	直刀1，刀子3，鉄鏃8～9	
B－15	B－15	B－16	平入り・両袖・河原石積み閉塞（北西～南東）		（刀子1）	
		B－9				

表 16　C 地区地下式横穴墓一覧

地下式横穴墓番号	第 22 集		構造形式 ※方位（竪壙～玄室）	被葬者数	副葬品	備考
	表番号	分布図				
C－1	同	同	両袖・河原石積み閉塞（東南東～西北西）	4本	刀子4，鉄鏃6，柄部残欠1（直刀あるいは鉄剣）	
C－2	〃	〃	平入り・両袖・河原石積み閉塞（北東～南西）	1体		
C－3	〃	〃	妻入り・両袖（南西～北東）	1体	鉄剣2，刀子1，直刀(?)	
C－4	〃	〃	平入り・両袖・河原石積み閉塞　棚状施設（1壁面）（西南西～東北東）	1体	直刀2，鉄剣1，刀子1，鉄鏃1～2	
C－5	－	－				図面なし
C－6	同	同	平入り・両袖 棚状施設（1壁面）		鈴3	
C－7	〃	〃	平入り・両袖・河原石積み閉塞・切妻屋根形（東～西）	2体	（鉄鏃）	
C－8	C－5	C－5	平入り・両袖・寄棟屋根形　棚状施設（4壁面）（東～西）	1体	（刀子1，貝輪2）	

Ⅳ．土壙等出土の遺構と遺物

Ｂ－７号の竪穴出土遺物

土器（第33図）

竪穴の埋土排出中に発見された竪穴内部の出土品である。いずれも細かに破砕されており、完形品は出土しなかった。

⑴は、復元の結果、扁球形の器体に広口の長頸をつけた長頸壺であった。底部を欠くが、丸底か、丸底に近い小さな平底になるものと考えられる。器壁は、内面は刷毛目痕が残るが、外面は篦磨きされ滑らかな光沢のある器肌を見せている。頸部外面には刷毛目調整痕が残され、篦磨きのあとはない。胎土はきめ細かく、焼成も堅緻である。色調は黄褐色を呈する。

復元器高は22㎝、口径12㎝、頸長10㎝、胴最大径15㎝を計る。

⑵と⑶は、胎土、焼成、色調から同一個体の口縁部と底部とみられるものである。断片的な胴部破片を総合して、復合口縁をもった胴張り平底の比較的大形の壺形土器が予想される。口縁の立上り部分は横なでされており櫛描波状文等の施文はみられない。器面には部分的に刷毛目痕が残っている。胎土は、砂粒の混入がみられるが、全体的にはきめ細かである。焼度も高く堅緻である。色調は灰黄色を呈する。器面の所々に朱の付着痕があり朱と同時に取扱われたことを示している。推定口径21㎝内外である。

⑷は、推定口径９㎝ほどの椀形土器片である。器面は篦磨きされ、横なでされた口縁部との境には小さな段がみえる。胎土は精選されきめ細かである。焼成も良く、色調は灰褐色を呈する。部分的に朱の付着がみられる。

土　壙

Ｂ地区では、地下式Ｂ－２号を内蔵していた指定円墳の北方に、３基の土壙が発見された。いずれも、ブルドーザーによって上部の土層（Ⅰ黒土層、Ⅱ褐色粘質土層、Ⅲ黒褐色土層）を削除されたオレンジ層に、長方形や長楕円形に黒土の陥没があったことから存在が確認されたものである。

３基の土壙は、調査順に指定円墳からみて右端になる東側町道寄りのものからⅠ号、左端・西側に位置するものをⅡ号、両者の中間に位置した土壙をⅢ号と呼称した。

Ⅰ号土壙　（第35図１）

指定古墳の北々東34ｍの位置にある。土壙は、長軸の方位をＥ16°Ｓの東西方向に置いた全長135㎝の長方形であった。幅は東端で58㎝、西端幅45㎝と、西側に狭くなっていた。オレ

ンジ層内に掘り込まれた壙底は平担で、側壁はほぼ垂直に立ち上り、現存壁高は40㎝であった。上層を削除されているため掘り込み面の確認はできなかったが、恐らく、黒褐色土層中にあったものと推定される。人骨は遺存しなかったが、頭位は主軸方向の東西いずれかに置かれていたことになる。仮に、土壙両端の広狭の差が、遺骸の外形に応じた結果だとすれば、Ⅰ号土壙の頭位は、東南東に置かれていたものといえる。

副葬品は検出されなかったが、土壙周辺から数点の土器片が採集された。

土器片は、第34図に示した4点である。(1)は、くの字に屈折した胴部破片で、屈折部の上部に斜行する9本の条線が描かれており、免田式土器と考えられる。(2)と(3)は高坏の脚部破片である。どちらも脚柱に篦調整痕が残る。坏部と脚底を欠くが、(4)の破片から、外傾する椀状の坏部に、裾開きの脚底をもつ高坏が予想される。胎土は精選されきめ細かである。焼成も良く比較的堅緻である。色調は赤褐色を呈する。予想される器形からは、古式土師器とも考えられる。

これらの土器が、Ⅰ号土壙の送葬に伴った供献土器の一部であることは、採集位置や出土状況から判断して間違ないであろう。

Ⅱ号土壙　（第35図2）

Ⅰ号土壙の西方13ｍ、指定円墳からは北へ27ｍの位置にある。土壙は、長径173㎝、短径65㎝の長楕円形で、長軸方位はN35°Wに置かれていた。上層の削除がひどく、残存壁高25㎝であった。側壁は外傾し、壙底は狭く、全長115㎝、南東側で幅40㎝、北西端幅25㎝の床面を造成していた。人骨の遺存はなかったが、床面の形から頭部方向は南東側に置かれていたと推定される。

副葬品は発見されなかった。

Ⅲ号土壙　（第35図3）

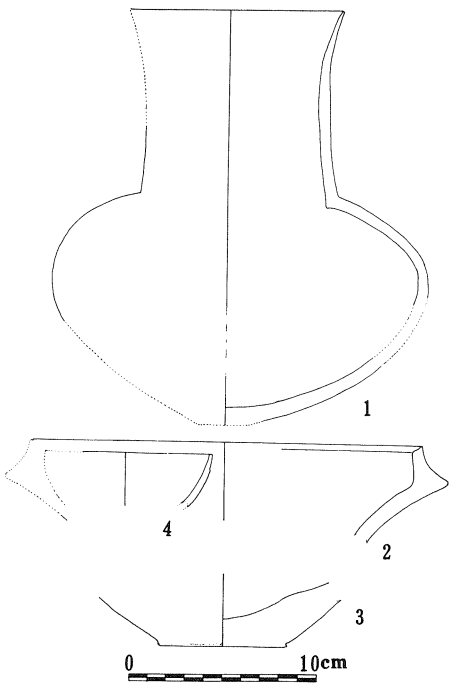
Ⅲ号土壙の位置は、Ⅰ号の西方7ｍ、Ⅱ号からは東に5ｍの地点である。指定古墳までの距離は3基中最も遠く37ｍであった。

土壙は、長軸方位をN4°Wのほゞ南北方向に置き、長径126㎝の長方形に掘り込まれていた。幅はⅠ、Ⅱ号同様に広狭がみられ、南端で60㎝、北側幅50㎝であった。側壁は、南北両端は垂直に、両側の長壁は中凹みに掘り込まれていた。床面は北端に凹みがみられたがほぼ平担であった。本土壙にも副葬品は検出されなかった。

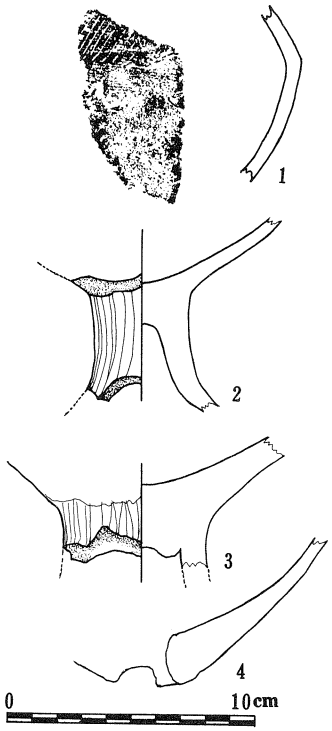
以上大萩Ｂ地区の3基の土壙は、いずれも副葬品がなく、時代推定の手懸はⅠ号土壙周辺から採集された土器片があるだけである。採集土器片中、免田式土器からは、弥生終末に位

置づけられるが、古式土師器とみられる高坏の存在など、実年代はかなり下ることが考えられる。

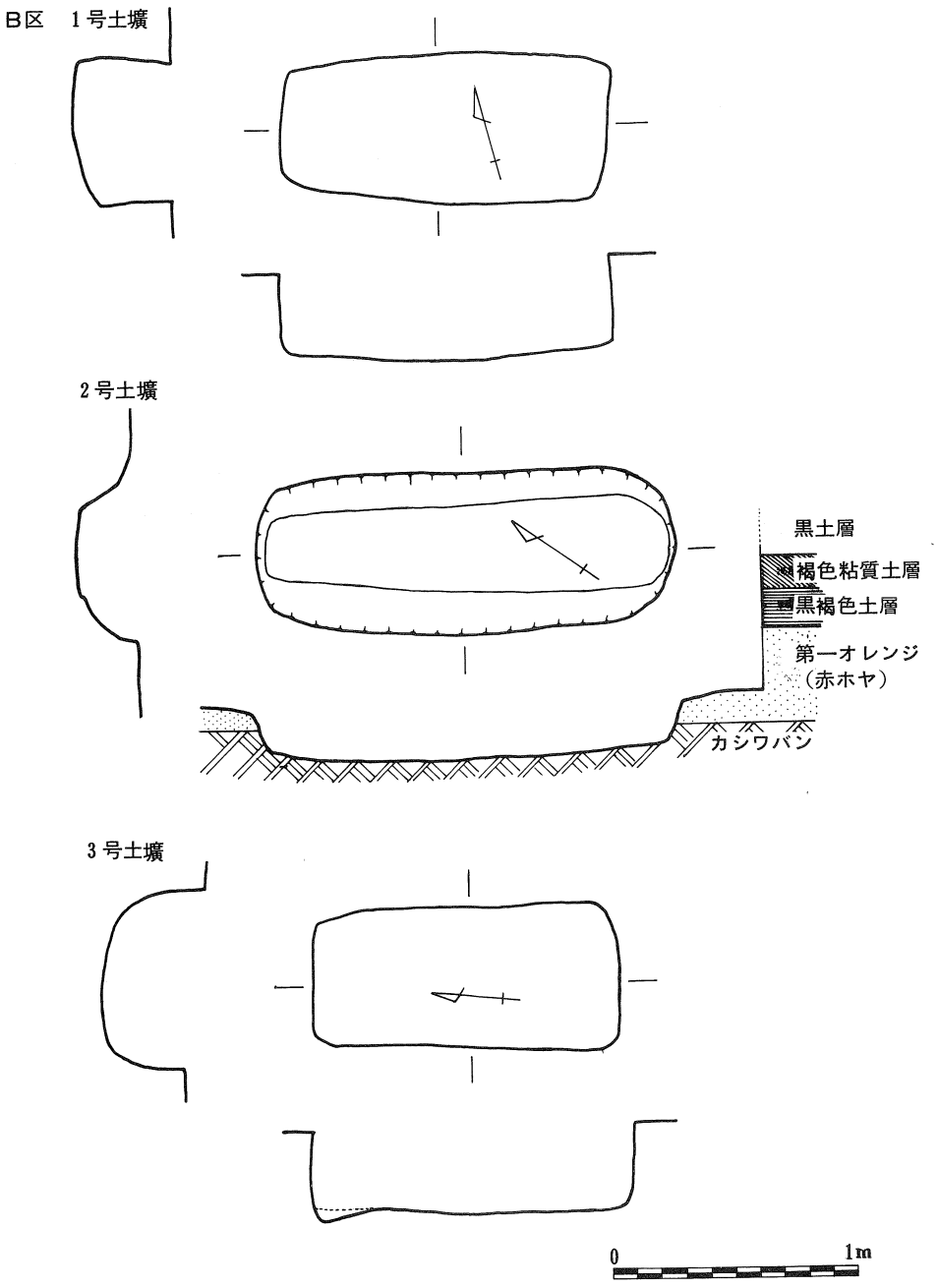
また、3基の土壙は主軸の方位や、遺体の外形に適応したとみられる土壙両端の広狭から東乃至南方向に頭位を置く慣習をもっていたことが推定される。しかし、東西寄りに方位をとるⅠ号と、より南北に近く方位を置くⅢ号との間には、頭位にかなりの開きがみられる。こうした主軸方位による頭位の違が何に起因するものか、副葬品や人骨の遺存がないだけに今後の課題としたい。



第33図　B－7号竪穴出土の土器



第34図　1号土壙供献土器実測図



第35図　土壙実測図

V．大萩B－13号墓出土の研磨刀剣について

大萩B－13号墓の副葬品中、棚状施設に置かれていた剣1振と直刀1振、それに埋葬遺骸に沿って納置されていた直刀1振、都合3振の刀剣は、出土当時刀身の一部に地金の肌がみえるほど極めて保存状態良好なものであった。

54年秋に、宮崎県総合博物館が開催した国体開催記念特別展「日向の古墳展」に、幾多の地下式横穴出土品と共に、大萩B－13号墓出土の刀剣3振も展示された。この時にはすでに全体に錆化し、出土当時の地鉄の光沢は薄れていたが、他の刀剣に比べ錆の浅いことは即座に観察できる状態であった。偶、展観中に来場された刀剣研師星加哲見氏が、すぐにこの錆の浅い刀剣を目にとめられたことから研磨の話が進み、出土刀の保存と、刀剣の実態を観察する目的をもって研磨に踏み切ったのであった。なにしろ県内の出土刀としては初めての試みでもあり、若干の危惧もなくはなかったが、館蔵刀剣の研磨の実績の深い星加哲見氏だけに全幅の信頼をもって研磨を依頼したのであった。研磨にあたって、出土刀剣の意外な出来に感嘆された星加氏は、その研磨所感の中で、「…実は古代刀であるので大した事はないだろうと思っていたが、その地鉄のすばらしさに驚嘆させられ……地鉄の表面にみる地沸は、まるで銀梨子を見る如く、すかし見る映りは……朝霧が山の谷間にたちこめるような幽玄さに…すっかり魅了させられてしまった…」と、述べられている。

今日、「日本刀の鑑定は、半世紀の誤差をも許さない」とまでいわれるようになっている。出土刀剣の地鉄が容易に見わけられ、造刀年代が明確におさえることができるようになれば、時期比定の決め手を欠く地下式横穴墓の編年には、刀剣の副葬が多いだけにこれほど有効な基準はないことになる。しかし、出土刀の多くは深い錆に被われ、研磨できる刀身の数は極めて限定されるだけに、大萩B－13号墓出土刀の研磨は、今後、地下式横穴墓出土刀剣研究上の基礎的な指標となり得るにとどまらず、ひいては日向古刀に繋がる鍛刀技術の発達を究めていく上でも重要な役割を果すことになるものと信じる。同時に、県内の出土刀剣の保存研究に関する検討資料として活かされることを願わずにいられない。

この研磨された刀剣は、昭和55年12月1日から27日までの間、宮崎県総合博物館において、「よみがえる古代の輝き―出土刀剣展」として特別展示を行なっている。

研磨した、刀剣の概要は次の通りである。

1. 切 刃 造 直 刀

全長（現存長）（63.9㎝）、刀長（55.4㎝）鋒を欠ぐ。元幅3.6㎝、元重ね0.6㎝、茎長（7.7㎝）、茎の元幅2.9㎝、茎の元重ね（0.7㎝）

刀姿一反りはほとんどみられない。むしろ稍々内反り気味である。先端部を欠くために切先の状態については明らかにし得ない。切刃は、刃先から鎬までの幅が狭く、傾斜部分の幅は0.8㎝の幅で通り、真直な鎬筋をみせる。棟は角棟に造っている。

区は、刃区の片区となっており、斜めの深い切込みに造る。部分的に欠損もあり完形でないため原形については明確でないが、比較的幅の狭い茎がつく。懸通し孔の有無、目釘孔の位置等確認できない。

地鉄については、大板目になって杢が混り、全面に地沸がこまやかにたち、特に上部の処々に地斑をみる。地景があり、ほのかに模様をみせて映り立つ。また、棟肌は柾目に流れ地が沸えて地景がかるなど、地鉄のすばらしさをみせている。

一方焼刃については、現存部分に関してはみられない。焼入れのない丸鍛ながら切刃部分には刃縁が柾目状に波打って流れている。焼入れのない切刃ながら、刃色は白く浮き立つようにみせた研磨となっている。

3振の研磨刀剣の中では地鉄も精良で、作柄も最良である。軟かい感じの地鉄に杢目肌を混える地肌には、後世の粟田口系を彷彿させる部分もみえる。粟田口系作刀の中に、えびの市真幸吉田産の岩鉄を使用したとされ「日州真幸住――」の銘を切るものがあることは注目される。本刀を含め、西諸県地方の地下式横穴墓の出土刀剣が、どこの鉱鉄を材料としたかいまは明らかでないが、産地の問題も併せ日向古刀との関連など興味深いものがある。斜めに深く鋤き取った片区の形態には、6世紀刀の伝統を残している。しかし、切刃造刀の出現が7世紀を遡り得ないとする各地の出土例に従うならば、本刀もまた7世紀以降のものとみるのが妥当であろう。現在のところ、地下式横穴墓の出土刀の中で、切刃造と考えられるものには、カマス鋒を呈する久見迫1号墓の出土刀と、大萩27号墓出土刀が挙げられる。

2. 平 造 刀

平造、角棟、片区の直刀である。現在長は（76.0㎝）、刃長（68㎝）反りなし、元幅3.2㎝、先幅近く（2.3㎝）、元重ね0.6㎝を測る。茎長は（8㎝）、茎の元幅3.0㎝である。

鋒と茎先を欠損するための刀身の完形は明確でないが、全体に細身の刀身を示す。研磨前には刀身にかなりの曲折があり地鉄の軟かさを示唆していた。区は、切刃造と同様刃区の片

区であるが、切り込みの浅い角区に造っている。茎は、半ばより欠損しているが、3㎝幅のやや広めの形態の茎が予想される。茎元から5.5㎝の位置に目釘孔1個をみる。柄元には直弧文を刻んだ柄木装具部分が残存する。

本刀の地鉄は、板目が大まかに流れ、板目混りとなっている。地沸は厚くつき、上、中、下の三ケ所にほのかな移りをみることができる。刀身中ほどに残る鍛え合せ目の痕跡を界にして、刀身の上下に地鉄の違いをみせている。手元近く大板目をみせる。

焼刃については、鍛え合せ目付近と、先端近くに焼入れの形跡が認められる。焼入れの見える部分には沸粒が凝結してみられ、透しみれば匂いとしてみえる。しかしながら、全体としては明確な焼刃は形成されていないとみた方がよい。

刀身全体としては、大まかな柾目流れとなり鍛造の度合いの低いことをしめしている。ことに刀身の中ほどに残る鍛え合せ目の筋痕は、鍛造の低さを如実に物語るものである。3振の研磨刀の中ではもっとも粗造りの感じの直刀であるが、研ぎ当りは軟かで、大和伝えであり、且つ、波平そのものを感じさせる地肌をみせている。

一般に角区は6世紀の後半には出現している。本刀の場合、棟区がなく、刃区の片区である点、なお6世紀の伝統を残しているといってよい。しかし、共伴の切刃造刀と関連してみれば、やはり7世紀に比定すべきかもしれない。ただ、棟刃両区の角区刀の出土例が少ないだけになお検討の余地がある。

3. 剣

現存長（69㎝）、刃長は（64㎝）、元幅近く4.4㎝、先幅近く3.5㎝、鎬重ねは0.5〜0.6㎝、茎長（5㎝）を計測する。

剣身は比較的幅広く、身幅中央を走る鎬筋を整然と造る両刃の剣である。剣鋒及び茎先の欠損が惜しまれる。

区は、錆化のために明瞭でないが、斜めの削り区になっている。

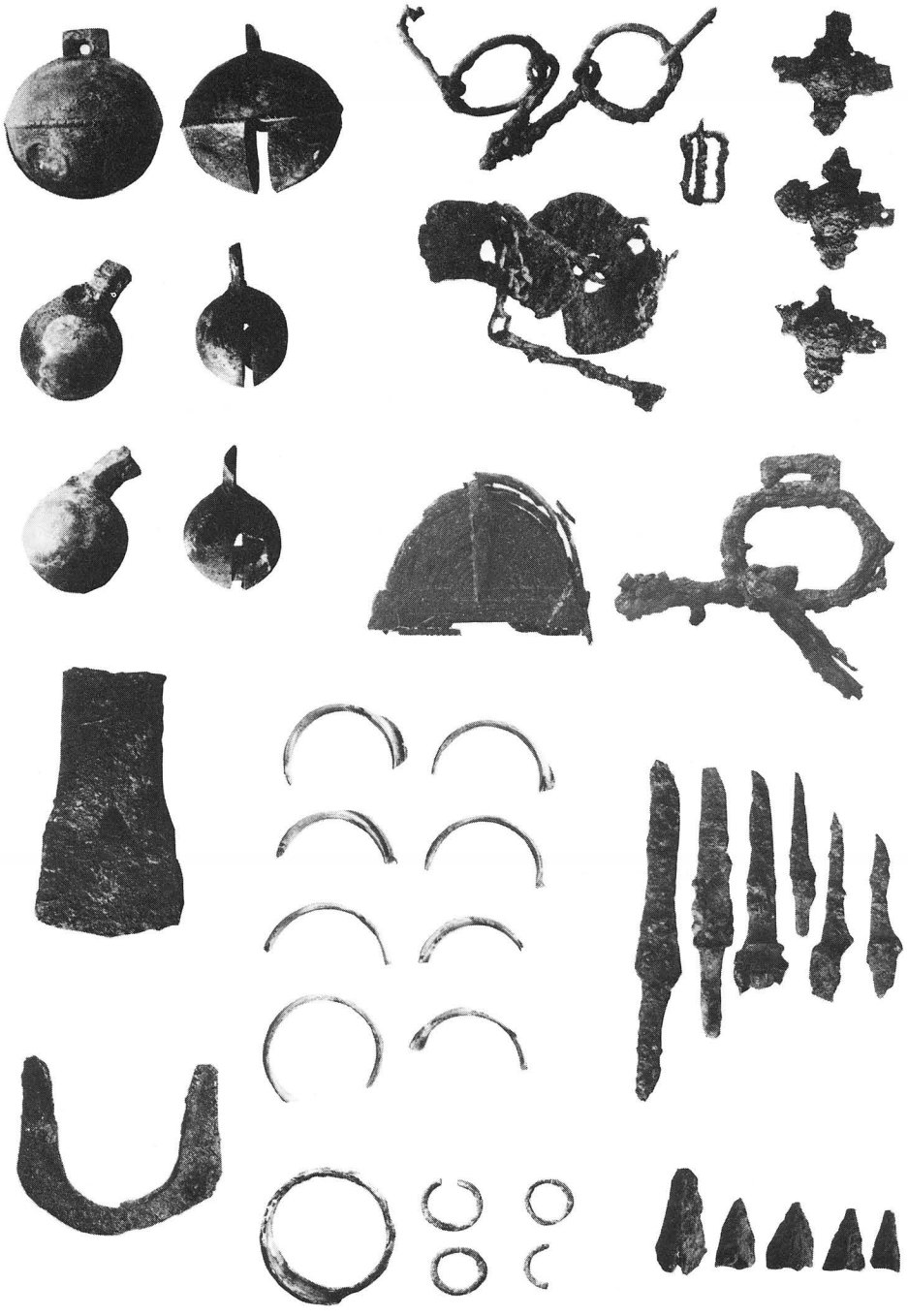
茎は、半以上を欠損しており、原形の確認ができないのが残念である。他の出土例との対比からすれば、全長12㎝前後の細長い形態の茎が予想されるが断定できない。部分的に遺る柄木には、柄元部分に円形の痕跡がみえることから多分に直弧文の彫刻のあったことが推察される。

この剣の地鉄は、小板目が柾目状に流れ、地沸厚く、しかも段うつり風にしまだった移りとなる。地肌に3段の焼入れによる移りがみえる。ズブ焼きで、焼刃はいってない。

出土剣の研磨は実例が少ないだけに、本例は出土剣の研究上好例となろう。直刀と同様焼刃なく丸鍛ながら鎬筋がよく通り、剣としては極めて成形の良好な作品といえる。一般に剣は比較的早い時期の古墳に出土していることが多いが、地下式横穴墓での剣の副葬時期がどれだけの幅をもつか確定していないだけに問題も残るが、切刃造刀とあくまでも同時埋置とすれば当然7世紀の所産ということになる。逆に剣を基準に切刃造刀の上限を検討してみることも必要かとおもえる。

参　考　文　献

1. 宮崎県総合博物館１９７９：特別展図録「日向の古墳展」
2. 宮崎県総合博物館１９８０：よみがえる古代の輝き「出土刀剣」特別展示目録
3. 石井昌国１９７９：「出土刀」新版考古学講座７有史文化２６０－２８８
4. 俵国一１９３５：「日本刀の科学的研究(四)」日本刀講座第16巻５７７－６７３
5. 末永雅雄１９４３：『日本上代の武器』
6. 福永　剣１９７５：『日向の刀と鐔』

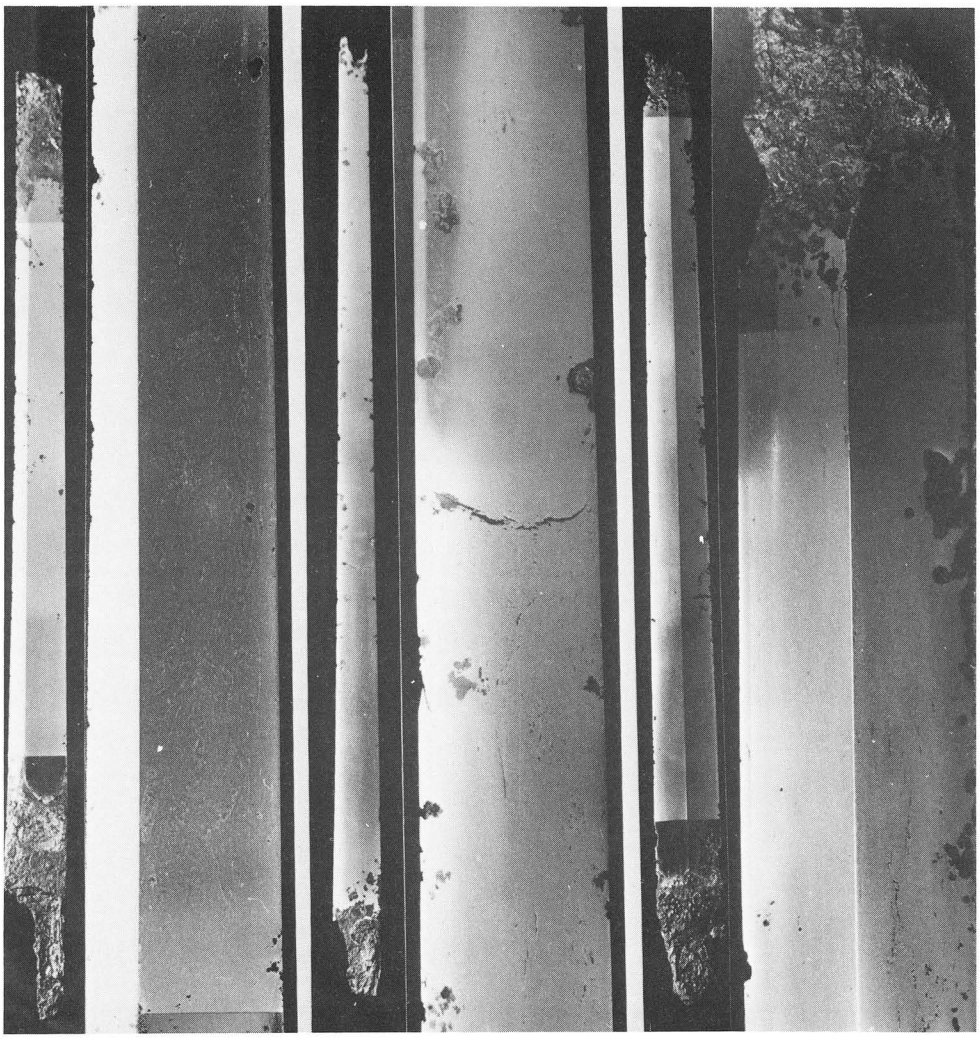


大萩地下式横穴群出土遺物

（宮崎県総合博物館収蔵目録より）

大萩地下式横穴群出土遺物

（宮崎県総合博物館収蔵目録より）



切刃造直刃（きりはづくり）

全長（現存長）（63.9 ㎝）
刃長　（55.4 ㎝）鋒欠損
元幅　3.6 ㎝　元重　0.6 ㎝
茎長　（7.7 ㎝）
元幅　2.9 ㎝　元重（0.7 ㎝）

平造大刀

平造、角棟、片区の直刀である
現存長は（76㎝）
刃長　（68㎝）反りなし
元幅　3.2 ㎝　先幅近く（2.3 ㎝）
元重　0.6 ㎝
茎長　（8 ㎝）
元幅　3.0 ㎝

剣

鏑造　両刃
現存長　（69㎝）　刃長　（64㎝）
元幅近く　4.4 ㎝　先幅近く　3.5 ㎝
鏑重ね　0.5 ～ 0.6 ㎝
茎長　（5 ㎝）

大萩地下式横穴群出土遺物

（宮崎県総合博物館収蔵目録より）

大萩地下式横穴墓群

―人骨編―

例　言

1. 本報告は、昭和48年から昭和50年にかけて宮崎県教育委員会が実施した西諸県郡野尻町大萩地下式横穴群の発掘調査において出土した埋葬人骨にかかる報告である。
2. 昭和58年調査されたＢ・Ｃ地区で発見された地下式横穴の遺構については、本書27集で報告している。
3. 昭和49年調査されたＦ地区で発見された地下式横穴の遺構及び出土人骨の一部については、昭和50年刊行した瀬戸ノ口地区特殊農地保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告「大萩遺跡(1)」で報告している。

宮崎県野尻町大萩地下式横穴出土の古墳時代人骨

松　下　孝　幸*

はじめに

大萩遺跡は宮崎県西諸県郡野尻町大字三ケ野山に所在し、弥生時代終末期の土壙墓群、住居址および古墳時代の地下式横穴（古墳）などからなる遺跡であるが、この遺跡の本格的な調査が、昭和48年（1973年）の秋から翌49年（1974年）の２月にかけてと49年（1974年）の秋から翌50年（1975年）の１月初旬にかけて行なわれた。前者の調査が行なわれたところはＡ－Ｃ区、後者はＥ、Ｆ区と呼ばれているが、このＡ－Ｃ区の地下式横穴（古墳）から合計10体、Ｆ区から合計11体の古墳時代人骨が発掘されている。その後、昭和56年（1981年）の２月には37号墳が発見され、発掘調査が行なわれ、５体の人骨が検出された。Ｆ区から出土した人骨については、その一部を内藤（1974）が既に報告しているが、Ａ－Ｃ区などから出土した人骨については今日まで報告する機会がなかった。

長崎大学医学部解剖学第二教室では、かねてから南九州に特異的に存在する地下式横穴（古墳）に特に注目し、人骨の収集とその人類学的研究を続けているが、最近、宮崎県の古墳時代人に地理的変異が存在することを示唆するような資料も増えつつある。また西日本各地からも古墳時代人骨があい次いで発掘されており、これらの古墳時代人骨の人類学的研究を進めていく上でも、宮崎県の古墳時代人骨の特徴を明らかにしておくことが必要である。

大萩地下式横穴（古墳）からは、上記の一連の調査で合計26体の古墳時代人骨が出土したことになり、宮崎県の地下式古墳人の研究にとって貴重な資料となるものである。人類学的観察および計測を行ない、他の資料との比較検討を行なったので、その結果を報告したい。

なお、幼小児骨については、分部が別稿で詳述しているので、本稿では成人骨についてのみ報告する。

資　料

昭和48年（1973年）の秋から翌49年（1974年）にかけて発掘調査が行なわれたＡ－Ｃ区からは合計10体、49年（1974年）の秋から翌50年（1975年）にかけて発掘調査が行なわれたＦ

---

* Takayuki　Matsushita：（長崎大学医学部解剖学第二教室）
(Department　of　Anatomy, Faculty　of　Medicine, Nagasaki　University)

区からは11体、昭和56年（1981年）の37号墳の調査では５体の古墳時代人骨が発掘された。表１に示すとおり、これら26体のうち男性は12体、女性は９体、性別不明の成人骨は２体、幼小児骨は３体であり、各人骨の性別、年令等は表２のとおりである。なお人骨番号は、前回は通し番号を付けたが、孝古学的所見と照合する際不便なので、各墳墓毎にその墳墓番号を冠して人骨番号を付け直した。

なお、この人骨群の所属時代は古墳時代後期である。

計測方法は、Martin―Saller（1957）によったが、一部は Howells （1973）の方法で計測した。また脛骨の横径は森本（1971）にならい、オリビエの方法で計測し、鼻根部については鈴木（1963）の方法と松下（1983）の方法で計測を行なった。

比較資料としては、宮崎県の地下式古墳人の例として、本庄28号（松下、他、1982）、灰塚（内藤、1973）、上の原（松下、1981）、日守（松下、1981）、旭台（松下、他、1983）、菓子野（松下、他、1983）、の各地下式横穴（古墳）から出土した地下式古墳人および山口市の朝田墳墓群第Ⅱ地区にある横穴墓出土の古墳人を用い、主に宮崎県内での検討を行なった。

また、Ｆ区から出土した人骨の所見の一部は、既に報告しているが、その後の研究の進展もあるので、再度記載した。

表１　資料数

	成人（含成年）			幼小児	合計
	男性	女性	不明		
Ａ―Ｃ区	4	2	1	3	１０
Ｆ区	5	5	1	0	１１
３７号墳	3	2	0	0	5
合　計	１２	9	2	3	２６

表２　Ａ―Ｃ区出土人骨

人骨番号	性別	年令	備考
２号墳１号人骨	男性	熟年	顔面朱
３号墳１号人骨	女性	壮年	顔面朱
２号人骨	男性	熟年	顔面朱
３号人骨	―	小児	顔面朱
４号人骨	女性	熟年	顔面朱
５号人骨	男性	熟年	顔面朱(少)
４号墳１号人骨	男性	壮年	
５号墳１号人骨	―	小児	
２号人骨	不明	熟年	
３号人骨	―	小児	

表３　Ｆ区出土人骨

人骨番号	性別	年令	備考
３号墳１号人骨	不明	不明	
２号人骨	男性	壮年	
４号墳１号人骨	女性	不明	四肢骨朱(少)
２号人骨	女性	壮年	
５号墳１号人骨	男性	熟年	顔面朱
６号墳１号人骨	女性	壮年	
２号人骨	女性	壮年	
７号墳１号人骨	女性	熟年	
２号人骨	男性	壮年	顔面朱(少)
９号墳１号人骨	男性	壮年	
10号墳１号人骨	男性	熟年	顔面朱

表４　37号墳出土人骨

人骨番号	性別	年令	備考
１号人骨	男性	成年	
２号人骨	女性	成年	顔面朱
３号人骨	男性	熟年	頭蓋朱
４号人骨	女性	熟年	顔面朱(少)
５号人骨	男性	壮年	顔面朱

所　見

各骨の計測値は表22～37に示すとおりである。

≪A－C区出土人骨≫

2号墳1号人骨（男性、熟年）

頭蓋と下肢骨とが残存していた。

(1)　頭蓋

1.　脳頭蓋

前頭骨、左右の頭頂骨および左側の鱗部を欠く側頭骨が残存していた。脳頭蓋の後ろ半分を欠損しているので、頭蓋長幅示数は算出できないし、頭型を推測することもできないものである。

縫合は冠状縫合と矢状縫合の前半分とが観察可能で、両縫合とも内板は癒合しているが、外板は開離している。また、外耳道の観察は左側のみが可能であったが、左側外耳道には骨腫は認められない。

計測は最小前頭幅のみが可能で、その計測値は88㎜である。

2.　顔面頭蓋

右側頬骨および上顎骨歯槽突起を欠いていた。眉上弓の隆起は著しく強く、鼻根部には陥凹が認められる。鼻根部はやや狭いが、鼻骨の隆起は強いものではない。

計測ができたのはわずかな部分のみで、上顔幅が102㎜、眼窩高は32㎜（右）、31㎜(左)で、眼窩の高径は低く、鼻幅は27㎜である。

3.　下顎骨

下顎体と左側下顎枝が残存していた。下顎体の高径はやや高い。

4.　歯

下顎歯は下顎骨に釘植して、上顎歯は遊離して残存していた。残存歯を歯式で示すと次のとおりである。

／	／	M_1	／	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	／	／	M_2 M_3
M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2 ／

／：不明（破損）
○：歯槽開存
●：歯槽閉鎖　　以下同じ

咬耗度はBrocaの3度である。

⑵　四肢骨

四肢骨は下肢骨のみが残存していた。

1）下肢骨

1.　大腿骨

右側骨体の遠位半が残存していたにすぎない。径は中程度であるが、骨体両側面は後方へ発達しており、矢状径は大きい。

計測値は骨体の推定中央位での矢状径が29㎜（右）、横径が26㎜（右）で、骨体中央断面示数は111.54（右）となり、示数値は大きく、骨体中央周は84㎜である。

2.　脛骨

右側骨体の遠位部が残存していた。計測ができたのは最小周のみで、この計測値は79㎜（右）である。

3.　腓骨

右側骨体の遠位部が残存していたにすぎない。骨体は著しく扁平である。

⑶　性別・年令

性別は、眉上弓の隆起が著しく強いことから、男性と考えられ、年令は縫合が内板で癒合していることや歯の咬耗度から、熟年と推定される。

3号墳1号人骨（女性、壮年）

頭蓋のみが残存していた。

⑴　頭蓋

1.　脳頭蓋

後頭骨と右側側頭骨の大部分および左側の乳様突起を欠損していた。頭蓋の径は小さい。縫合は三主縫合とも内外両板は開離している。また、外耳道は両側とも観察できない。

後頭骨を欠いているので、頭蓋最大長は計測できないが、頭蓋最大幅は142㎜で大きい。頭蓋長幅示数は算出できないが、観察によって頭型を推測することが可能であり、頭型は短頭型である。

2.　顔面頭蓋

右側の頬骨弓を欠いていることと上顎骨前頭突起の保存状態が悪いことを除けば比較的保存状態は良好である。眉上弓の隆起は著しく弱く、前頭部は膨隆している。鼻根部はやや狭く、鼻骨の隆起はやや強い。

顔面頭蓋の計測値は、中顔幅が92㎜、上顔高は55㎜で、ウイルヒョウーの上顔示数は59.78となり、著しく低上顔である。

眼窩幅は41㎜（右、左）、眼窩高は33㎜（右、左）で、眼窩示数は80.49（右、左）となり、両側とも mesokonch （中眼窩）に属している。鼻幅は26㎜、鼻高は48㎜で、鼻示数は54.17となり、 chamaerrhin （低鼻）に属している。

鼻根部の計測値は、前眼窩間幅が16㎜、鼻根横弧長は19㎜で鼻根彎曲示数は84.21であり、両眼窩幅は95㎜で、眼窩間示数は16.84である。鼻骨最小幅は7㎜、前頭突起上幅は10㎜（右）、9㎜（左）、鼻根角は144度、鼻根陥凹示数は16.13となる。

側面角は全側面角が80度である。歯槽側面角は計測できないが、この角度は小さい。

3. 下顎骨

下顎体のみが残存していた。その径は著しく小さい。

4. 歯

上下両顎とも歯が釘植していた。残存歯を歯式で示せば次のとおりである。

／ ／ ／ P_2 P_1 C I_2 I_1	○ I_2 C P_1 ／ ／ M_2 ／
／ M_2 M_1 P_2 P_1 C ● I_1	I_1 ● C P_1 P_2 M_1 M_2 ／

咬耗度はBrocaの1～2度である。下顎の側切歯は両側とも残存せず、歯槽は閉鎖している。右側中切歯は遠心側へやや傾斜し、左側の方は犬歯が切歯側へ捻転しており、また歯槽部には歯周疾患などの病的所見も認められず、下顎両側側切歯は抜去された可能性が強い。これが縄文時代や弥生時代にみられる風習的なものかどうかは、にわかに判断しがたいが、同じ宮崎県の旭台地下式横穴（古墳）出土の古墳時代人骨（7号墳7号人骨、女性）にも、下顎の側切歯を抜去した疑いのある例があることを指摘しておきたい。

(2) 性別・年令

性別は、眉上弓の隆起が著しく弱く、前頭部も膨隆していることから、女性と考えられ、年令は三主縫合が内外両板とも開離していることや歯の咬耗が著しく弱いことから、壮年と推定される。

3号墳2号人骨（男性、熟年）

頭蓋と上腕骨とが残存していた。

(1) 頭蓋

1. 脳頭蓋

右側側頭骨、後頭骨の左半分および右側側頭骨の乳様突起を欠損していた。縫合は三主縫合とも内板は閉鎖しており、冠状縫合および矢状縫合は外板も部分的に閉鎖している。また、外耳道は左側のみが観察可能で、左側外耳道後壁には軽度の骨腫が認められる。

計測値は頭蓋最大長が186㎜、頭蓋最大幅は計測できないが、バジオン・ブレグマ高は128㎜である。頭蓋長幅示数は算出できないが、観察によって頭型を推測することが可能であり、頭型は中頭型である。また頭蓋長高示数は68.82となり、頭高は低い。

2. 顔面頭蓋

前頭骨の右側の一部、右側頬骨を欠いている。眉上弓の隆起は強く、鼻骨の隆起もやや強いので、鼻根部は陥凹している。また鼻根部はやや狭い。

顔面頭蓋の計測値は、顔長が113㎜、上顔高は66㎜で、頬骨弓幅、中顔幅、顔高は計測できない。

眼窩幅は41㎜（左）、眼窩高は33㎜（左）で、眼高示数は80.49（左）となり、左側はmesokonch（中眼窩）に属している。鼻幅は27㎜、鼻高は52㎜で、鼻示数は51.92となり、chamaerrhin（低鼻）に属している。

鼻根部の計測値は、前眼窩間幅が17㎜、鼻根横弧長は22㎜で鼻根彎曲示数は77.27である。鼻骨最小幅は10㎜、前頭突起上幅は10㎜（左）、鼻根角は129度、鼻根陥凹示数は24.00となり、鼻根部は狭く、鼻骨の隆起は強く、鼻根部の陥凹も強いことがうかがえる。また前頭突起水平傾斜角は計測できないが、前頭突起は矢状方向を向いており、この角度はかなり小さいと推定される。

側面角は全側面角が87度、鼻側面角は90度、歯槽側面角は74度である。

3. 下顎骨

下顎体と下顎角を欠く右側下顎枝が残存していた。その径は大きく、下顎切痕はやや深い。また、右側第二小臼歯の後面に下顎隆起が認められる。

4. 歯

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯を歯式で示せば次のとおりである。

／	／	P_2	P_1	C	I_2	I_1		I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2
M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	●		I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2 ／

咬耗度はBrocaの3度である。

下顎中切歯は1本しかなく、両側側切歯との間があいており、この1本の下顎中切歯はち

ょうど正中部に存在するので、左右の区別がつかない。本来２本の中切歯が萌出するが、本例では左右どちらかが先天的に欠損し、正中部に１本だけが萌出したものと考えられる。なお上顎左右の第三大臼歯と下顎右側第三大臼歯は未萌出である。

⑵　四肢骨

四肢骨は上腕骨のみが残存していた。

１）上肢骨

1.　上腕骨

右側骨体の近位部が残存していた。計測は不可能なものである。

⑶　性別・年令

性別は、眉上弓の隆起が強いことから男性と考えられ、年令は三主縫合とも内板が閉鎖しており、冠状縫合および矢状縫合については外板も部分的に閉鎖していることや歯の咬耗状態から、熟年と推定される。

３号墳４号人骨（女性、熟年）

頭蓋のみが残存していた。

⑴　頭蓋

1.　脳頭蓋

右側１／３と後頭骨の大部分を欠損していた。径は小さく、また乳様突起も小さく、前頭部はやや膨隆している。外耳道は両側とも観察可能であるが、左右とも外耳道骨腫は認められない。縫合は、三主縫合のうち冠状縫合および矢状縫合の内板は閉鎖しているが、外板は冠状縫合で開離しており、矢状縫合は部分的に閉鎖し始めている。またラムダ縫合は内外両板とも開離している。

計測値は頭蓋最大長が171㎜、頭蓋最大幅は計測できないが、バジオン・ブレグマ高は127㎜である。頭蓋長幅示数は算出できないが、観察によって頭型を推測することが可能であり、頭型は短頭型である。頭蓋長高示数は74.27である。また正中矢状弧長は352㎜である。

2.　顔面頭蓋

前頭骨の右側の一部、右側頬骨を欠いている以外は良く残存している。眉上弓はわずかに隆起し、鼻根部は広いが、著しくは扁平ではなく、鼻骨もやや隆起している。

顔面頭蓋の計測値は、顔長が94㎜、上顔高は59㎜で、頬骨弓幅、中顔幅、顔高は計測できない。

眼窩幅は42㎜（左）、眼窩高は32㎜（右）、31㎜（左）で、眼窩示数は73.81（左）となり、左側は chamaekonch（低眼窩）に属している。鼻幅は25㎜、鼻高は45㎜で、鼻示数は55.56となり、chamaerrhin（低鼻）に属している。

鼻根部の計測値は、前眼窩間幅が20㎜、鼻根横弧長は25㎜で鼻根彎曲示数は80.00である。鼻骨最小幅は13㎜、前頭突起上幅は12㎜（右、左）、前頭突起水平傾斜角は74度、鼻根角は138度、鼻根陥凹示数は15.38であり、鼻骨や鼻根部は広いが、前頭突起は矢状方向を向いている。

側面角は全側面角が85度、鼻側面角は91度、歯槽側面角は61度で、強い歯槽性突顎傾向がうかがえる。

3. 下顎骨

下顎体と下顎角を欠く右側下顎枝が残存していた。下顎体の高さは低く、下顎枝も低い。また下顎切痕は浅い。なお、左側第二小臼歯の後面にごく弱い下顎隆起が認められる。

4. 歯

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯を歯式で示せば次のとおりである。

／ M_2 M_1 P_2 P_1 C I_2 ○	○ I_2 C P_1 P_2 M_1 M_2
M_3 M_2 M_1 P_2 P_1 C I_2 I_1	I_1 I_2 C P_1 P_2 M_1 M_2 ○

咬耗度は Broca の3度である。なお上顎左側第三大臼歯は未萌出である。

(2) 性別・年令

性別は、乳様突起が小さく、前頭部もやや膨隆していることから、女性と考えられ、年令は、ラムダ縫合の内外両板はともに開離しているものの、冠状縫合および矢状縫合の内板が閉鎖していることや歯の咬耗が強いことから熟年と推定される。

3号墳5号人骨（男性、熟年）

頭蓋と上腕骨とが残存していた。

(1) 頭蓋

1. 脳頭蓋

右側側頭骨および後頭骨の右側半を欠いているが、それ以外はほぼ完全である。乳様突起は大きい。外耳道は左側のみが観察可能であるが、左側外耳道後壁にはやや大きい骨腫が認められる。縫合は、三主縫合のうち矢状縫合は内外両板とも閉鎖しており、冠状縫合およびラムダ縫合も内板は閉鎖しており、外板も部分的に閉鎖している。

計測値は頭蓋最大長が178㎜、頭蓋最大幅は計測できないが、バジオン・プレグマ高は127

㎜である。頭蓋長幅示数は算出できないが、観察によって頭型を推測することが可能であり、頭型は中頭型である。また頭蓋長高示数は71.35である。

2. 顔面頭蓋

左右の頬骨を欠いている以外は完全である。眉上弓は強く隆起し、鼻根部はやや広く、扁平であり、鼻骨も鼻根側1／3あたりからやや隆起している。

顔面頭蓋の計測値は、顔長が103㎜、頬骨弓幅は計測できないが、中顔幅は101㎜、顔高は119㎜、上顔高は66㎜で、ウイルヒョーの顔示数および上顔示数はそれぞれ、65.35、117.82である。

眼窩幅は計測できないが、眼窩高は33㎜（右）、32㎜（左）である。鼻幅は26㎜、鼻高は53㎜で、鼻示数は49.06となり、 mesorrhin （中鼻）に属している。

鼻根部の計測値は、前眼窩間幅が20㎜、鼻根横弧長は23㎜で鼻根彎曲示数は86.96である。鼻骨最小幅は11㎜、前頭突起上幅は11㎜（右）、10㎜（左）、前頭突起水平傾斜角は66度、鼻根角は150度、鼻根陥凹示数は12.90であり、鼻骨や鼻根部は広いが、前頭突起は矢状方向を向いている。

側面角は全側面角が83度、鼻側面角は86度、歯槽側面角は71度である。

3. 下顎骨

両側とも下顎底から下顎角部に至る部分を欠損している。下顎体の高さは高く、下顎枝も大きいが、下顎切痕は浅い。また、筋突起は強く外反している。

4. 歯

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯を歯式で示せば次のとおりである。

● ● ● ● P_1 C I_2 I_1	I_1 I_2 C P_1 ● ● ● ●
M_3 M_2 M_1 P_2 P_1 C I_2 I_1	I_1 I_2 C P_1 P_2 M_1 M_2 M_3

咬耗度は Broca の3度である。なお下顎の両側第三臼歯には齲蝕が認められ、ほぼ残根状態である。

⑵ 四肢骨

四肢骨は上腕骨のみが残存していた。

1）上肢骨

1. 上腕骨

右側は上腕骨頭の一部と骨体中央部が、左側は骨体が残存していた。径はあまり大きいものではなく、また三角筋粗面の発達も良くない。

計測値は、中央最大径が22㎜（右）、21㎜（左）、中央最小径は18㎜（右）、17㎜（左）で、骨体断面示数は81.82（右）、80.95（左）となり、扁平性は認められない。中央周は66㎜（右）、64㎜（左）である。

⑵　性別・年令

性別は、眉上弓の隆起が強いことから男性と考えられ、年令は、三主縫合のうち矢状縫合は内外両板とも閉鎖しており、冠状縫合およびラムダ縫合も内板は閉鎖しており、外板も部分的に閉鎖していることや歯の咬耗状態から、熟年と推定される。

4号墳1号人骨（男性、壮年）

頭蓋のみが残存していた。

⑴　頭蓋

1.　脳頭蓋

頭蓋冠の大部分を欠損していた。すなわち、前頭骨前頭鱗の右側2／3、右側頭頂骨、左側頭頂骨の右1／3、および後頭骨の底部を欠いていた。乳様突起は大きい。外耳道は両側とも観察可能であるが、左右とも外耳道骨腫は認められない。縫合は、三主縫合のうち矢状縫合の一部およびラムダ縫合が観察できたが、両縫合は内外両板とも開離している。

計測値は頭蓋最大長のみが計測可能で、この計測値は184㎜である。頭蓋長幅示数は算出できないが、観察したところ、やや長頭に傾いているようである。

2.　顔面頭蓋

右側頬骨は残存してはいるが、他の部分と接合できない。眉上弓の隆起はやや強いが、鼻根部の陥凹は強くない。鼻骨は広いが鼻根部はやや狭く、鼻骨の隆起はそれほど強くない。

顔面頭蓋の計測値は、上顔高が（73）㎜で高く、頬骨弓幅、中顔幅、顔高は計測できない。

眼窩幅は43㎜（左）、眼窩高は34㎜（右）、32㎜（左）で、眼窩示数は74.42（左）となり、左側は chameakonch（低眼窩）に属している。鼻幅は25㎜、鼻高は52㎜で、鼻示数は48.08となり、 mesorrhin （中鼻）に属している。

鼻根部の計測値は、前眼窩間幅が19㎜、鼻根横弧長は23㎜で鼻根彎曲示数は82.61である。鼻骨最小幅は10㎜、前頭突起上幅は9㎜（左）、鼻根角は143度、鼻根陥凹示数は17.14であり、鼻骨は広いがやや鼻根部は狭く、また前頭突起水平傾斜角は測れないが、前頭突起は矢状方向を向いている。

側面角は全側面角が（87）度、鼻側面角は89度、歯槽側面角は（82）度で、歯槽性突顎の傾

向は認められない。

3. 下顎骨

下顎骨は残存していなかった。

4. 歯

上顎には歯が釘植していた。残存歯を歯式で示せば次のとおりである。

$$\frac{M_3\ M_2\ M_1\ P_2\ P_1\ C\ I_2\ I_1}{I_1\ I_2\ C\ P_1\ P_2\ M_1\ \bullet\ \bullet}$$

咬耗度は Broca の2～3度である。

(2) 性別・年令

性別は、眉上弓の隆起がやや強いことから男性と考えられ、年令は矢状縫合の一部およびラムダ縫合が内外両板とも開離していることや歯の咬耗が比較的弱いことから、壮年と推定される。

5号墳2号人骨（性別不明、熟年）

頭蓋の大片が残存していたにすぎない。

(1) 頭蓋

左右の頭頂骨の一部、前頭骨のブレグマ付近および後頭骨の後頭鱗が残存していた。骨壁はやや厚い。縫合は、三主縫合のうち冠状縫合のごく一部および矢状縫合が観察できた。両縫合の内板は癒合閉鎖しているが、外板は開離している。

(2) 性別・年令

性別は不明であるが、年令は縫合の癒合状態から熟年と考えられる。

≪F区出土人骨≫

3号墳1号人骨（性別、年令不明）

頭蓋片、左側大腿骨近位部、上腕骨骨体の一部、腓骨骨体の一部、肋骨片、中手骨、下顎右側第三大臼歯などが残存していたが、保存状態は著しく悪く、計測も観察もできないものである。従って、性別、年令を明らかにすることはできなかった。

3号墳2号人骨（男性、壮年）

頭蓋片と四肢骨とが残存していた。

(1) 頭蓋

頭頂骨の骨片や左右側頭骨の錐体部および下顎骨右下顎角部が残存していた。下顎体は低

く、下顎枝の後方への傾斜は大きい。

遊離歯が残存しており、これを歯式で示すと次のとおりである。

／ M_2 M_1 ／ P_1 C ／ ／	／ ／ C P_1 P_2 M_2 M_2 M_3
／ M_2 M_1 P_2 P_1 C ／ I_1	／ ／ C ／ ／ ／ M_2 ／

咬耗度は Broca の1度である。

⑵ 四肢骨

肩甲骨、上腕骨、大腿骨が残存していた。

1）上肢骨

1. 肩甲骨

左右とも関節窩あたりが残存していた。

2. 上腕骨

右側は骨体が、左側は骨体遠位部が残存していた。骨体は遠位部ではやや細いが、中央部はやや大きい。

計測は右側のみが可能で、中央最大径は22㎜（右）、中央最小径16㎜（右）で、骨体断面示数は72.73（右）となり、骨体は扁平である。中央周は66㎜（右）である。

1）下肢骨

1. 大腿骨

左側の外側顆、骨頭などが残存していただけである。

⑶ 性別・年令

性別は、上腕骨の大きさや大腿骨骨頭が大きいことから男性と推測され、年令は、歯の咬耗が著しく弱いことから壮年と考えられる。

4号墳1号人骨（女性、年令不明）

大腿骨と脛骨が残存していた。

1. 大腿骨

左右不明の骨体と右側の外側顆が残存していたが、保存状態は著しく悪い。従って、計測はできないが、骨体は小さい。

2. 脛骨

右側は骨体遠位部が、左側は骨体の一部が残存していた。脛骨も計測はできないが、その径は小さい。

3. 性別・年令

性別は、大腿骨と脛骨の径が小さいことから、女性と考えられるが、年令は不明である。

4号墳2号人骨（女性、壮年）

頭蓋片と大腿骨の一部が残存していたにすぎない。

(1) 頭蓋

頭蓋片、下顎の筋突起と関節突起の一部が残存していた。また上顎右側第一小臼歯と下顎右側大臼歯がそれぞれ1本ずつ残っていた。咬耗度は Broca の2度である。

(2) 四肢骨

大腿骨のみが残存していた。

1. 大腿骨

大腿骨頭から頸部あたりにかけての部分が左右とも残存していた。計測はできないが、径は著しく小さい。

(3) 性別・年令

性別は、大腿骨の径が著しく小さいことから女性と考えられ、年令は、残存歯の咬耗が弱いことから壮年と推定される。

5号墳1号人骨（男性、熟年）

(1) 頭蓋

1. 脳頭蓋

後頭骨を完全に欠失している以外は完全である。乳様突起は大きく、縫合は三主縫合のうち冠状縫合と矢状縫合とが観察可能で、内板は両縫合とも完全に癒合しており、矢状縫合は外板も大部分が閉鎖しているが、冠状縫合の外板は開離している。外耳道は左側のみが観察可能であるが、外耳道骨腫は認められない。

頭蓋最大長とバジオン・ブレグマ高は計測できないが、頭蓋最大幅は145㎜である。頭蓋長幅示数は算出できないが、観察によって頭型を推測すれば、短頭型に属しているようである。

2. 顔面頭蓋

顔面頭蓋は完全である。眉上弓の隆起は強いが、鼻骨の隆起は弱いので鼻根部には陥凹は認められない。また鼻根部はやや狭く、鼻骨も狭い。

頬骨弓幅は139㎜、中顔幅は99㎜、顔高は114㎜、上顔高は64㎜で、顔示数は82.01(K)、

115.15（V）、上顔示数は46.04（K）、64.65（K）となり低顔、低上顔である。

眼窩幅は43㎜（右）、41㎜（左）、眼窩高は30㎜（右）、31㎜（左）で、眼窩示数は69.77（右）、75.61（左）となり、左右ともchamaekonch（低眼窩）に属している。鼻幅は27㎜、鼻高は49㎜で、鼻示数は55.10となり、chamaerrhin（低鼻）に属している。

鼻根部の計測値は、前眼窩間幅が18㎜、鼻根横弧長は21㎜、鼻根彎曲示数は85.71となり、鼻骨最小幅は8㎜、前頭突起上幅は11㎜（右、左）、前頭突起水平傾斜角は90度と小さく、また鼻根角は138度、鼻根陥凹示数は16.13である。

側面角は、全側面角が83度、鼻側面角が84度、歯槽側面角は76度で、歯槽性の突顎は認められない。

3. 下顎骨

左右とも下顎角部を欠損しているが、それ以外の保存状態は良好である。径はやや大きいが、下顎切痕は浅いようである。

4. 歯

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯を歯式で示すと次のとおりである。

○ M_2 M_1 P_2 P_1 C I_2 I_1	I_1 I_2 C P_1 P_2 M_1 ○
M_3 M_2 M_1 P_2 P_1 C I_2 I_1	I_1 I_2 C P_1 P_2 M_1 ● ●

咬耗度はBrocaの3度である。なお上顎左側第三大臼歯は未萌出と考えられる。

⑵ 四肢骨

1）上肢骨

鎖骨と上腕骨とが残存していたが、保存状態は悪いものである。

1. 鎖骨

右側の胸骨端側1／2が残存しており、その径は大きい。

2. 上腕骨

左右不明の骨体の一部が残存していたが、保存状態は著しく悪い。

2）下肢骨

大腿骨と脛骨とが残存していた。

1. 大腿骨

左右とも骨体が残存していた。骨体の横径は小さいが、両側面は後方へ著しく突出しており、柱状を呈している。

骨体中央矢状径は29㎜（右）、30㎜（左）、骨体中央横径は24㎜（右、左）で、骨体中央

断面示数は120.83（右）、125.00（左）となり、柱状性の著しいことがうかがえる。骨体中央周は84㎜（右）、89㎜（左）である。

2. 脛骨

左右の骨体が残存していた。その径はあまり大きいものではない。

計測ができたのは右側のみであり、中央最大径は28㎜（右）、中央横径は21㎜（右）で、中央断面示数は75.00（右）となり、骨体周は77㎜（右）である。

⑶ 性別・年令

性別は、眉上弓の隆起が強いことから男性と考えられ、年令は、冠状縫合と矢状縫合の内板が完全に癒合しており、矢状縫合は外板も大部分が閉鎖していることから、熟年と推定される。

6号墳1号人骨（女性、壮年）

⑴ 頭蓋

前頭骨の左側半分、左側頭頂骨、左側側頭骨および後頭骨が残存していた。乳様突起は小さく、縫合は三主縫合のうち冠状縫合の左側半分とラムダ縫合左側部とが観察可能で、この部分は内外両板とも開離している。外耳道は左側のみが観察可能で、外耳道骨腫は認められない。また眉上弓の隆起は弱く、前頭部は膨隆している。

頭蓋の計測はできないが、径は小さいようである。

⑵ 四肢骨

大腿骨と脛骨とが残存していた。

1. 大腿骨

右側の骨体が残存していた。径は小さく、粗線の発達は良くないが、骨体の両側は後方へ突出している。

骨体中央矢状径は26㎜（右）、骨体中央横径は22㎜（右）で、骨体中央断面示数は118.18（右）となり、柱状性が認められる。骨体中央周は75㎜（右）で、上骨体断面示数は84.62となり、骨体上部は扁平である。

2. 脛骨

左側の骨体が残存していたが、保存状態が悪く、計測はできない。

⑶ 性別・年令

性別は、眉上弓の隆起が弱く、前頭部も膨隆していることから女性と考えられ、年令は、

観察できた冠状縫合とラムダ縫合の内外両板がともに開離していることから壮年と推定される。

6号墳2号人骨（女性、壮年）

頭蓋と四肢骨が残存していた。

(1) 頭蓋

後頭骨の右側外側部の一部と右側側頭骨の錐体および歯が残存していただけである。遊離歯を歯式で示すと、次のとおりである。

／ ／ ／ ／ ／ ／ ／ ／	／ ／ ／ P_1 P_2 M_1 ／ ／
M_3 M_2 M_1 ／ P_1 ／ ／ ／	／ ／ ／ ／ ／ ／ ／ ／

咬耗度はBrocaの1度である。

(2) 四肢骨

左側大腿骨の骨体と右側脛骨の骨体のごく一部とが残存していた。保存状態が悪く、いずれも計測はできないが、観察したところでは径は大きくない。

(3) 性別・年令

性別は、大腿骨の径が小さいことから女性と考えられ、年令は、歯の咬耗が弱いことから壮年と考えられる。

7号墳1号人骨（女性、熟年）

(1) 頭蓋

1. 脳頭蓋

左側約1／3を欠損している以外は良く残存していた。乳様突起は大きく、三主縫合の内板はともに癒合しており、外板は三者とも開離している。外耳道は右側のみが観察可能で、外耳道骨腫は認められない。

頭蓋最大幅は計測できないが、頭蓋最大長は176㎜、バジオン・ブレグマ高は130㎜である。頭蓋長幅示数は算出できないが、観察によって頭型を推測すれば、中頭型に属しているようである。また頭蓋長高示数は73.86である。

2. 顔面頭蓋

顔面頭蓋は右側半は完全である。眉上弓の隆起は弱い。鼻骨の隆起も弱いので鼻根部には陥凹は認められない。また鼻根部はやや狭く、鼻骨も狭い。

頬骨弓幅、中顔幅は計測できない。顔高は107㎜、上顔高は60㎜で、顔の高径は低い。

眼窩幅は40㎜（右）、眼窩高は31㎜（右）で、眼窩示数は77.50（右）となり、右側は、mesokonch（中眼窩）に属している。鼻幅は24㎜、鼻高は44㎜で、鼻示数は54.55となり、chamaerrhin（低鼻）に属している。

鼻根部の計測値は、前眼窩間幅が19㎜、鼻根横弧長は22㎜、鼻根彎曲示数は86.36となり、鼻骨最小幅は8㎜、前頭突起上幅は8㎜（右）である。前頭突起水平傾斜角は計測できないが、やや大きそうである。

側面角は、全側面角が83度、鼻側面角が87度、歯槽側面角は70度で、歯槽性の突顎が認められる。

3. 下顎骨

右側半分が残存していた。径はやや大きいが、下顎切痕は浅い。

4. 歯

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯を歯式で示すと次のとおりである。

$M_2\ M_1\ P_2\ P_1\ C\ I_2\ I_1$	$I_1\ I_2\ C\ P_1\ P_2\ M_1\ M_2$
$M_2\ M_1\ P_2\ P_1\ C\ I_2\ I_1$	$I_1\ I_2\ P_1\ P_2\ M_1\ M_2\ M_3$

咬耗度はBrocaの2度である。なお上顎左右と下顎右側の第三大臼歯は未萌出である。

(2) 四肢骨

1）上肢骨

鎖骨、上腕骨が残存していた。

1. 鎖骨

右側は胸骨端部のみが、左側は両端を欠く大部分が残存していた。径は小さく、中央垂直径は8㎜（左）、中央矢状径は11㎜（左）で、鎖骨断面示数は72.73（左）となり、また中央周は32㎜（左）である。

2. 上腕骨

右側の骨体が残存していた。緻密室が剥落しているため、計測できないが、径は小さいようである。

2）下肢骨

1. 寛骨

右側は腸骨体が、左側は恥骨が残存していた。大坐骨切痕の角度は大きい。

2. 大腿骨

右側は遠位端を欠く大部分が、左側は大腿骨頭が残存していた。径はやや大きく、骨体そのものの後方への突出は弱いが、粗線が柱状に突出する。また計測はできないが、長さは長い。

骨体中央矢状径は26㎜（右）、骨体中央横径は26㎜（右）で、骨体中央断面示数は100.00（右）である。骨体中央周は83㎜（右）で、上骨体断面示数は74.19となり、骨体上部は扁平である。

3. 脛骨

左側の近位部の外側面が残存していたにすぎず、径は小さい。

⑶ 性別・年令

性別は、眉上弓の隆起が弱いことや大坐骨切痕の角度が大きいことから女性と考えられ、年令は、三主縫合の内板がともに癒合していることから熟年と考えられる。

7号墳2号人墳（男性、壮年）

⑴ 頭蓋

1. 脳頭蓋

右側後頭部を欠いている以外は良く残存している。乳様突起は大きく、外後頭隆起は強く突出しており、三主縫合は内外両板とも開離している。外耳道は左側のみが観察可能であるが、外耳道骨腫は認められない。

頭蓋最大幅は計測できないが、頭蓋最大長は188㎜、バジオン、ブレグマ高は140㎜である。頭蓋長幅示数は算出できないが、観察によって頭型を推測すれば、長頭に傾いているようである。また頭蓋長高示数は74.47であり、正中矢状弧長は375㎜である。

2. 顔面頭蓋

顔面頭蓋は右側の頬骨弓を欠損している以外は完全である。眉上弓の隆起はやや強い。鼻骨の隆起は弱く、鼻根部は比較的扁平である。

頬骨弓幅は計測できないが、顔長は103㎜、中顔幅は108㎜、顔高は121㎜、上顔高は65㎜で、顔示数は112.04（V）、上顔示数は60.19（V）である。

眼窩幅は44㎜（右）、45㎜（左）、眼窩高は33㎜（右）、34㎜（左）で、眼窩示数は75.00（右）、75.56（左）となり、左右ともchamaekonch（低眼窩）に属している。鼻幅は27㎜、鼻高は48㎜で、鼻示数は56.25となり、chamaerrhin（低鼻）に属している。

鼻根部の計測値は、前眼窩間幅が21㎜、鼻根横弧長は24㎜、鼻根彎曲示数は87.50となり、

鼻骨最小幅は12㎜、前頭突起上幅は11㎜（右）、9㎜（左）である。前頭突起水平傾斜角は63度で、小さい。

側面角は、全側面角が85度、鼻側面角が89度、歯槽側面角は72度で、歯槽性の突顎が認められる。

3. 下顎骨

両側とも下顎角と関節突起を欠いていた。径は大きく頑丈で、特に下顎体の高径は高い。また下顎切痕はやや深い。

4. 歯

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯を歯式で示すと次のとおりである。

／	●	●	○	／	C	●	I_1		I_1	I_2	C	P_1	●	●	●	●
M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	○		○	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3

咬耗度は Broca の2～3度である。

(2) 四肢骨

1）上肢骨

鎖骨、上腕骨および橈骨が残存していた。

1. 鎖骨

左側の一部が残存していたにすぎない。

2. 上腕骨

両側の骨体中央部と遠位部とが残存していたが、保存状態が悪く、計測はできない。

3. 橈骨

左側骨体が残存していた。骨間縁は内側へ強く突出している。骨体横径は17㎜、骨体矢状径は14㎜で、骨体断面示数は 70.59 である。

2）下肢骨

大腿骨の骨体が残存していた。

1. 大腿骨

左側の骨体が残存していた。径はやや小さいが、粗線は良く発達している。骨体中央矢状径は26㎜（左）、骨体中央横径は25㎜（左）で、骨体中央断面示数は 104.00 （左）となる。骨体中央周は81㎜（左）である。

(3) 性別・年令

性別は、眉上弓や外後頭隆起の発達が良いことから男性と考えられ、年令は、三主縫合が

内外両板ともまだ開離していることから壮年と推定される。

9号墳1号人骨（男性、壮年）

⑴　頭蓋

1.　脳頭蓋

右側側頭骨の側頭鱗と前頭骨の右側眼窩部の一部とを欠いている以外は良く残存している。乳様突起は中程度であるが、外後頭隆起の発達は比較的良好である。三主縫合は内外両板とも開離している。外耳道は両側とも観察可能で、両側とも前壁に外耳道骨腫が認められる。

頭蓋最大長は180㎜、頭蓋最大幅は145㎜、バジオン・ブレグマ高は136㎜で、頭蓋長幅示数は80.56、頭蓋長高示数は75.56、頭蓋幅高示数は93.79となり、頭型は、brach—, hypsi—,metriokran（短、高、中頭）に属している。

また、頭蓋水平周は523㎜、正中矢状弧長は362㎜である。

2.　顔面頭蓋

顔面頭蓋は右側の頬骨弓を欠損している以外は完全である。眉上弓の隆起はやや強い。鼻骨の隆起は弱く、鼻骨はやや広いが、鼻根部は狭く、また比較的扁平で、比較的端整な顔面頭蓋である。

頬骨弓幅および中顔幅は計測できないが、顔長は101㎜、顔高は114㎜、上顔高は65㎜である。

眼窩幅は41㎜（左）、眼窩高は34㎜（左）で、眼窩示数は82.93（左）となり、左側は、mesokonch（中眼窩）に属している。鼻幅は27㎜、鼻高は50㎜で、鼻示数は54.00となり、chamaerrhin（低鼻）に属している。

鼻根部の計測値は、前眼窩間幅が18㎜、鼻根横弧長は22㎜、鼻根彎曲示数は81.82となり、鼻骨最小幅は11㎜、前頭突起上幅は9㎜（右）、8㎜（左）である。前頭突起水平傾斜角は86度で、やや小さい。

側面角は、全側面角が84度、鼻側面角が86度、歯槽側面角は80度で、歯槽性の突顎は認められない。

3.　下顎骨

右側の下顎枝を欠いていた。全体の径は大きく頑丈で、下顎角は著しく外反しているが、下顎体の高径は低い。また下顎切痕は浅い。

4. 歯

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯を歯式で示すと次のとおりである。

M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1		I_1	I_2	C	P_2	P_2	M_1	M_2	M_3
M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1		I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3

咬耗度は Broca の1～2度である。

(2) 四肢骨

1）上肢骨

鎖骨、肩甲骨、上腕骨、橈骨および尺骨が残存していた。

1. 肩甲骨

右側は烏口突起が、左側は関節窩部が残存しており、関節窩は大きい。

2. 鎖骨

右側は中部の一部が、左側は肩峰端が欠損しているが、その他はほぼ完全である。骨体は太くて、頑丈である。

3. 上腕骨

左側の近位2／3が残存していた。中央最大径は24㎜（左）、中央最小径は19㎜（左）で、骨体断面示数は79.17（左）となり、扁平性は弱い。また中央周は70㎜（左）である。

4. 橈骨

右側は近位部を欠いており、左側は骨体中央が残存していた。骨体はやや大きい。

5. 尺骨

左側の遠位1／2が残存していた。大きさは男性としては普通である。

2）下肢骨

寛骨、大腿骨、脛骨、腓骨および膝蓋骨が残存していた。

1. 大腿骨

右側は大転子を欠く以外はほぼ完全である。骨体の径はあまり大きいものではなく、粗線の発達も悪いが、骨体後面はやや後方へ発達している。

最大長は422㎜（右）、自然位全長は418㎜（右）、骨体中央矢状径は29㎜（右）、28㎜（左）、骨体中央横径は25㎜（右、左）で、骨体中央断面示数は 116.00（右）、112.00（左）である。骨体中央周は85㎜（右）、83㎜（左）で、長厚示数は20.33（右）である。

2. 脛骨

両側とも遠位端と内側顆を欠損していた。骨体の径はあまり大きくないが、長さはやや長いようである。

計測ができたのは左側のみであり、中央最大径は28㎜（左）、中央横径は22㎜（左）で、中央断面示数は 78.57 （左）となり、骨体周は79㎜（左）である。

3. 腓骨

左側骨体が残存していた。骨体は扁平である。

⑶ 推定身長値

大腿骨最大長から、Pearson および藤井の公式を用いて推定身長値を算出すると、それぞれ 160.64 ㎝、 159.14 ㎝である。

⑶ 性別・年令

性別は、眉上弓や外後頭隆起の発達が良いことから男性と考えられ、年令は、三主縫合が内外両板ともまだ開離していることや歯の咬耗が弱いことから壮年と推定される。

10号墳１号人骨（男性、熟年）

⑴ 頭蓋

1. 脳頭蓋

うしろ１／３と左側側頭骨を欠損していた。乳様突起はやや大きく、三主縫合の内板は癒合しており、矢状縫合の外板も癒合している。また冠状縫合およびラムダ縫合の外板も部分的に癒合している。外耳道は左側のみが観察可能であり、後壁下部には大きい外耳道骨腫が認められる。

頭蓋最大長とバジオン・ブレグマ高は計測できないが、頭蓋最大幅は149㎜である。頭蓋長幅示数は算出できないが、観察によって頭型を推測すれば、短頭に傾いているようである。

2. 顔面頭蓋

左側半分を欠損している。眉上弓はやや隆起し、鼻骨もやや隆起している。

上顔高は67㎜で、顔面頭蓋の幅径は計測できないが、観察したところ幅径は広い。

眼窩幅は42㎜（右）、眼窩高は35㎜（右）で、 眼窩示数は 83.33 （右）となり、 右側は mesokonch（中眼窩）に属している。鼻高は54㎜であるが、鼻幅は計測できない。

鼻根部の計測値は、鼻根角が137度、鼻根陥凹示数は 17.39 である。

側面角は、全側面角が91度、鼻側面角が100度、歯槽側面角は63度で、強い歯槽性の突顎

が認められる。

3. 下顎骨

右側の下顎枝の一部が残存していたにすぎない。

4. 歯

上顎には歯が釘植しており、下顎の歯も遊離して残存していた。残存歯を歯式で示すと次のとおりである。

○ ○ ○ P_2 P_1 C I_2 ○	I_1 ○ ／ P_1 ／ ／ ／ ／
／ M_2 M_1 ／ P_1 C ／ ／	／ ／ ／ ／ ／ ／ ／ ／

咬耗度はBrocaの2度である。

(3) 性別・年令

性別は、乳様突起が大きく、眉上弓がやや隆起していることから男性と考えられ、年令は、三主縫合の内板が癒合しており、外板も部分的に癒合していることから熟年と推定される。

≪37号墳出土人骨≫

37号墳1号人骨（男性、成年）

(1) 頭蓋

1. 脳頭蓋

うしろ約1／3を欠損している。縫合は三主縫合のうち冠状縫合と矢状縫合の一部が観察できたが、両者は内外両板とも開離している。外耳道は両側とも観察可能であり、外耳道骨腫は両側とも認められない。

頭蓋最大長は計測できないが、頭蓋最大幅は139㎜、バジオン・ブレグマ高は140㎜である。頭蓋長幅示数は算出できないが、観察によって頭型を推測すれば、短頭型である。頭蓋幅高示数は97.90で、また横弧長は312㎜である。

2. 顔面頭蓋

顔面頭蓋は左側頬骨の一部を欠損している以外は完全である。眉上弓の隆起はあまり強いものではない。鼻骨の隆起は弱く、鼻骨や鼻根部はやや狭い。

顔長は94㎜、頬骨弓幅は139㎜、顔高は109㎜、上顔高は58㎜で、中顔幅は計測できない。顔示数は78.42（K）、上顔示数は41.73（K）である。

眼窩幅は42㎜（右）、眼窩高は33㎜（右）、33㎜（左）で、眼窩示数は78.57（右）とな

り、左側は mesokonch（中眼窩）に属している。鼻幅は27㎜、鼻高は49㎜で、鼻示数は55.10となり、 chamaerrhin（低鼻）に属している。

鼻根部の計測値は、前眼窩間幅が18㎜、鼻根横弧長は22㎜、鼻根彎曲示数は 81.82 となり、鼻骨最小幅は８㎜、前頭突起上幅は11㎜（右）、11㎜（左）である。前頭突起水平傾斜角は104度で大きく、鼻根角は141度、鼻根陥凹示数は 17.86 である。

側面角は、全側面角が82度、鼻側面角が84度、歯槽側面角は67度で、歯槽性の突顎が認められる。

3. 下顎骨

右側の下顎角を欠いている以外はほぼ完全である。下顎枝は広く、下顎切痕は浅い。

4. 歯

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯を歯式で示すと次のとおりである。

○	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1		I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3
M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1		I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3

咬耗度はBrocaの１度である。なお下顎の第三大臼歯は両側とも水平智歯である。

(2) 四肢骨

１）上肢骨

肩甲骨、鎖骨、上腕骨、橈骨および尺骨が残存していた。

1. 上腕骨

右側は完全であるが、左側は骨体のみが残存していた。長さはやや長く、骨頭はまだ骨体と癒合していない。

上腕骨最大長は291㎜（右）、中央最大径は23㎜（右）、22㎜（左）、中央最小径は16㎜（右、左）で骨体断面示数は 69.57（右）、72.73（左）となり、骨体は扁平である。また骨体最小周は59㎜（右）、57㎜（左）で、中央周は64㎜（右）、63㎜（左）である。

2. 橈骨

右側は頸の一部を欠いている以外は良く残存しており、左側は骨体の一部が残存していた。径はあまり大きいものではない。また遠位部には骨端線が残存している。

3. 尺骨

右側の骨体が残存していた。長さはやや長い。また遠位骨端は癒合していない。

２）下肢骨

寛骨、大腿骨、脛骨が残存していた。

1. 寛骨

左右とも腸骨が残存していた。寛骨臼は大きく、恥骨結合面には平行隆線が認められる。

2. 大腿骨

左右とも遠位端を欠いている。大腿骨頭は大きいが、骨体の径はやや小さく、丸い。骨体中央矢状径は25㎜（右）、26㎜（左）、骨体中央横径は24㎜（右）、23㎜（左）で、骨体断面示数は104.17（右）、113.04（左）である。骨体中央周は78㎜（右）、77㎜（左）で、また上骨体断面示数は73.33（右）となり、骨体上部は扁平である。

3. 脛骨

両側とも近位端を欠いている。長径はやや長く、ヒラメ筋線の発達は認められない。骨体中央位での断面形は、右はヘリチカのV型、左はⅣ型を呈している。

中央最大径は28㎜（右、左）、中央横径は20㎜（右、左）で、中央断面示数は71.43（右、左）となり、骨体周は78㎜（右）、76㎜（左）、最小周は72㎜（右）、70㎜（左）である。

⑶ 推定身長値

右上腕骨最大長から、Pearsonおよび藤井の公式を用いて、推定身長値を算出してみると、それぞれ154.86㎝、154.43㎝である。

⑷ 性別・年令

性別は、眉上弓がやや隆起していることや大腿骨頭が大きいことから男性と考えられ、年令は、縫合が内外両板とも開離していることや上腕骨、橈骨および尺骨の骨端がまだ癒合していないことから成年と推定される。

37号墳2号人骨（女性、成年）

⑴ 頭蓋

1. 脳頭蓋

うしろ半分を欠損している。縫合は三主縫合のうち冠状縫合と矢状縫合の一部が観察できたが、両者は内外両板とも開離している。外耳道は両側とも観察可能であり、外耳道骨腫は両側とも認められない。

頭蓋最大長は計測できないが、頭蓋最大幅は146㎜、バジオン・ブレグマ高は131㎜である。頭型は脳頭蓋の半分を欠損しているので、推測することもできない。頭蓋幅高示数は89.73である。また横弧長は321㎜である。

2. 顔面頭蓋

顔面頭蓋は左側頬骨を欠損している以外は完全である。眉上弓はわずかに隆起し、前頭結節の発達は良好である。また鼻骨の隆起は弱く、鼻根部はやや広い。

頬骨弓幅および中顔幅の計測はできないが、顔長は107㎜、顔高は112㎜、上顔高は64㎜である。

眼窩幅は41㎜（右）、眼窩高は31㎜（右）で、眼窩示数は75.61（右）となり、左側はchamaekonch（低眼窩）に属している。鼻幅は29㎜、鼻高は50㎜で、鼻示数は58.00となり、hyperchamaerrhin（過低鼻）に属している。

鼻根部の計測値は、前眼窩間幅が19㎜、鼻根横弧長は23㎜、鼻根彎曲示数は82.61となり、鼻骨最小幅は8㎜、前頭突起上幅は13㎜（右）、14㎜（左）である。前頭突起水平傾斜角は97度で、鼻根角は141度、鼻根陥凹示数は17.86である。

側面角は、全側面角が89度、鼻側面角が89度、歯槽側面角は89度で、歯槽性の突顎は認められない。

3. 下顎骨

両側の下顎角と左側の関節突起を欠いている。径はやや小さく、下顎切痕は浅い。

4. 歯

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯を歯式で示すと次のとおりである。

	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1		I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2
M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1		I_1	I_2	C	P_1	●	M_1	M_2

咬耗度は Broca の1～2度である。なお下顎の左側第三大臼歯と上顎の両側の第三大臼歯は未萌出である。また下顎左側第二小臼歯の歯槽は閉鎖しており、第一小臼歯は頬側へ捻転し、かつ遠心側へ傾斜している。周辺の歯槽の状態は良好であり、歯槽の吸収のために歯根が露出することもなく、病的所見は認められないことから、抜去された可能性が強い。

⑵ 四肢骨

1）上肢骨

肩甲骨、鎖骨、上腕骨および橈骨が残存していた。

1. 鎖骨

左側は胸骨端が残存していたにすぎないが、右側は両端の一部を欠損していただけで保存状態は良好である。鎖骨は細くて長い。

2. 上腕骨

左側は骨体の一部が残存していたにすぎないが、右側は遠位部を欠く以外の保存状態は良好である。骨体はやや大きく、また遠位端はまだ癒合していない。

中央最大径は23㎜（右）、中央最小径は15㎜（右）で、骨体断面示数は65.22（右）となり、骨体は扁平である。また骨体最小周は58㎜（右）、中央周は67㎜（右）である。

2. 橈骨

右側の近位2／3が残存していた。径はあまり大きいものではない。

2）下肢骨

寛骨、大腿骨、脛骨が残存していた。

1. 大腿骨

左右とも骨体と骨頭とが残存していた。骨体の径は小さく、粗線の発達も悪く、骨体断面は丸い。骨体中央矢状径は23㎜（右）、24㎜（左）、骨体中央横径は23㎜（右、左）で、骨体断面示数は100.00（右）、104.35（左）である。骨体中央周は76㎜（右、左）で、また上骨体断面示数は81.48（右）である。

2. 脛骨

左側は近位端を欠くだけで保存状態は良いが、右側は骨体のみが残存していた。長さはやや長く、ヒラメ筋線はやや発達しており、骨体中央位での断面形は右はヘリチカのV型、左はⅡ型を呈している。

中央最大径は28㎜（右、左）、中央横径は18㎜（右、左）で、中央断面示数は64.29（右左）となり、骨体は扁平である。また骨体周は75㎜(右)、73㎜(左)、最小周は66㎜(左)である。

⑶ 性別・年令

性別は、前頭結節の発達が良好であることや大腿骨の径が小さいことから女性と考えられ、年令は、縫合が内外両板とも開離していることや上腕骨の遠位端がまだ癒合していないことから成年と推定される。

37号墳3号人骨（男性、熟年）

⑴ 頭蓋

1. 脳頭蓋

後頭骨後頭鱗の大部分と左右の頭頂骨の一部を欠損している。三主縫合のうち冠状縫合は内外両板とも開離しているが、矢状縫合の内板の一部とラムダ縫合の内板はともに癒合しており、両者の外板は開離している。外耳道は両側とも観察可能であり、外耳道骨腫は両側と

も認められない。

頭蓋最大長は計測できないが、頭蓋最大幅は142㎜、バジオン・ブレグマ高は136㎜である。頭蓋長幅示数は算出できないが、観察によって頭型を推測すると、中頭型に属しているようである。頭蓋幅高示数は95.77である。また横弧長は309㎜である。

2. 顔面頭蓋

顔面頭蓋は完全であり、舌骨も残存していた。眉上弓は強く隆起し、また鼻骨の隆起も強いので、鼻根部はやや陥凹している。鼻骨は狭いが、鼻根部はやや広い。

顔長は94㎜、頬骨弓幅は145㎜、中顔幅は101㎜、顔高は111㎜、上顔高は64㎜で、顔示数は76.55（K）、109.90（V）、上顔示数は44.14（K）、63.37（V）となり、著しい低、広顔傾向が認められる。

眼窩幅は41㎜（右）、43㎜（左）、眼窩高は32㎜（右）、33㎜（左）で、眼窩示数は78.05（右）、76.74（左）となり、両側ともmesokonch（中眼窩）に属している。

鼻幅は28㎜、鼻高は51㎜で、鼻示数は54.90となり、chamaerrhin（低鼻）に属している。

鼻根部の計測値は、前眼窩間幅が20㎜、鼻根横弧長は22㎜、鼻根彎曲示数は90.91となり、鼻骨最小幅は7㎜、前頭突起上幅は13㎜（右）、15㎜（左）である。前頭突起水平傾斜角は120度で、鼻根角は118度、鼻根陥凹示数は25.00である。

側面角は、全側面角が82度、鼻側面角が88度、歯槽側面角は56度で、歯槽性の突顎の傾向が強い。

3. 下顎角

ほぼ完全である。左側の筋突起は外反しており、下顎体の高径は低く、下顎切痕は浅い。

4. 歯

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯を歯式で示すと次のとおりである。

M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3
M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3

咬耗度はBrocaの2～3度である。

⑵ 四肢骨

1）上肢骨

肩甲骨のごく一部、鎖骨、上腕骨、橈骨が残存していた。

1. 上腕骨

右側の遠位1／2が残存していた。計測ができたのは骨体最小周のみで、59㎜である。

2. 橈骨

右側骨体の中央部が残存していた。径はあまり大きいものではないが、骨間縁はほぼ中央位で鋭く突出している。

2）下肢骨

寛骨、大腿骨、脛骨および左側腓骨の骨体遠位部がわずかに残存していた。

1. 寛骨

左右とも腸骨、恥骨が残存していた。径はやや大きく、恥骨下角は小さい。

2. 大腿骨

左右とも大転子を欠いている以外はほぼ完全である。長さはあまり長くはなく、骨体の径もそれほど大きいものではないが、大腿骨頭は大きい。骨体の後方への発達は悪く、骨体は比較的丸い。

最大長は398㎜（右）、403㎜（左）、骨体中央矢状径は27㎜（右）、26㎜（左）、骨体中央横径は26㎜（右）、25㎜（左）で、骨体断面示数は103.85（右）、104.00（左）である。骨体中央周は83㎜（右）、81㎜（左）で、また上骨体断面示数は74.19（右）、71.88（左）となり、骨体上部は扁平である。

3. 脛骨

両側とも近位端を欠いている。ヒラメ筋線の発達はあまり良いものではないが、左右とも骨体後面に一稜を形成している。骨体中央位での断面形は左右ともヘリチカのⅣ型を呈している。

中央最大径は30㎜（右）、29㎜（左）、中央横径は19㎜（右）、18㎜（左）で、中央断面示数は63.33（右）、62.07（左）となり、骨体は著しく扁平である。また骨体周は79㎜（右）である。

⑶ 推定身長値

大腿骨最大長から、Pearsonおよび藤井の公式を用いて推定身長値を算出すると、それぞれ156.13㎝（Pearson 右）、157.07㎝（Pearson 左）、153.21㎝（藤井、右）、154.31㎝（藤井、左）となり、低身長である。

⑷ 性別・年令

性別は、眉上弓が強く隆起し、恥骨下角も小さいことから男性と考えられ、年令は、矢状縫合の内板の一部とラムダ縫合の内板がともに癒合していることから熟年と推定される。

37号墳4号人骨（女性、熟年）

⑴ 頭蓋

1. 脳頭蓋

うしろ半分を完全に欠損している。縫合は三主縫合のうち冠状縫合と矢状縫合の一部が観察できた。矢状縫合は内外両板とも開離しているが、冠状縫合の内板は癒合しており、また外板の一部にも癒合が認められる。外耳道は左側のみが観察可能であったが、外耳道骨腫は認められない。

頭蓋最大長、頭蓋最大幅、バジオン・ブレグマ高は計測できない。従って頭蓋長幅示数も算出できないが、観察によって頭型を推測すれば、長頭に傾いているようである。

2. 顔面頭蓋

顔面頭蓋は上顎骨の歯槽突起を欠いている以外はほぼ完全である。眉上弓と鼻骨の隆起は弱く、鼻根部はやや広くて、扁平である。

頬骨弓幅は（138）㎜、中顔幅は101㎜、顔高は109㎜で、上顔高は計測できない。顔示数は（78.99）（K）、105.86（V）である。

眼窩幅は40㎜（右）、40㎜（左）、眼窩高は32㎜（右）、31㎜（左）で、眼窩示数は80.00（右）、77.50（左）となり、両側ともmesokonch（中眼窩）に属している。

鼻高は51㎜で、鼻幅は計測できない。

鼻根部の計測値は、前眼窩間幅が18㎜、鼻根横弧長は21㎜、鼻根彎曲示数は85.71となり、鼻骨最小幅は8㎜、前頭突起上幅は10㎜（右）、10㎜（左）である。前頭突起水平傾斜角は88度で、鼻根角は150度、鼻根陥凹示数は11.11である。

側面角は計測できない。

3. 下顎骨

左右の下顎角および右側の関節突起を欠いている。下顎体の高径はやや高く、下顎枝は広く、また下顎切痕は浅い。

4. 歯

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯を歯式で示すと次のとおりである。

$M_3\ M_2\ M_1\ P_2\ P_1$ ／ $I_2\ I_1$	$I_1\ I_2\ C\ P_1\ P_2\ M_1\ M_2$ ／
$M_3\ M_2\ M_1\ P_2\ P_1\ C\ I_2\ I_1$	$I_1\ I_2\ C\ P_1\ P_2\ M_1\ M_2\ M_3$

咬耗度はBrocaの2度である。また下顎右側の第三大臼歯の舌側に異常咬頭が認められ、また頬側遠心隅には異常な結節が存在する。

⑵　四肢骨

１）上肢骨

鎖骨、上腕骨、橈骨および尺骨が残存していた。

1.　上腕骨

左右不明の骨体の一部が残存していたにすぎない。

2.　橈骨

右側の骨体が残存していた。径はやや小さいが、骨間縁は中央部で鋭く突出する。

3.　尺骨

右側の遠位１／２が残存していた。骨体の径は小さい。

２）下肢骨

寛骨、大腿骨、脛骨および腓骨が残存していた。

1.　寛骨

右の腸骨が残存していた。径はやや小さい。

2.　大腿骨

右側は骨体と骨頭、左側は骨頭が残存していた。骨体の径はやや小さく、粗線の発達も悪い。骨体中央矢状径は24㎜（右）、骨体中央横径は23㎜（右）で、骨体断面示数は104.35（右）である。骨体中央周は74㎜（右）で、また上骨体断面示数は74.07（右）となり、骨体上部は扁平である。

3.　脛骨

右側のみが残存していた。近位端を欠いている。径はあまり大きいものではないが、ヒラメ筋線はやや発達している。骨体中央位での断面形はヘリチカのⅡ型を呈している。

中央最大径は25㎜（右）、中央横径は18㎜（右）で、中央断面示数は72.00（右）となり、骨体周は71㎜（右）、最小周は64㎜（右）である。

⑶　性別・年令

性別は、眉上弓の隆起が弱く、四肢骨も小さいことから女性と考えられ、年令は、冠状縫合の内板が癒合しており、また外板の一部にも癒合が認められることから熟年と推定される。

37号墳5号人骨（男性、壮年）

⑴　頭蓋

1.　脳頭蓋

頭蓋底と左側頭頂骨の大片および右側頭頂骨片が残存していた。乳様突起は小さい。縫合は三主縫合のうち矢状縫合とラムダ縫合のそれぞれ一部が観察できた。矢状縫合の内板の一部には癒合が認められるが、外板は開離しており、ラムダ縫合は内外両板とも開離している。両側の外耳道の観察が可能であったが、外耳道骨腫は両側ともに認められない。

2.　顔面頭蓋

右側上顎骨の歯槽突起のみが残存していた。

3.　下顎骨

下顎体の正中部、両側の下顎角および左側の関節突起が欠損していた。下顎体の高径はやや高いようである。

4.　歯

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯を歯式で示すと次のとおりである。

M_3 M_2 M_1 P_2 P_1 ／ I_2 I_2	／ ／ ／ ／ P_2 M_1 M_2 M_3
M_3 M_2 M_1 P_2 P_1 C ／ ／	／ ／ C P_1 P_2 M_1 M_2 M_3

咬耗度は Broca の2度である。なお上顎左側はすべて遊離歯である。

⑵　四肢骨

1）上肢骨

橈骨および尺骨が残存していた。

1.　橈骨

左側の骨体が残存していた。径は著しく大きいものではない。

2.　尺骨

右側の骨体遠位部が残存していたにすぎない。

2）下肢骨

寛骨、大腿骨、脛骨、腓骨および膝蓋骨が残存していた。

1.　寛骨

左側の恥骨と腸骨の一部が残存していたにすぎない。

2.　大腿骨

右側は近位1／3を欠いているが、左側は大転子部を欠いている以外は良く残存していた。

大腿骨頭は大きい。長さは長く、左側の骨体の両側はやや後方へ突出しているが、粗線の幅は狭い。また骨体の径はそれほど大きいものではない。

骨体中央矢状径は27㎜（右）、28㎜（左）、骨体中央横径は27㎜（右）、26㎜（左）で、骨体中央断面示数は 100.00（右）、107.69（左）である。骨体中央周は86㎜（右）、85㎜（左）で、また上骨体断面示数は77.42（左）となり、骨体上部は扁平である。

3. 脛骨

右側は外側顆を欠いている以外はほぼ完全であるが、左側は骨体が残存していたにすぎない。長径はやや長く、ヒラメ筋線の発達は認められない。また両側とも骨体後面の近位半には鉛直線が認められる。左側の骨体中央位での断面形はヘリチカのV型を呈している。

脛骨長は357㎜（右）で長く、中央最大径は30㎜（右）、中央横径は21㎜（右）で、中央断面示数は70.00（右）となり、骨体周は79㎜（右）、最小周は71㎜（右）である。

4. 腓骨

近位端を欠損した右側腓骨が残存していた。径は大きく、溝形成も著しい。

(3) 推定身長値

左側大腿骨最大長から、Pearson および藤井の公式を用いて推定身長値を算出すると、それぞれ163.27㎝、162.56㎝となり、高身長である。

3）性別・年令

性別は、下顎骨の径や四肢骨の径が大きいことから男性と考えられ、年令は、矢状縫合の内板の大部分と外板が開離しており、ラムダ縫合の内外両板も開離していることや歯の咬耗が弱いことから壮年と推定される。

考　察

(1) 頭蓋

1. 脳頭蓋

主要計測値の平均値を算出し、他の古墳人と比較してみた（表5）。男性の頭蓋最大長は183.20㎜で、日守地下式古墳人の1例よりはわずかに小さいが、菓子野地下式古墳人、朝田古墳人とは大差なく、頭蓋最大幅は144.80㎜で、菓子野地下式古墳人よりも大きく、旭台地下式古墳人、朝田古墳人と大差ない。バジオン・ブレグマ高は134.50㎜で、やや小さく、菓子野地下式古墳人に最も近い。頭蓋長幅示数が算出できたのはわずか1例のみで、80.56を示し、この例は短頭型に属している。頭蓋長高示数は72.55で、やや小さく、朝田

古墳人に近く、頭蓋幅高示数は95.82となり、旭台地下式古墳人、朝田古墳人よりも大きく、菓子野地下式古墳人よりも小さい。頭蓋水平周は523㎜で、菓子野地下式古墳人よりも大きく、朝田古墳人に近似している。横弧長は310.50㎜で、菓子野地下式古墳人、朝田古墳人よりも大きく、比較的旭台地下式古墳人に近い。また正中矢状弧長は368.50㎜で、朝田古墳人よりは大きいが、日宇地下式古墳人、菓子野地下式古墳人よりは小さい。

一方、女性の平均値は表6に示すとおり、頭蓋最大長は173.50㎜で、旭台地下式古墳人、菓子野地下式古墳人よりは小さく、朝田古墳人に近い。頭蓋最大幅は144.00㎜で、いずれの比較資料よりも大きいが、バジオン・ブレグマ高は129.33㎜で、最も小さい。横弧長は321㎜で、どの比較資料よりも大きく、正中矢状弧長は355.50㎜で、やや小さく、朝田古墳人に近い。

図1　遺　跡

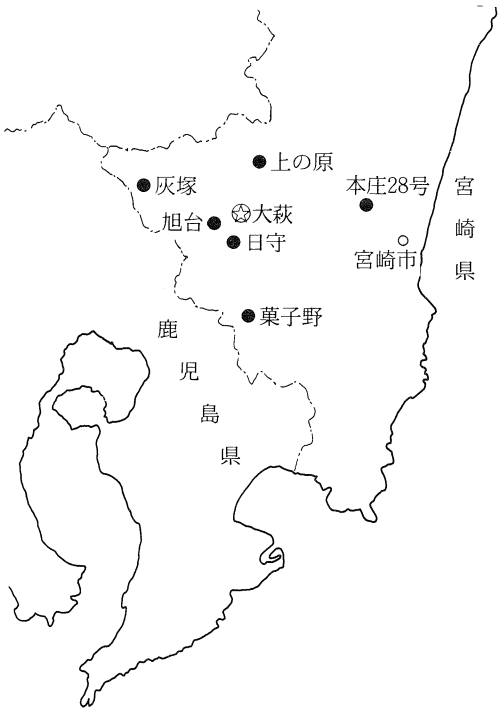


表5.　脳頭蓋測値（男性、㎜）

		大萩地下式古墳人		日守地下式古墳人（松下）		旭台地下式古墳人（松下、他）		菓子野地下式古墳人（松下、他）		朝田横穴墓古墳人（松下、他）	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1	頭蓋最大長	5	183.20	1	185		—	3	182.33	4	183.00
8	頭蓋最大幅	5	144.80		—	3	143.33	3	136.33	2	143.00
17	バジオン・ブレグマ高	6	134.50	1	146	3	136.00	3	135.67	2	130.00
8／1	頭蓋長幅示数	1	80.56		—		—	3	74.79	2	76.71
17／1	頭蓋長高示数	4	72.55	1	78.92		—	3	74.43	2	73.93
17／8	頭蓋幅高示数	3	95.82		—	1	89.93	3	99.51	1	92.25
5	頭蓋底長	6	102.83		—	3	97.67	3	100.33	2	100.00
11	両　耳　幅	2	131.50		—	5	126.60	2	124.50	2	130.00
23	頭蓋水平周	1	523		—		—	3	515.00	1	525
24	横　弧　長	2	310.50		—	2	312.00	2	303.00	1	306
25	正中矢状弧長	2	368.50	1	380		—	2	375.00	2	359.00

男性では頭蓋長幅示数が算出できたのはわずか1例のみで、この例は短頭型に属していたが、女性は1例も算出できなかった。しかしこの他に観察、あるいは復元によって頭型を推定することが可能なものが12例あり、表7に示すとおり、男性は9例中4例が短頭型、3例が中頭型、2例は長頭に傾いており、女性は4例中2例が短頭型、1例が中頭で、残りの1例は長頭に傾いているが、男女ともどちらかといえば短頭に傾いているようである。

表6　脳頭蓋計測値（女性、㎜）

		大萩地下式古墳人		日守地下式古墳人（松下）		旭台地下式古墳人（松下、他）		菓子野地下式古墳人（松下、他）		朝田横穴墓古墳人（松下、他）	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1	頭蓋最大長	3	173.50		—	2	179.50	1	176	6	172.50
8	頭蓋最大幅	2	144.00		—	1	140	1	135	3	134.67
17	バジオン・ブレグマ高	3	129.33	1	131	2	133.00	1	132	5	131.20
8／1	頭蓋長幅示数		—		—		—	1	76.70	2	78.04
17／1	頭蓋長高示数	2	74.07		—	1	72.57	1	75.00	4	75.57
17／8	頭蓋幅高示数	1	89.73		—		—	1	99.78	3	97.27
5	頭蓋底長	3	101.00	1	101	2	96.50	1	98	5	99.00
11	両耳幅	2	128.00	1	126	2	126.00	1	119	5	121.80
23	頭蓋水平周		—		—		—	1	504	1	508
24	横弧長	1	321	1	300	1	304	1	306	3	301.00
25	正中矢状弧長	3	355.50		—	1	360	1	367	2	357.00

表7　頭型

人骨番号	性別	頭蓋長幅示数	頭型(推定頭蓋長幅示数)
A－C区			
3－1	女性	—	短頭（85.03）
3－2	男性	—	中頭（77.42）
3－4	女性	—	短頭（84.80）
3－5	男性	—	中頭（78.09）
4－1	男性	—	長頭へ傾く
F区			
5－1	男性	—	短頭（82.39）
7－1	女性	—	中頭（75.00）
7－2	男性	—	長頭（74.47）
9－1	男性	80.56	短頭
10－1	男性	—	短頭（80.11）
37号墳			
37－1	男性	—	短頭（83.03）
37－3	男性	—	中頭（77.60）
37－4	女性	—	長頭

地下式横穴から出土する古墳時代人骨は、後頭部の保存状態が悪いため、頭蓋長幅示数を算出できるものはほとんどないが、観察あるいは復元によって頭型を推測できるものがあり、筆者が報告した日守、上の原、旭台、菓子野地下式古墳人のうち上の原、旭台地下式古墳人は短頭であり、菓子野地下式古墳人は長頭であった。本例にはやや多様性が認められるが、どちらかといえば男女ともわずかに短頭に傾いているようである。

2. 顔面頭蓋

男性の顔面頭蓋の計測値の平均値については、表8に示すとおり、頬骨弓幅は141.00㎜で、上の原地下式古墳人よりは小さいが、旭台地下式古墳人より大きく、菓子野地下式古墳人、朝田古墳人と大差ない。中顔幅は102.25㎜で、旭台地下式古墳人よりは大きいが、上の原地下式古墳人、朝田古墳人よりわずかに小さく、灰塚、菓子野地下式古墳人と大差ない。顔高は114.67㎜で、灰塚、上の原、旭台地下式古墳人よりは大きいが、朝田古墳人より低く、菓子野地下式古墳人と大差なく、低顔である。上顔高も64.38㎜で、灰塚、日守地下式古墳人よりは大きいが、朝田古墳人、本庄28号2号人骨より小さく、上の原、旭台、菓子野地下式古墳人に近く、低上顔である。従って、顔示数、上顔示数はそれぞれ78.99（K）、113.73（V）、43.97（K）、63.39（V）となり、これらの示数値はいずれも朝田古墳人より小さく、その他の地下式古墳人に近いかそれよりも小さく、低・広顔傾向が強いが、1例（A－C区4－1）ではあるが、高上顔と推定されるものが存在することは注意しておきたい。

眼窩幅は42.33㎜でやや狭く、菓子野地下式古墳人に最も近く、眼窩高は32.56㎜で、低く、灰塚、旭台地下式古墳人と大差ない。眼窩示数は77.63となり、mesokonch（中眼窩）に属しており、菓子野地下式古墳人に最も近い。

鼻幅は26.78㎜で、灰塚、菓子野地下式古墳人に近く、鼻高は、50.89㎜で、鼻示数は

表8　顔面頭蓋計測値（男性、㎜）

		大萩地下式古墳人		本庄28号2号人骨（松下、他）	灰塚地下式古墳人（内藤）		日守地下式古墳人（松下）		上の原地下式古墳人（松下）		旭台地下式古墳人（松下、他）		菓子野地下式古墳人（松下、他）		朝田横穴墓古墳人（松下、他）	
		n	M	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
40	顔長	6	101.33	－	1	105		－		－	3	100.00	2	96.00	3	93.33
42	下顔長	6	111.17	－	1	110		－		－	3	116.67	2	102.50	2	105.00
45	頬骨弓幅	3	141.00	－		－		－	1	146	2	135.50	1	140	1	(140)
46	中顔幅	4	102.25	－	1	102		－	1	104	4	99.00	3	102.67	3	104.67
47	顔高	6	114.67	－	1	112		－	1	112	3	111.67	2	115.50	3	118.00
48	上顔高	8	64.38	72	1	61	1	66	1	63	5	65.00	2	64.00	5	67.60
47／45	顔示数(K)	3	78.99	－		－		－		－	1	82.31	1	84.29	1	(85.00)
48／45	上顔示数(K)	3	43.97	－		－		－	1	(46.58)	1	48.46	1	45.71	1	(48.57)
47／46	顔示数(V)	4	113.73	－	1	109.80		－		－	2	113.10	2	113.32	2	115.86
48／46	上顔示数(V)	4	63.39	－	1	59.88		－	1	(65.38)	2	64.84	2	62.85	3	66.59
51	眼窩幅(左)	6	42.33	44	1	43	1	46	1	44	3	43.67	3	42.67	3	45.67
52	眼窩高(左)	9	32.56	35	1	32	1	34	1	35	6	32.67	3	33.00	3	36.67
52／51	眼窩示数(左)	6	77.63	79.55	1	74.42	1	73.91	1	79.55	3	75.62	3	77.35	3	80.41
54	鼻幅	9	26.78	25	1	27	1	31	2	27.50	7	28.71	3	27.00	4	27.25
55	鼻高	9	50.89	53	1	42	1	55	2	52.00	6	48.50	3	48.33	5	52.40
54／55	鼻示数	8	53.05	47.17	1	62.29	1	56.36	2	52.89	6	59.16	3	55.84	4	51.44
72	全側面角	8	84.63	78	1	84.5	1	88	1	(86)	3	76.67	2	82.00	5	87.60
73	鼻側面角	9	88.44	83	1	93.5	1	92	1	85	3	78.00	3	85.67	5	86.60
74	歯槽側面角	9	71.22	64	1	64	1	69		－	3	73.67	2	71.50	5	69.40

53.05となり、chamaerrhin（低鼻）に属しており、上の原地下式古墳人に最も近い。

側面角は、全側面角が83.71度で、灰塚、菓子野地下式古墳人に近く、鼻側面角は87.00度で、朝田古墳人に最も近く、歯槽側面角は71.22度で、旭台地下式古墳人よりもわずかに小さいが、本庄28号2号人骨、灰塚、日守、朝田古墳人よりも大きく、菓子野地下式古墳人に最も近い。

女性については表9に示すとおり、中顔幅は97.50㎜で、上の原地下式古墳人よりは大きいが、日守、旭台地下式古墳人、朝田古墳人より小さく、菓子野地下式古墳人と大差ない。顔高は109.33㎜で灰塚地下式古墳人よりは小さいが、上の原地下式古墳人、朝田古墳人より大きく、日守、旭台、菓子野の各地下式古墳人と大差なく、低顔である。上顔高は59.50㎜で、旭台、菓子野、日守地下式古墳人よりわずかに小さく、灰塚、上の原地下式古墳人、朝田古墳人に近く、著しく低上顔である。従って、顔示数、上顔示数はそれぞれ105.83（V）、59.78（V）となり、顔示数は朝田古墳人に、上顔示数は日守地下式古墳人に最も近く、男性と同様、低・広顔傾向が強い。

眼窩幅は41.00㎜でやや狭く、灰塚、朝田古墳人に近く、眼窩高は31.67㎜で上の原、菓子野地下式古墳人と大差ない。眼窩示数は77.30となり、mesokonch（中眼窩）に属しており、日守、上の原、菓子野地下式古墳人よりも大きいが、灰塚、旭台地下式古墳人、朝田古墳人よりも小さい。

鼻幅は26.00㎜で、日守地下式古墳人よりも小さく、その他の資料と大差ない。鼻高は47.00㎜で、上の原、菓子野地下式古墳人よりも大きく、鼻示数は55.57となり、chamaerrhin

表9. 顔面頭蓋計測値（女性、㎜）

		大萩地下式古墳人		灰塚地下式古墳人（内藤）		日守地下式古墳人（松下）		上の原地下式古墳人（松下）		旭台地下式古墳人（松下、他）		菓子野地下式古墳人（松下、他）		朝田横穴墓古墳人（松下、他）	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
40	顔長	3	100.67		−	1	103		−	1	95	1	100	4	100.00
42	下顔長	2	114.00		−		−	1	104	2	104.50	1	108	3	107.00
45	頬骨弓幅		−		−	1	134		−		−	1	129		−
46	中顔幅	2	97.50		−	1	109	1	91	2	101.00	1	96	3	100.00
47	顔高	3	109.33	1	112	1	109	1	106	3	109.67	1	110	5	106.40
48	上顔高	4	59.50	1	60	1	64	2	(58.50)	2	62.00	1	61	7	60.57
47／45	顔示数(K)		−		−	1	81.34		−		−	1	85.27		−
48／45	上顔示数(K)		−		−	1	47.76		−		−	1	47.29		−
47／46	顔示数(V)	1	105.83		−	1	100.00	1	116.48	2	107.44	1	114.58	3	105.91
48／46	上顔示数(V)	1	59.78		−	1	58.72		−	2	61.39	1	63.54	3	62.50
51	眼窩幅(左)	3	41.00	1	37(右)	1	43	1	43	3	40.33	1	42	3	41.33
52	眼窩高(左)	3	31.67	1	31(右)	1	32	1	31	2	33.00	1	31	4	33.25
52／51	眼窩示数(左)	3	77.30	1	83.78(右)	1	74.42	1	72.09	2	84.61	1	73.81	3	82.62
54	鼻幅	4	26.00	1	26	1	28	1	26	4	26.75	1	26	7	26.43
55	鼻高	5	47.00	1	45	1	50	2	44.50	2	49.00	1	44	7	46.86
54／55	鼻示数	4	55.57	1	55.32	1	56.00	1	57.78	2	55.47	1	59.09	7	56.32
72	全側面角	4	84.25	1	80.5	1	83		−	2	80.00	1	83	6	78.67
73	鼻側面角	3	89.00	1	91.5	1	85	1	88	3	85.67	1	87	6	84.00
74	歯槽側面角	3	73.33	1	58.0	1	75		−	2	63.00	1	72	6	62.50

（低鼻）に属しており、上の原、菓子野地下式古墳人よりも小さく、その他の資料とは大差ない。

側面角は、全側面角が85.60度で、どの資料よりも大きく、鼻側面角は91.75度で、灰塚地下式古墳人に最も近い。歯槽側面角は73.33度で、日守地下式古墳人よりも小さいが、灰塚、旭台地下式古墳人、朝田古墳人よりは大きく、菓子野地下式古墳人に最も近い。すなわち、歯槽性突顎の程度は灰塚、旭台地下式古墳人、朝田古墳人ほど強くはない。

鼻根部については、表10に示すとおり、男性では、前眼窩間幅は18.88㎜でやや狭く、鼻根横弧長は22.38㎜で、鼻根彎曲示数は84.33となり、この示数値は、鼻根部が扁平な本庄28号2号人骨、灰塚地下式古墳人、朝田古墳人よりは小さく、日守地下式古墳人に最も近く、鼻根部はそれほど扁平ではない。前頭突起水平傾斜角も88.17度とやや小さく、前頭突起の向きは朝田古墳人のように前額位ではなく、矢状位である。また鼻根角は、136.50度で、鼻骨そのものの隆起はあまり強いものではないが、朝田古墳人よりは隆起している。鼻根陥凹示数は18.95度で、朝田古墳 人より大きく、鼻骨の隆起や鼻根部の陥凹が朝田古墳人より強いことを示している。

表10　鼻根部計測値（男性、㎜、度）

	大萩地下式古墳人		本庄28号2号人骨（松下、他）	灰塚地下式古墳人（内藤）		上の原地下式古墳人（松下）		日守地下式古墳人（松下）		旭台地下式古墳人（松下、他）		菓子野地下式古墳人（松下、他）		朝田横穴墓古墳人（松下、他）	
	n	M	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
前眼窩間幅	8	18.88	17	1	24	1	20	2	19.00	4	20.50	3	18.67	5	19.60
鼻根横弧長	8	22.38	19	1	27	1	28	2	22.50	2	24.00	3	22.67	5	22.00
鼻根彎曲示数	8	84.33	89.47	1	88.89	1	71.43	2	84.23	2	79.12	3	82.35	5	88.98
鼻骨最小幅	8	9.63	8	1	13	1	13	2	11.00	3	9.00	3	9.00	5	8.80
両眼窩間幅	3	100.33	−	1	102	1	105		−	4	101.50	3	99.67	5	106.00
眼窩間示数	3	19.60	−	1	23.53	1	19.05		−	3	19.09	3	18.73	2	18.88
前頭突起上幅（右）	6	11.00	9	1	11	1	7	2	10.50	3	11.00	3	9.33	5	9.60
（左）	8	10.50	8	1	12	1	8	1	10	2	10.50	3	8.67	5	9.60
前頭突起水平傾斜角	6	88.17	−	1	68	1	76		−	1	98	2	83.50	4	113.75
G－N投影距離	6	2.17	−	1	1	1	3		−	2	2.50	2	3.00	1	2
鼻根角	8	136.50	135		−	1	135	1	135	2	137.00	3	134.00	4	144.75
鼻根陥凹示数	8	18.95	17.86		−	1	18.75	1	19.35	2	19.62	3	18.65	4	13.08

一方、女性では、表11に示すとおり、前眼窩間幅は18.40㎜でやや狭く、鼻根横弧長は22.00㎜で、鼻根彎曲示数は83.78となり、この示数値は男性と同様、鼻根部が扁平な灰塚地下式古墳人、菓子野地下式古墳人、朝田古墳人よりは小さく、上の原、旭台地下式古墳人に最も近く、鼻根部はそれほど扁平ではない。前頭突起水平傾斜角も86.33度とやや小さく、男性と同様、前頭突起の向きは朝田古墳人のように前額位ではなく、矢状位である。また鼻根角は143.25度で、鼻骨そのものの隆起はあまり強いものではないが、朝田古墳人よりは隆起している。鼻根陥凹示数は15.12で、日守、旭台地下式古墳人、朝田古墳人より大きく、鼻骨の隆起や鼻根部の陥凹が朝田古墳人よりは強いことを示している。

表11　鼻根部計測値（女性、㎜、度）

	大萩地下式古墳人		灰塚地下式古墳人（内藤）		上の原地下式古墳人（松下）		日守地下式古墳人（松下）		旭台地下式古墳人（松下、他）		菓子野地下式古墳人（松下、他）		朝田横穴墓古墳人（松下、他）	
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
前眼窩間幅	5	18.40	1	22	2	18.00	1	21	3	20.00	1	18	7	17.29
鼻根横弧長	5	22.00	1	24	2	22.00	1	26	2	26.00	1	20	7	20.57
鼻根彎曲示数	5	83.78	1	91.67	2	82.91	1	80.77	2	82.74	1	90.00	7	85.35
鼻骨最小幅	5	8.80		—	2	9.50	1	13	3	9.33	1	7	7	8.14
両眼窩間幅	2	95.00	1	97		—	1	103	2	96.50	1	96	3	96.00
眼窩間示数	2	17.90	1	22.68		—	1	20.39	2	20.29	1	18.75	3	19.83
前頭突起上幅（右）	5	10.60	1	12	2	9.00	1	11	2	9.50	1	10	7	9.57
（左）	4	11.25	1	11	2	9.50	1	10	4	10.25	1	10	7	9.14
前頭突起水平傾斜角	3	86.33		—	1	77	1	54	2	89.50	1	71	6	101.50
G－N投影距離	3	2.00		—	1	2	1	2	4	1.75	1	4	6	1.00
鼻根角	4	143.25		—	1	132	1	148	2	160.00	1	138	6	153.83
鼻根陥凹示数	4	15.12		—	1	20.00	1	12.50	2	7.41	1	16.67	6	11.42

(2)　四肢骨

1）上肢骨

1.　上腕骨

男性の計測値の平均値を算出し、右側について他の資料と比較してみると、表12にしめすとおり、最大長は291㎜（1例）で、長さは短く、中央最大径は22㎜、中央最小径は16.67㎜で、ともに旭台地下式古墳人より小さく、菓子野地下式古墳人、朝田古墳人に近い。骨体最小周は57.00㎜で、いずれの比較資料よりも小さく、中央周は65.33㎜で、菓子野地下式古墳人よりも大きく、旭台地下式古墳人、朝田古墳人と大差ない。骨体断面示数は74.71となり、菓子野地下式古墳人よりも小さく、旭台地下式古墳人、朝田古墳人と大差ない。また長厚示数は20.27で、これは菓子野地下式古墳人、朝田古墳人と大差ない。すなわち男性上腕骨の径はやや小さいものである。

表12　上腕骨計測値（男性、右、㎜）

		大萩地下式古墳人		旭台地下式古墳人（松下、他）		菓子野地下式古墳人（松下、他）		朝田横穴墓古墳人（松下、他）	
		n	M	n	M	n	M	n	M
1	上腕骨最大長	1	291		—	1	292	1	299
5	中央最大径	3	22.00	4	23.50	2	21.50	4	22.50（左）
6	中央最小径	3	16.67	4	17.50	2	16.50	4	16.50（左）
7	骨体最小周	3	57.00	4	61.25	2	58.50	2	62.50（左）
7（a）	中央周	3	65.33	4	66.75	2	63.50	4	65.00（左）
6／5	骨体断面示数	3	74.71	4	74.37	2	76.73	4	73.47（左）
7／1	長厚示数	1	20.27		—	1	20.89	1	20.74

一方、女性については、表13に示すとおり、中央最大径は23㎜で、比較資料よりも大きく、中央最小径は15㎜で比較資料と大差ない。骨体最小周は58㎜、中央周は67㎜で、これらはいずれも比較資料よりも大きい。骨体断面示数は65.22となり、この示数値は最も小さく、扁平性は強い。

表13　上腕骨計測値（女性、右、㎜）

		大萩地下式古墳人		旭台地下式古墳人（松下、他）		菓子野地下式古墳人（松下、他）		朝田横穴墓古墳人（松下、他）	
		n	M	n	M	n	M	n	M
5	中央最大径	1	23	4	20.00	1	21	2	19.50
6	中央最小径	1	15	4	15.50	1	15	2	15.00
7	骨体最小周	1	58	2	54.00	1	55	2	53.00
7（a）	中央周	1	67	4	59.00	1	61	2	57.50
6／5	骨体断面示数	1	65.22	4	77.67	1	71.43	2	76.84

2）下肢骨

1. 大腿骨

男性の計測値の平均値を算出し、右側について他の資料と比較してみた（表14）。最大長は410㎜で、菓子野地下式古墳人よりも大きく、朝田古墳人の平均値に一致する。骨体中央矢状径は27.67㎜で、比較資料と大きな差はないが、骨体中央横径が25.33㎜で、どの比較資料よりも小さいので、骨体中央断面示数は106.40となり、どの比較資料よりも大きく、骨体の両側面はやや後方へ突出している。骨体上断面示数は73.76となり、どの比較資料よりも小さく、骨体上部は扁平である。また長厚示数は20.63で、小さい。

表14　大腿骨計測値（男性、右、㎜）

		大萩地下式古墳人		旭台地下式古墳人（松下、他）		菓子野地下式古墳人（松下、他）		朝田横穴墓古墳人（松下、他）	
		n	M	n	M	n	M	n	M
1	最大長	2	410.00		—	1	383	2	410.00
6	骨体中央矢状径	6	27.67	4	28.25	2	27.00	6	27.17（左）
7	骨体中央横径	6	25.33	4	27.00	2	26.00	6	26.67（左）
8	骨体中央周	6	83.33	4	87.75	2	85.00	6	85.17（左）
9	骨体上横径	2	30.50	2	31.00	2	29.50	6	30 17（左）
10	骨体上矢状径	2	22.50	2	25.00	2	23.50	6	24.50（左）
6／7	骨体中央断面示数	6	106.40	4	104.88	2	105.06	6	102.03（左）
10／9	上骨体断面示数	2	73.76	2	80.84	2	81.01	6	81.29（左）
8／2	長厚示数	2	20.63		—		—	2	21.03

一方、女性については、表15にしめすとおり、骨体中央矢状径は24.75㎜で、比較資料と大きな差はないが、骨体中央横径が23.50㎜で、朝田古墳人よりも小さく、旭台、菓子野地下式古墳人と大差ない。骨体中央断面示数は105.63となり、菓子野地下式古墳人よりは小さく、旭台地下式古墳人、朝田古墳人よりもわずかに大きい。骨体上断面示数は78.59となり、菓子野地下式古墳人よりわずかに大きく、旭台地下式古墳人よりわずかに小さく、朝田古墳人に近く、骨体上部はやや扁平である。最大長を計測できるものは1例もなかったが、7号墳1号人骨（F区）の長さは長いようである。

表15　大腿骨計測値（女性、右、㎜）

		大萩地下式古墳人		旭台地下式古墳人（松下、他）		菓子野地下式古墳人（松下、他）		朝田横穴墓古墳人（松下、他）	
		n	M	n	M	n	M	n	M
6.	骨体中央矢状径	4	24.75	5	24.80	1	25	7	24.00
7.	骨体中央横径	4	23.50	5	24.40	1	23	7	25.29
8.	骨体中央周	4	77.00	5	78.20	1	78	7	77.43
9.	骨体上横径	4	27.75	3	27.00	1	29	4	28.75
10.	骨体上矢状径	4	21.75	3	21.67	1	22	4	22.75
6／7	骨体中央断面示数	4	105.63	5	102.12	1	108.70	7	95.47
10／9	上骨体断面示数	4	78.59	3	80.41	1	75.86	4	79.15

2.　脛骨

男性の計測値の平均値を算出し、右側について他の資料を比較してみた（表16）。中央最大径は29.00㎜で、比較資料と大きな差はない。中央横径は20.25㎜で、比較資料よりもわずかに小さく、中央断面示数は69.94となり、旭台地下式古墳人、朝田古墳人よりも小さく、菓子野地下式古墳人に最も近く、骨体はわずかに扁平である。骨体周は78.25㎜で、どの比較資料よりも小さく、最小周は74.00㎜で、菓子野地下式古墳人よりは大きく、旭台地下式古墳人および朝田古墳人と大差ない。

一方、女性については、表17に示すとおり、中央最大径は26.50㎜で、比較資料と大きな差はない。中央横径は18.00㎜で、比較資料よりもわずかに小さく、中央断面示数は68.15となり、どの比較資料よりも小さく、骨体はやや扁平である。骨体周は73.00㎜で、朝田古墳人よりも大きく、旭台、菓子野地下式古墳人と大差ない。最小周は64㎜で、旭台地下式古墳人よりも小さく、菓子野地下式古墳人、朝田古墳人と大差ない。

(3)　推定身長値

大腿骨最大長および上腕骨最大長から、Pearsonおよび藤井の公式を用いて、推定身長値を

表16　脛骨計測値（男性、右、㎜）

		大萩地下式古墳人		旭台地下式古墳人（松下、他）		菓子野地下式古墳人（松下、他）		朝田横穴墓古墳人（松下、他）	
		n	M	n	M	n	M	n	M
8.	中央最大径	4	29.00	4	30.25	2	30.50	2	29.50
8a.	栄養孔位最大径	3	32.00	3	33.00	2	34.00	2	34.00
9.	中央横径	4	20.25	4	22.50	2	21.00	2	21.50.
9a.	栄養孔位横径	3	22.33	3	24.00	2	21.00	2	24.00
10.	骨　体　周	4	78.25	4	83.00	2	80.50	2	80.00
10a.	栄養孔位周	3	87.33	3	92.00	2	89.00	2	92.00
10b.	最　小　周	3	74.00	2	74.00	2	71.00	2	75.00
9／8	中央断面示数	4	69.94	4	74.95	2	68.93	2	72.81
9a／8a	栄養孔位断面示数	3	69.96	3	72.96	2	62.00	2	70.48

表17　脛骨計測値（女性、右、㎜）

		大萩地下式古墳人		旭台地下式古墳人（松下、他）		菓子野地下式古墳人（松下、他）		朝田横穴墓古墳人（松下、他）	
		n	M	n	M	n	M	n	M
8.	中央最大径	2	26.50	3	27.33	1	27.	6	26.00
8a.	栄養孔位最大径	2	30.00	3	31.00	1	30	7	29.57
9.	中央横径	2	18.00	3	19.33	1	20	7	19.14
9a.	栄養孔位横径	2	21.50	3	21.67	1	20	7	21.43
10.	骨　体　周	2	73.00	3	73.00	1	73	6	71.33
10a.	栄養孔位周	2	80.50	3	83.67	1	78	6	79.17
10b.	最　小　周	1	64	1	69	1	65	4	65.00
9／8	中央断面示数	2	68.15	3	70.72	1	74.07	6	75.19
9a／8a	栄養孔位断面示数	2	71.67	3	69.84	1	66.67	7	72.61

算出すると表18のとおりである。次いで、Pearsonの公式を用いて右大腿骨最大長から求めた推定身長値の平均値を他の資料と比較してみた（表19）。本例男性の推定身長値は158.39㎝となり、日守地下式古墳人の１例よりは小さいが、菓子野地下式古墳人よりも大きく、朝田古墳人の平均値に一致し、低身長である。しかし、この２例のうち１例（Ｆ区９－１）は160.64㎝であり、この推定値は日守地下式古墳人の１例にきわめて近いものであり、残りの１例（37－３）は156.13㎝で、菓子野地下式古墳人同様低身長である。このように現在のところ、地下式古墳人男性の推定身長値には著しい高身長の例は認められず、わずかに160㎝を越えるか、あるいは156～6㎝の低身長である。

また女性の推定身長値を求めることはできなかった。

表18　推定身長値（男性、㎝）

		F区				平均	
人骨番号		9－1	37－3	37－5	37－1	n	M
大腿骨(右)	Pearson	160.64	156.13	－	－	2	158.39
	藤井	159.14	153.21	－	－	2	156.18
(左)	Pearson	(161.21)	157.03	163.27	－	2	160.15
	藤井	(159.81)	154.31	162.56	－	2	158.44
上腕骨(右)	Pearson	－	－	－	154.86	1	154.86
	藤井	－	－	－	154.43	1	154.43

表19　推定身長値（㎝）（右大腿骨最大長より、Pearson）

	大萩地下式古墳人		旭台地下式古墳人		菓子野地下式古墳人		日守地下式古墳人		朝田横穴墓古墳人	
	n	M	n	M	n		n	M	n	M
男性	2	158.39		－	1	153.31	1	160.27	2	158.39
女性		－	1	145.78 (左)	1	147.73		－	2	147.92 (左)

(4)　特殊所見

1.　外耳道骨腫

本例には比較的多くの外耳道骨腫が認められた。表20に示しているとおり、観察が可能であった16体中４体（男性３体、女性１体）（25％）に外耳道骨腫が認められた。本県の地下式古墳人には比較的多くの外耳道骨腫が観察され、高原町の旭台地下式古墳人にも多数認められている。

表20　外耳道骨腫

人骨番号	性別	観察可能部位	骨腫の有無
A－C区			
2－1	男性	左	無
3－2	男性	左	有
3－4	女性	左右	左右とも無
3－5	男性	左	有
4－1	男性	左右	左右とも無
F区			
5－1	男性	左	無
6－1	女性	左	無
7－1	女性	右	無
7－2	男性	左	無
9－1	男性	左右	左右とも有
10－1	男性	左	有
37号墳			
37－1	男性	左右	左右とも無
37－2	女性	左右	左右とも無
37－3	男性	左右	左右とも無
37－4	女性	左	無
37－5	男性	左右	左右とも無

2.　抜歯

A－C区の３号墳１号人骨（女性、壮年）と37号墳２号人骨（女性、成年）に抜歯と推測される所見が認められた。前者は下顎の両側の側切歯が、後者は下顎左側第二小臼歯が存在せず、その部分の歯槽は閉鎖しており、歯槽部には病的な所見は認められず、先天的欠損とも考えられないので、抜歯の可能性が強い。しかし、これらが縄文時代や弥生時代にみられるいわゆる風習的なものかどうかについては、本県では縄文時代人骨や弥生時

代人骨の発見例が極端に少なく、従って、この時代の抜歯の有無、その様式などが全く不明であるので、にわかに決めがたい。なお、旭台地下式古墳人(7号墳7号人骨、女性、壮年)にも抜歯の疑いのある例が存在しており、これは下顎右側の側切歯がなく、歯槽が閉鎖していた。

3. 異常咬頭、異常結節

37号墳4号人骨(女性、熟年)の下顎右側の第三大臼歯の舌側には異常な咬頭が、また同じ歯の頬側遠心隅には異常結節が存在する。旭台地下式古墳人にはカラベリー結節や臼状結節が認められたが、本例にはこれらは存在しなかった。

4. 先天的欠損

A－C区の3号墳2号人骨(男性、熟年)の下顎には中切歯が1本しか存在しておらず、しかもこの1本の中切歯はちょうど正中部に釘植している。本来2本の中切歯が萌出するべきであるが、おそらくどちらかが先天的に欠損して、正中部に1本だけが萌出したものと考えられる。

5. 下顎隆起

A－C区の3号墳2号人骨(男性、熟年)と3号墳4号人骨(女性、熟年)の下顎骨後面には骨隆起が存在する。前者は右側のみで第二小臼歯の下位に、後者は左側のみで、同じく第二小臼歯の下位に認められる。

総　括

宮崎県西諸県郡野尻町大字三ケ野山に存在する大萩地下式横穴(古墳)の1973年から1981年に至るまでの発掘調査によって、古墳時代後期に属する人骨が合計26体出土した。保存状態は比較的良好であり、南九州の古墳時代人骨の研究にとって貴重な資料となるものと考えられるので、人類学的観察および計測を行ない、本県の地下式古墳人および他県の古墳人との比較検討を行なった。その結果は次のように要約することができる。

1. 出土総数26体のうち成人骨(含成年)は23体で、残りの3体は幼小児骨であった。成人骨のうち男性骨は12体、女性骨は9体で、残りの2体は性別を明らかにすることはできなかった。
2. 男性の頭蓋最大長は183.20㎜、頭蓋最大幅は144.80㎜、バジオン・ブレグマ高は134.50㎜で、頭蓋長幅示数は80.56、頭蓋長高示数は72.55、頭蓋幅高示数は95.82とり、頭型は、brachy—, ortho—, metriokran(短、中、中頭)に属している。頭蓋水平周

は523㎜、横弧長は310.50㎜、正中矢状弧長は368.50㎜である。頭蓋長幅示数が算出できたのはわずか1例のみであるが、この他に観察、あるいは復元によって頭型を推定することが可能なものが8例あり、9例のうち4例が短頭型、3例が中頭型、2例は長頭型で、全体としては短頭に傾いているようである。

3. 女性の頭蓋最大長は173.50㎜、頭蓋最大幅は144.00㎜、バジオン・ブレグマ高は129.33㎜である。横弧長は321㎜、正中矢状弧長は355.50㎜である。頭蓋長幅示数は1例も算出できなかったが、頭型を推定することが可能なものが4例あり、4例中2例が短頭型、1例が中頭型で、残りの1例は長頭型で、女性も短頭に傾いているようである。
4. 男性の頬骨弓幅は141.00㎜、中顔幅は102.25㎜、顔高は114.67㎜、上顔高は64.38㎜、顔示数、上顔示数はそれぞれ78.99（K）、113.73（V）、43.97（K）、63.39（V）となり、低・広顔傾向が著しい。眼窩幅は42.33㎜、眼窩高は32.56㎜、眼窩示数は77.63となり、mesokonch（中眼窩）に属している。鼻幅は26.78㎜、鼻高は50.89㎜、鼻示数は53.05となり、chamaerrhin（低鼻）に属している。側面角は、全側面角が83.71度、鼻側面角は87.00度、歯槽側面角は71.22度である。
5. 女性の中顔幅は97.50㎜、顔高は109.33㎜、上顔高は59.50㎜、顔示数、上顔示数はそれぞれ105.83（V）、59.78（V）となり、男性と同様、低・広顔傾向が強い。眼窩幅は41.00㎜、眼窩高は31.67㎜、眼窩示数は77.30となり、mesokonch（中眼窩）に属している。鼻幅は26.00㎜、鼻高は47.00㎜、鼻示数は55.57となり、chamaerrhin（低鼻）に属している。全側面角は85.60度、鼻側面角は91.75度、歯槽側面角は73.33度である。
6. 男性上腕骨はやや小さく、女性はやや大きいものであった。
7. 男性大腿骨はあまり長いものではなく、また男女とも骨体の径は大きくはないが、骨体面側面の後方への発達は比較的良好であり、骨体上部も扁平である。
8. 脛骨は男女ともやや小さく、また骨体はやや扁平である。
9. 右大腿骨最大長からの男性の推定身長値（Pearson）は158.39㎝となり、低身長である。
10. 特殊所見として、外耳道骨腫、抜歯、異常咬頭、異常結節、歯の先天的欠損、下顎隆起などが認められた。外耳道骨腫の出現頻度はやや高く、また抜歯についてはこれがいわゆる風習的なものかは判断しがたい。
11. 以上のように、本例は男女とも短頭型に傾き、顔面頭蓋には強い低・広顔傾向が認められ、また鼻根部もそれほど扁平ではない。四肢骨は一様にやや小さく、女性上腕骨は扁平であり、脛骨および大腿骨上部も男女ともに扁平であり、また男性大腿骨の両側面は後方

へ突出している。

宮崎県の地下式横穴から出土した古墳時代人骨については、表21のとおり現在まで、灰塚、日守、上の原、旭台、本庄28号墳および菓子野の各地下式横穴出土人骨合計75体（うち成人骨63体）についてその形質の特徴が明らかにされている。本例の26体を含めると合計101体となり、資料としては貴重なものである。これらの一連の研究の結果、本県の地下式古墳人のうち上の原、旭台および大萩地下式古墳人は短頭で、菓子野地下式古墳人は長頭であるが、顔面頭蓋は本庄28号墳地下式古墳人を除いて、一様に低・広顔傾向が強く、またこれらの鼻根部は山口県の朝田古墳人ほど扁平ではない。しかし近年、本庄28号墳出土人骨や柿の木原地下式横穴出土人骨(未報告)などにはこれらと異なる特徴が認められており、本県の地下式古墳人にはある程度の地域差が存在するのかもしれない。まだ資料数も少なく、また地域的にも偏在しており、推定身長値など不明な点も多いので、今後も地下式古墳人の全体像を解明するために資料の収集とその研究を続けていきたい。

表21　地下式横穴出土人骨資料数

遺跡名	成人			幼小児	合計
	男性	女性	不明		
灰塚	2	4	2	0	8
上の原	4	4	2	1	11
日守	2	2	0	1	5
本庄28号	1	0	0	1	2
旭台	15	9	4	8	36
菓子野	3	1	8	1	13
大萩	12	9	2	3	26
合計	39	29	18	15	101

≪擱筆するにあたり、本研究の機会を与えていただいた宮崎県教育庁文化課の諸先生方、人骨研究に関してご指導いただいた内藤芳篤教授ならびに人骨整理や復元に協力いただいた教室員諸兄に感謝致します。≫

参考文献

1. Howells. W. W, 1974：Cranial Varial in Man. Peabody Museum papaers, vol. 67
2. 石川恒太郎、1979：増補地下式古墳の研究。ぎょうせい、東京。
3. 城　一郎、1938：古墳時代日本人人骨の人類学的研究。人類学輯報、1.
4. Martin—Saller, 1957：Lehrbuch der Anthropologie. Bd. 1. Gustav Fisher Verlag, Stuttugart：429—597.
5. 松下孝幸、1981：日守地下式古墳出土の人骨。日守地下式古墳群発掘調査（55—1—4

号）（宮崎県文化財調査報告書23）：169－178, 182－183.

6. 松下孝幸、1981：宮崎県上の原地下式古墳出土の人骨。上の原地下式古墳群発掘調査（宮崎県文化財調査報告書24）：114－129.

7. 松下孝幸、1982：山口県朝田墳墓群第Ⅱ地区出土の人骨。朝田墳墓群　Ⅴ（山口県埋蔵文化財調査報告第64集）：179－206.

8. 松下孝幸、分部哲秋、石田肇、佐熊正史、1982：鹿児島県諏訪野地下式土壙3号出土の人骨。諏訪野地下式土壙3号（大口市埋蔵文化財調査報告書2）：11—15.

9. 松下孝幸、分部哲秋、1982：宮崎県国富町本庄28号地下式古墳出土の人骨。宮崎考古、第8号：16－20.

10. 松下孝幸、分部哲秋、石田肇、内藤芳篤、永井昌文、1982：山口県豊浦郡豊北町土井ケ浜遺跡出土の人骨。土井ケ浜遺跡第7次発掘調査概報（豊北町埋蔵文化財調査報告第2集）：19—30

11. 松下孝幸、野田耕一、1983：宮崎県高原町旭台地下式横穴出土の古墳時代人骨。宮崎県文化財調査報告書、26：78－107.

12. 松下孝幸、石田肇、佐熊正史、1983：鹿児島県成川遺跡出土の古墳時代人骨。成川遺跡。（鹿児島県埋蔵文化財調査報告書24）：236－261.

13. 松下孝幸、他、1983：山口県山口市朝田墳墓群第Ⅱ地区出土の人骨—総括篇—。朝田墳墓群Ⅳ（山口県埋蔵文化財調査報告第69集）：219－242.

14. 松下孝幸、分部哲秋、石田肇、1983：宮崎県都城市菓子野地下式横穴出土の古墳時代人骨。都城・中之城跡、菓子野地下式横穴（都城市文化財調査報告書3）：105－145.

15. 森本岩太郎、1971：脛骨の横断指数の算出をめぐって－Martin 法への反省—。人類学雑誌、79：88—89.

16. 永井昌文、1981：古墳時代人骨。季刊人類学、12：18—26.

17. 内藤芳篤、1973：灰塚地下式横穴人骨。灰塚遺跡：72—77.

18. 内藤芳篤、1974：人骨とその埋葬方法。大萩遺跡(1)：55—62.

19. 内藤芳篤、松下孝幸、1976：南九州出土の古墳時代人骨。解剖学雑誌、51：279.

20. 島　五郎、寺門之隆、1957：近畿地方古墳時代人頭骨について（略報）。人類学雑誌、66：57—64.

21. 鈴木　尚、1963：日本人の骨。岩波書店、東京。

22. Susuki, H., 1969：Microevolution Changes in the Japanese Population from the Prehistoric Age to the Present—Day. J. Fac. Sci., Univ. Tokyo, Sec. V, 3：279—309.

表22　脳頭蓋計測値（男性、㎜）

	人骨番号	A－C区 2－1	A－C区 3－2	A－C区 3－5	A－C区 4－1	F区 5－1	F区 7－2	F区 9－1	F区 10－1	37－1	37－3	37－5	平均 n	平均 M	平均 s. d.
1	頭蓋最大長	—	186	178	184	—	188	180	—	—	—	—	5	183. 20	4. 15
8	頭蓋最大幅	—	—	—	—	145	—	145	146	143	142	—	5	144. 80	2. 68
17	バジオン・ブレグマ高	—	128	127	—	—	140	136	—	140	136	—	6	134. 50	5. 72
8／1	頭蓋長幅示数	—	—	—	—	—	—	80. 56	—	—	—	—	1	80. 56	
17／1	頭蓋長高示数	—	68. 82	71. 35	—	—	74. 47	75. 56	—	—	—	—	4	72. 55	3. 06
17／8	頭蓋幅高示数	—	—	—	—	—	—	93. 79	—	97. 90	95. 77	—	3	95. 82	
5	頭蓋底長	—	104	100	—	—	109	103	—	101	100	—	6	102. 83	3. 44
9	最小前頭幅	88	—	95	—	92	96	—	—	95	94	—	6	93. 33	2. 96
10	最大前頭幅	—	—	—	—	117	119	119	124	112	113	—	6	117. 33	4. 42
11	両　耳　幅	—	—	—	—	—	—	—	—	131	132	—	2	131. 50	
12	最大後頭幅	—	—	—	—	—	—	111	—	—	—	—	1	111. 00	
7	大後頭孔長	—	—	—	—	—	39	34	—	33	—	32	4	34. 50	3. 11
16	大後頭孔幅	—	28	—	—	—	30	31	—	30	28	30	6	29. 50	1. 23
16／7	大後頭孔示数	—	—	—	—	—	76. 92	91. 18	—	90. 91	—	93. 75	4	88. 19	7. 62
23	頭蓋水平周	—	—	—	—	—	—	523	—	—	—	—	1	523	
24	横　弧　長	—	—	—	—	—	—	—	—	312	309	—	2	310. 50	
25	正中矢状弧長	—	—	—	—	—	375	362	—	—	—	—	2	368. 50	
	Vertex　Rad	—	—	—	—	119	128	121	—	121	121	—	5	122. 00	3. 46
	Nasion　Rad	—	—	—	—	94	100	87	—	91	93	—	5	93. 00	4. 74
	Subsp.　Rad	—	—	—	—	96	98	91	—	91	—	—	4	94. 00	3. 56
	Prosth.　Rad	—	—	—	—	102	104	97	—	94	98	—	5	99. 00	4. 00

表23　脳頭蓋計測値（女性、㎜）

	人骨番号	A－C区 3－1	A－C区 3－4	F区 7－1	37－2	37－4	平均 n	平均 M
1	頭蓋最大長	—	171	176	—	—	2	173. 50
8	頭蓋最大幅	142	—	—	146	—	2	144. 00
17	バジオン・ブレゴマ高	—	127	130	131	—	3	129. 33
8／1	頭蓋長幅示数	—	—	—	—	—	—	—
17／1	頭蓋長高示数	—	74. 27	73. 86	—	—	2	74. 07
17／8	頭蓋幅高示数	—	—	—	89. 73	—	1	89. 73
5	頭蓋底長	—	98	100	105	—	3	101. 00
9	最小前頭幅	93	—	—	95	88	3	92. 00
10	最大前頭幅	116	—	—	—	108	2	112. 00
11	両　耳　幅	—	125	—	131	—	2	128. 00
12	最大後頭幅	—	—	—	—	—	—	—
7	大後頭孔長	—	32	32	—	—	2	32. 00
16	大後頭孔幅	—	29	27	—	—	2	28. 00
16／7	大後頭孔示数	—	90. 63	84. 38	—	—	2	87. 51
23	頭蓋水平周	—	—	—	—	—	—	—
24	横　弧　長	—	—	—	321	—	1	321
25	正中矢状弧長	—	352	359	—	—	2	355. 50
	Vertex Rad	—	118	—	122	119	3	119. 67
	Nasion Rad	—	89	—	90	90	3	89. 67
	Substh. Rad	—	88	—	91	—	2	89. 50
	Prost. Rad	—	92	—	95	—	2	93. 50

表24　顔面頭蓋計測値（男性、㎜）

		A－C区	A－C区	A－C区	A－C区	F区	F区	F区	F区			平均		
	人骨番号	2－1	3－2	3－5	4－1	5－1	7－2	10－1	9－1	37－1	37－3	n	M	s. d.
40	顔　長	－	113	103	－	－	103	－	101	94	94	6	101.33	7.07
41	側顔長	－	74	－	74	74	78	73（右）	71	73（右）	76	6	74.50	2.35
42	下顔長	－	126	117	－	－	107	－	110	104	103	6	111.17	8.84
43	上顔幅	102	－	106	－	106	111	－	－	106	107	6	106.33	2.89
45	頬骨弓幅	－	－	－	－	139	－	－	－	139	145	3	141.00	－
46	中顔幅	－	－	101	－	99	108	－	－	(105)	101	4	102.25	3.95
47	顔　高	－	－	119	－	114	121	－	114	109	111	6	114.67	4.58
48	上顔高	－	66	66	－	64	65	67	65	58	64	8	64.38	2.77
47／45	顔示数(K)	－	－	－	－	82.01	－	－	－	78.42	76.55	3	78.99	－
48／45	上顔示数(K)	－	－	－	－	46.04	－	－	－	41.73	44.14	3	43.97	－
47／46	顔示数(V)	－	－	117.82	－	115.15	112.04	－	－	(103.81)	109.90	4	113.73	3.46
48／46	上顔示数(V)	－	－	65.35	－	64.65	60.19	－	－	(55.24)	63.37	4	63.39	2.29
51	眼窩幅(右)	－	－	－	－	43	44	42	－	42	41	5	42.40	1.14
	（左）	－	41	－	43	41	45	－	41	_	43	6	42.33	1.64
52	眼窩高(右)	32	－	33	34	30	33	35	－	33	32	8	32.75	1.49
	（左）	31	33	32	32	31	34	－	34	33	33	9	32.56	1.12
52／51	眼窩示数(右)	－	－	－	－	69.77	75.00	83.33	－	78.57	78.05	5	76.94	5.00
	（左）	－	80.49	－	74.42	75.61	75.56	－	82.93	_	76.74	6	77.63	3.34
54	鼻　幅	27	27	26	25	27	27	－	27	27	28	9	26.78	0.83
55	鼻　高	－	52	53	52	49	48	54	50	49	51	9	50.89	2.02
54／55	鼻示数	－	51.92	49.06	48.08	55.10	56.25	－	54.00	55.10	54.90	8	53.05	3.05
55(1)	梨状口高	－	－	－	32	31	－	－	30	30	－	4	30.75	0.96
56	鼻骨長	－	－	－	23	19	－	－	22	20	－	4	21.00	1.83
57	鼻骨最小幅	－	10	11	10	8	12	－	11	8	7	8	9.63	1.77
57(1)	鼻骨最大幅	－	－	16	－	16	－	－	19	_	－	3	17.00	
60	上顎歯槽長	－	－	56	－	52	50	－	52	48	50	6	51.33	2.74
61	上顎歯槽幅	－	70	58	64	64	－	－	－	66	65	6	64.50	3.89
62	口蓋長	－	－	50	－	47	－	－	45	40	41	5	44.60	4.16
63	口蓋幅	－	43	－	－	39	－	－	37	40	40	5	39.80	2.17
64	口蓋高	－	15	－	－	14	－	－	－	8	13	4	12.50	3.11
61／60	上顎歯槽示数	－	－	－	－	123.08	－	－	－	137.50	130.00	3	130.19	－
63／62	口蓋示数	－	－	－	－	82.98	－	－	82.22	100.00	97.56	4	90.69	9.40
64／63	口蓋高示数	－	34.88	－	－	35.90	－	－	－	20.00	32.50	4	30.02	7.35
72	全側面角	－	87	83	－	83	85	91	84	82	82	8	84.63	3.07
73	鼻側面角	－	90	86	89	84	89	100	86	84	88	9	88.44	4.86
74	歯槽側面角	－	74	71	82	76	72	63	80	67	56	9	71.22	8.23

表25　顔面頭蓋計測値（女性、㎜）

		A—F区	A—F区	F区			平均		
	人骨番号	3—1	3—1	7—1	37—2	37—4	n	M	s. d.
40	顔　長	—	94	101	107	—	3	100.67	
41	側顔長	68	70	77(右)	73(右)	74	3	70.67	
42	下顔長	—	—	109	119	—	2	114.00	
43	上顔長	102	—	—	—	101	2	101.50	
45	頬骨弓幅	—	—	—	—	—		—	
46	中顔幅	92	—	—	—	103	2	97.50	
47	顔　高	—	—	107	112	109	3	109.33	
48	上顔高	55	59	60	64	—	4	59.50	3.70
47／45	顔示数（K）	—	—	—	—	—		—	
48／45	上顔示数（K）	—	—	—	—	—		—	
47／46	顔示数（V）	—	—	—	—	105.83	1	105.83	
48／46	上顔示数（V）	59.78	—	—	—	—	1	59.78	
51	眼窩幅（右）	41	—	40	41	40	4	40.50	0.58.
	（左）	41	42	—	—	40	3	41.00	
52	眼窩高（右）	33	32	31	31	32	5	31.80	0.84
	（左）	33	31	—	—	31	3	31.67	
52／51	眼高示数（右）	80.49	—	77.50	75.61	80.00	4	78.40	2.28
	（左）	80.49	73.81	—	—	77.50	3	77.27	
54	鼻　幅	26	25	24	29	—	4	26.00	2.16
55	鼻　高	48	45	44	50	48	5	47.00	2.45
54／55	鼻示数	54.17	55.56	54.55	58.00	—	4	55.57	1.72
55(1)	梨状口高	—	—	—	—	31	1	31	
56	鼻骨長	21	—	—	—	18	2	19.50	
57	鼻骨最小幅	7	13	8	8	8	5	8.80	2.39
57(1)	鼻骨最大幅	15	—	—	—	—	1	15	
60	上顎歯槽長	—	—	50	43	—	2	46.50	
61	上顎歯槽幅	—	64	61	67	62	4	63.50	2.65
62	口蓋長	—	—	44	41	—	2	42.50	
63	口蓋幅	—	—	40	42	—	2	41.00	
64	口蓋高	—	11	13	10	10	4	11.00	1.41
61／60	上顎歯槽示数	—	—	122.00	155.81	—	2	138.91	
63／62	口蓋示数	—	—	90.91	102.44	—	2	96.68	
64／63	口蓋高示数	—	—	32.50	23.81	—	2	28.16	
72	全側面角	80	85	83	89	—	4	84.25	3.78
73	鼻側面角	—	91	87	89	—	3	89.00	
74	歯槽側面角	—	61	70	89	—	3	73.33	

表26　鼻根部計測値（男性、㎜、度）

		A－C区	A－C区	A－C区	F区	F区	F区	F区			平均		
	人骨番号	3－2	3－5	4－1	5－1	7－2	9－1	10－1	37－1	37－3	n	M	s.d.
50	前眼窩間幅	17	20	19	18	21	18	—	18	20	8	18.88	1.37
	鼻根横弧長	22	23	23	21	24	22	—	22	22	8	22.38	0.92
	鼻根彎曲示数	77.27	86.96	82.61	85.71	87.50	81.82	—	81.82	90.91	8	84.33	4.27
57	鼻骨最小幅	10	11	10	8	12	11	—	8	7	8	9.63	1.77
44	両眼窩幅	—	—	—	96	107	—	—	—	98	3	100.33	
50／44	眼窩間示数	—	—	—	18.75	19.63	—	—	—	20.41	3	19.60	
	前頭突起上幅（右）	—	11	—	11	11	9	—	11	13	6	11.00	1.27
	（左）	10	10	9	11	9	8	—	11	15	8	10.38	2.13
	前頭突起水平傾斜角	—	66	—	90	63	86	—	104	120	6	88.17	21.89
	G－N投影距離	—	2	—	1	2	1	—	4	3	6	2.17	1.67
	鼻根角	129	150	143	138	—	136	137	141	118	8	136.50	9.61
	鼻根陥凹示数	24.00	12.90	17.14	16.13	—	21.21	17.39	17.86	25.00	8	18.95	4.12

表27　鼻根部計測値（女性、㎜、度）

		A－C区	A－C区	F区			平均		
	人骨番号	3－1	3－4	7－1	37－2	37－4	n	M	s．d．
50	前眼窩間幅	16	20	19	19	18	5	18.40	1.52
	鼻根横弧長	19	25	22	23	21	5	22.00	2.24
	鼻根彎曲示数	84.21	80.00	86.36	82.61	85.71	5	83.78	2.56
57	鼻骨最小幅	7	13	8	8	8	5	8.80	2.39
44	両眼窩幅	95	—	—	—	95	2	95.00	
50／44	眼窩間示数	16.84	—	—	—	18.95	2	17.90	
	前頭突起上幅（右）	10	12	8	13	10	5	10.60	1.95
	（左）	9	12	—	14	10	4	11.25	2.22
	前頭突起水平傾斜角	—	74	—	97	88	3	86.33	
	G－M投影距離	—	2	—	2	2	3	2.00	
	鼻根角	144	138	—	141	150	4	143.25	5.12
	鼻根陥凹示数	16.13	15.38	—	17.86	11.11	4	15.12	2.87

表28　鎖骨計測値（㎜）

		男性								女性							
		F区	F区			平均				F区				平均			
	人骨番号	5－1	9－1	37－1	37－3	右		左		7－1	37－2	37－4		右		左	
		右	左	左	右	n	M	n	M	左	右	右	左	n	M	n	M
2 a	骨体彎曲高	—	—	—	31	1	31		—	—	27	—	—	1	27		—
4	中央垂直径	9	12	11	10	2	9.50	2	11.50	8	10	9	10	2	9.50	2	9.00
5	中央矢状径	14	15	10	12	2	13.00	2	12.50	11	11	12	11	2	11.50	2	11.00
6	中央周	41	47	31	37	2	39.00	2	39.00	32	36	36	38	2	36.00	2	35.00
4／5	鎖骨断面示数	64.29	80.00	110.00	83.33	2	73.65	2	95.00	72.73	90.91	75.00	90.91	2	32.96	2	81.82

表29　上腕骨計測値（㎜）

		男性												女性
		A－C区		F区	F区				平均					
		3－5		3－2	9－1	37－1		37－3	右		左			37－2
		右	左	右	左	右	左	右	n	M	n	M		右
1	上腕骨最大長	－	－	－	－	291	－	－	1	291		－		－
2	上腕骨全長	－	－	－	－	288	－	－	1	288		－		－
3	上端幅	－	－	－	－	－	－	－		－		－		49
3(1)	横上径	－	－	－	－	－	－	－		－		－		53
5	中央最大径	22	21	22	24	23	22	－	3	22.33	3	22.33		23
6	中央最小径	18	17	16	19	16	16	－	3	16.67	3	17.33		15
7	骨体最小周	－	－	53	－	59	57	59	3	57.00	1	57		58
7(a)	中　央　周	66	64	66	70	64	63	－	3	65.33	3	65.67		67
6／5	骨体断面示数	81.82	80.95	72.73	79.17	69.57	72.73	－	3	74.71	3	77.62		65.22
7／1	長厚示数	－	－	－	－	20.27	－	－	1	20.27		－		－

表30　橈骨計測値（㎜）

		男性													女性			
		F区	F区						平均									
	人骨番号	7－2	9－1		37－1		37－3	37－5	右			左			37－2	37－4	平均	
		左	右	左	右	左	右	右	n	M	s.d.	n	M		右	右	右	
																	n	M
3.	最小周	－	43	－	40	38	－	41	3	41.33		1	38		－	34	1	34
4.	骨体横径	17	17	17	15	14	17	15	4	16.00	1.16	3	16.00		15	16	2	15.50
4 a	骨体中央横径	－	15	16	14	14	16	15	4	15.00	0.82	2	15.00		15	13	2	14.00
4(2)	頸横径	14	－	－	－	－	－	－		－		1	14		13	－	1	13
5	骨体矢状径	12	13	13	11	11	11	10	4	11.25	1.26	3	12.00		10	10	2	10.00
5(1)	小頭矢状径	－	－	－	－	－	－	－		－			－		15	－	1	15
5 a	骨体中央矢状径	－	12	12	12	11	11	11	4	11.50	0.58	2	11.50		11	10	1	10.50
5(2)	頸矢状径	14	－	－	－	－	－	－		－		1	14		－	－		－
5(4)	頸　周	－	－	－	－	－	－	－		－			－		45	－	1	45
5(5)	骨体中央周	－	43	44	40	40	43	41	4	41.75	1.50	2	42.00		45	37	2	41.00
5(6)	骨下端幅	－	32	－	29	－	－	－	2	30.50			－		－	－		－
5／4	骨体断面示数	－	76.47	76.47	73.33	78.57	64.71	66.67	4	70.30	5.53	3	75.21		66.67	62.50	2	64.59
5 a／4 a	中央断面示数		80.00	75.00	85.71	78.57	68.75	73.33	4	76.95	7.44	2	76.79		73.33	76.92	2	75.13

表31　尺骨計測値（㎜）

		男性			女性
		F区			
	人骨番号	9－1	37－1	37－5	37－4
		左	右	右	右
3.	最小周	38	36	36	33
11	尺骨矢状径	－	13	－	11
	尺骨横径	－	14	－	14
S	中央最小径	12	12	－	11
L	中央最大径	16	15	－	14
C	中央周	45	46	－	44
11／12	骨体断面示数	－	92.86	－	78.57
S／L	中央断面示数	75.00	80.00	－	78.57

表32　大腿骨計測値（男性、㎜）

	人骨番号		A－C区 2－1	F区 5－1	F区 7－2	F区 9－1	37－1	37－3	37－5	平均 n	M	s. d.
1	最大長	(右)	—	—	—	422	—	398	—	2	410.00	
		(左)	—	—	—	(425)	—	403	436	2	419.50	
2	自然位全長	(右)	—	—	—	418	—	397	—	2	407.50	
		(左)	—	—	—	(420)	—	—	435	1	435	
6	骨体中央矢状径	(右)	29	29	—	29	25	27	27	6	27.67	1.63
		(左)		30	26	28	26	26	28	6	27.33	1.64
7	骨体中央横径	(右)	26	24	—	25	24	26	27	6	25.33	1.22
		(左)		24	25	25	23	25	26	6	24.67	1.02
8	骨体中央周	(右)	84	84	—	85	78	83	86	6	83.33	2.81
		(左)		89	81	83	77	81	85	6	82.67	4.07
9	骨体上横径	(右)	—	—	—	—	30	31	—	2	30.50	
		(左)		—	—	—	—	32	31	2	31.50	
10	骨体上矢状径	(右)	—	—	—	—	22	23	—	2	22.50	
		(左)		—	—	—	—	23	24	2	23.50	
15	顎垂直径	(右)	—	—	—	32	—	—	—	1	32	
		(左)		—	—	—	—	—	—		—	
16	顎矢状径	(右)	—	—	—	—	—	—	—		—	
		(左)		—	—	—	—	—	—		—	
18	頭垂直径	(右)	—	—	—	—	47	—	—	1	47	
		(左)		—	—	—	46	—	—	1	46	
19	頭横径	(右)	—	—	—	—	47	—	—	1	47	
		(左)		—	—	—	47	—	—	1	47	
20	頭　周	(右)	—	—	—	—	150	—	—	1	150	
		(左)		—	—	—	149	—	—	1	149	
8／2	長厚示数	(右)	—	—	—	20.33	—	20.91	—	2	20.63	
		(左)		—	—	(19.76)	—	—	—		—	
6／7	骨体中央断面示数	(右)	111.54	120.83	—	116.00	104.17	103.85	100.00	6	109.40	8.07
		(左)		125.00	104.00	112.00	113.04	104.00	107.69	6	110.96	7.88
10／9	骨体上断面示数	(右)	—	—	—	—	73.33	74.19	—	2	73.76	
		(左)		—	—	—	—	71.88	77.42 —	2	74.65	
16／15	顎断面示数	(右)	—	—	—	—	—	—	—		—	
		(左)		—	—	—	—	—	—		—	
19／18	頭断面示数	(右)	—	—	—	—	100.00	—	—	1	100.00	
		(左)	—	—	—	—	102.17	—	—	1	102.17	

表33　大腿骨計測値（女性、㎜）

	人骨番号	F区 6－1 右	F区 7－1 右	37－2 右	37－2 左	37－4 右	平均 右 n	M	s. d.	平均 左 n	M
1	最大長	—	—	—	—	—		—			—
2	自然位全長	—	—	—	—	—		—			—
6	骨体中央矢状径	26	26	23	24	24	4	24.75	1.50	1	24
7	骨体中央横径	22	26	23	23	23	4	23.50	1.73	1	23
8	骨体中央周	75	83	76	76	74	4	77.00	4.08	1	76
9	骨体上横径	26	31	27	—	27	4	27.75	2.22		—
10	骨体上矢状径	22	23	22	—	20	4	21.75	1.26		—
15	顎垂直径	—	31	—	—	—	1	31			—
16	顎矢状径	—	24	—	—	—	1	24			—
18	頭垂直径	—	41	—	—	39	2	40.00			—
19	頭横径	—	41	—	—	39	2	40.00			—
20	頭　周	—	—	—	—	125	1	125			—
8／2	長厚示数	—	—	—	—	—		—			—
6／7	骨体中央断面示数	118.18	100.00	100.00	104.35	104.35	4	105.63			—
10／9	骨体上断面示数	84.62	74.19	81.48	—	74.07	4	78.59			—
16／15	顎断面示数	—	77.42	—	—	—	1	74.42			—
19／18	頭断面示数	—	100.00	—	—	100.00	2	100.00			—

表34　脛骨計測値（男性、㎜）

	人骨番号	A－C区 2－1 右	F区 5－1 右	F区 9－1 左	37－1 右	37－1 左	37－3 右	37－3 左	37－5 右	37－5 左	平均 右 n	右 M	右 sd	左 n	左 M	左 sd
1b	脛骨長	－	－	－	－	－	－	－	357	－	1	357			－	
2	顆距間距離	－	－	－	－	－	－	－	(340)	－	1	(340)			－	
7	下端矢状径	－	－	－	－	－	－	－	36	－	1	36			－	
8	中央横径	－	28	28	28	28	30	29	30	－	4	29.00	1.16	3	28.33	
8a	栄養孔位最大径	－	－	31	31	30	34	33	31	32	3	32.00		4	31.50	1.29
9	中央横径	－	21	22	20	20	19	18	21	－	4	20.25	0.96	3	20.00	
9a	栄養孔位横径	－	－	21	22	22	22	20	23	23	3	22.23		4	21.50	1.29
10	骨体周	－	77	79	78	76	79	－	79	－	4	78.25	0.96	2	77.50	
10a	栄養孔位周	－	－	86	86	81	89	85	87	88	3	87.33		4	85.00	2.94
10b	最小周	79	－	73	72	70	－	－	71	－	3	74.00		2	71.50	
9／8	中央断面示数	－	75.00	78.57	71.43	71.43	63.33	62.07	70.00	－	4	69.94	4.88	3	70.69	
9a／8a	栄養孔位断面示数	－	－	67.74	70.97	73.33	64.71	60.61	74.19	71.88	3	69.96		4	68.39	5.70

表35　脛骨計測値（女性、㎜）

	人骨番号	37－2 右	37－2 左	37－4 右
1b	脛骨長	－	－	－
2	顆距間距離	－	－	－
6	最大下端幅	－	－	43.
7	下端最大径	－	－	30
8	中央最大径	28	28	25
8a	栄養孔位最大径	30	29	30
9	中央横径	18	18	18
9a	栄養孔位横径	21	20	22
10	骨体周	75	73	71
10a	栄養孔位周	79	78	82
10b	最小周	－	66	64
9／8	中央断面示数	64.29	64.29	72.00
9a／8b	栄養孔位断面示数	70.00	68.97	73.33

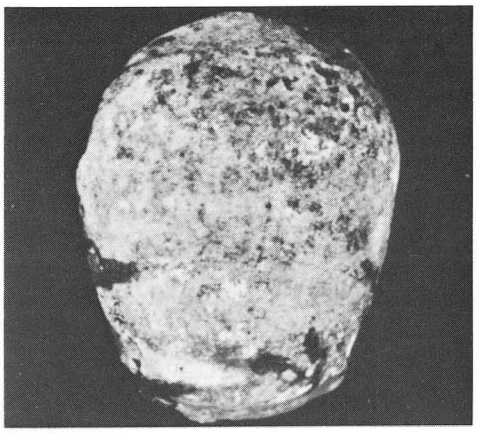
表36　腓骨計測値（男性、㎜）

	人骨番号	F区 9－1 左	37－5 右
2	中央最大径	17	17
3	中央最小径	11	12
4	中央周	49	51
4(2)	下端幅	－	21
3／2	中央断面示数	64.71	70.59

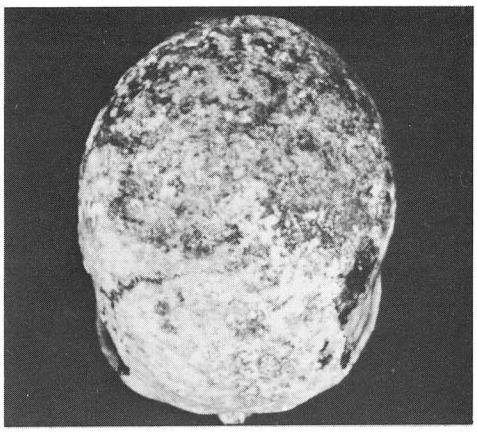
表37　膝蓋骨計測値（男性、㎜）

	人骨番号	F区 9－1 右	F区 9－1 左	37－5 右	37－5 左
1	最大高	43	42	42	41
2	最大幅	46	(45)	43	－
3	最大厚	21	－	19	19
4	関節面高	31	31	29	－
5	内側切面幅	23	－	23	－
6	外側切面幅	28	28	26	28
1／2	高幅示数	93.48	(93.33)	97.67	－

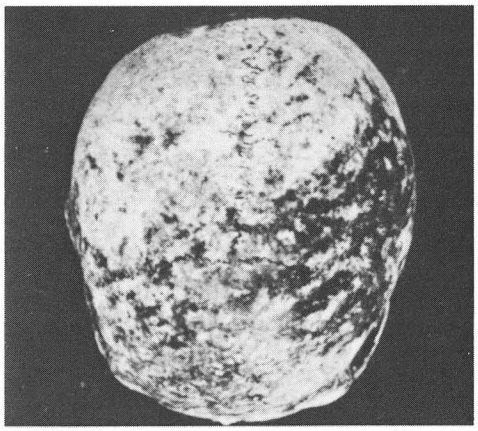
頭蓋上面



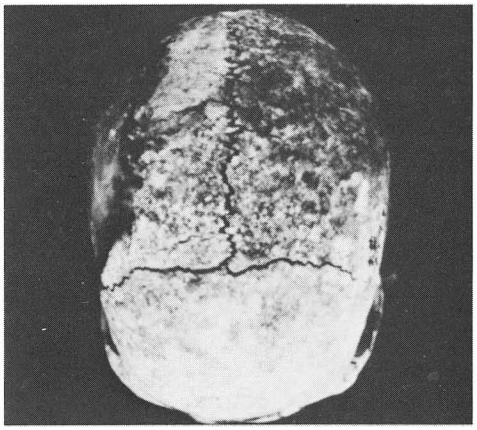
A－C区３－２（男性）



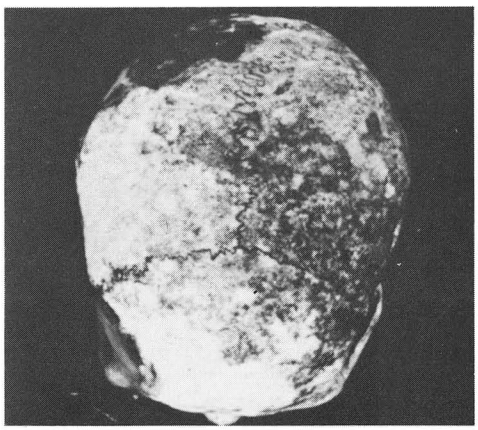
A－C区３－５（男性）



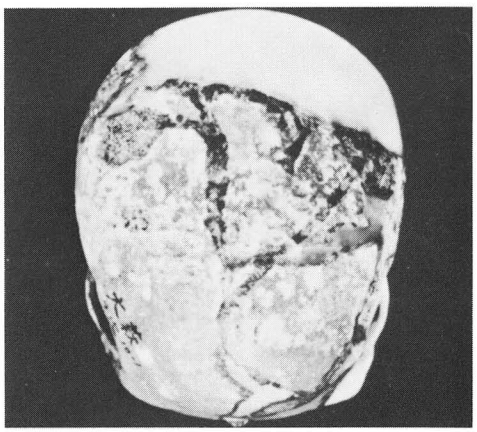
F区５－１（男性）



F区７－２（男性）

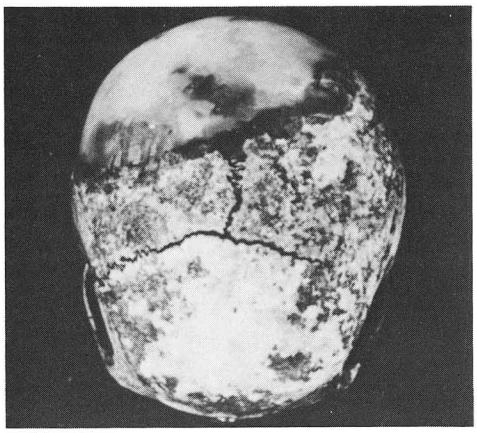


F区９－１（男性）

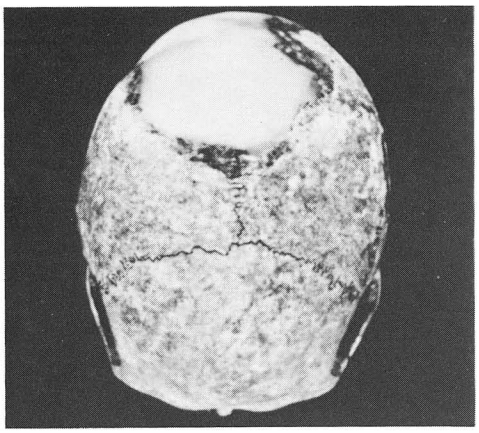


F区10－１（男性）

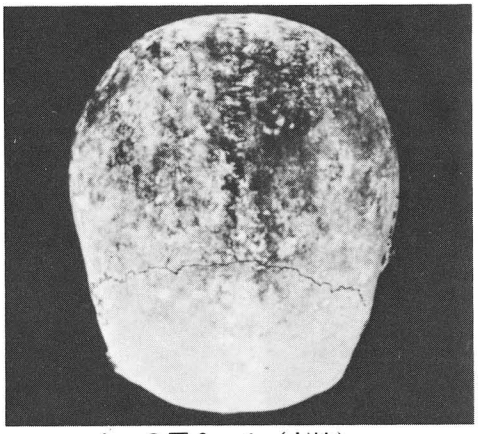
頭蓋上面



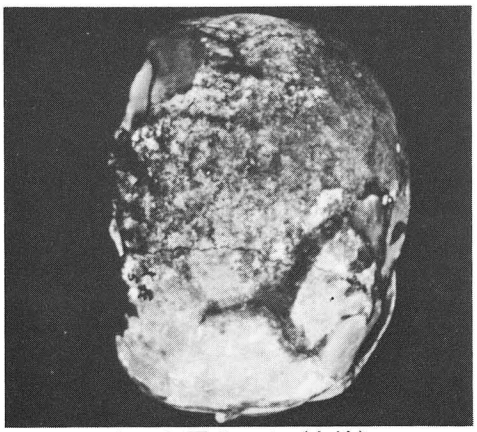
37— 1 （男性）



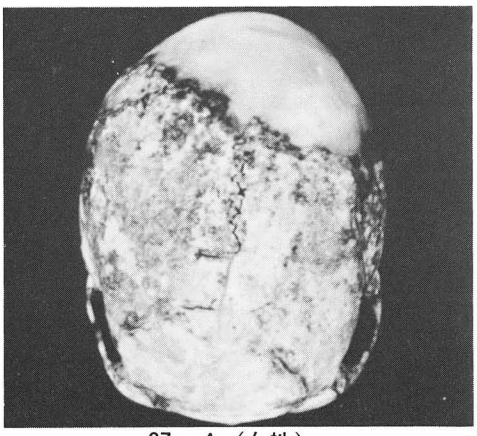
37— 3 （男性）



A —C 区 3 — 1 （女性）

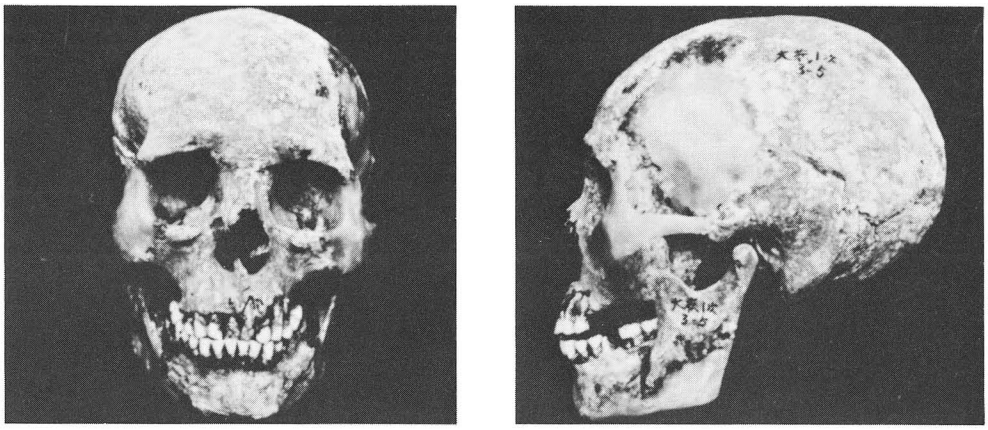


A —C 区 3 — 4 （女性）



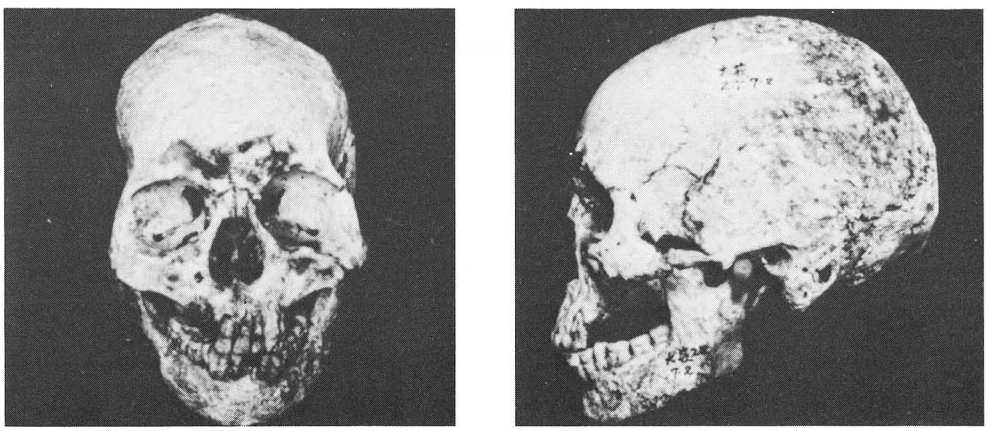
37— 4 （女性）

頭　蓋

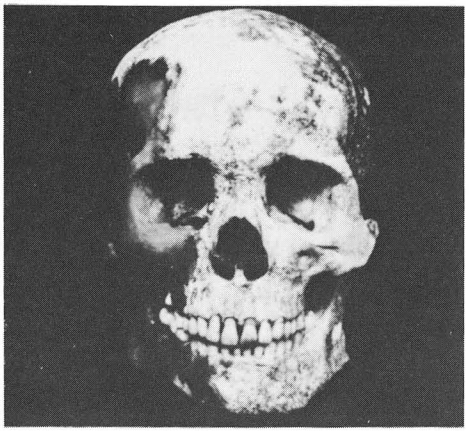
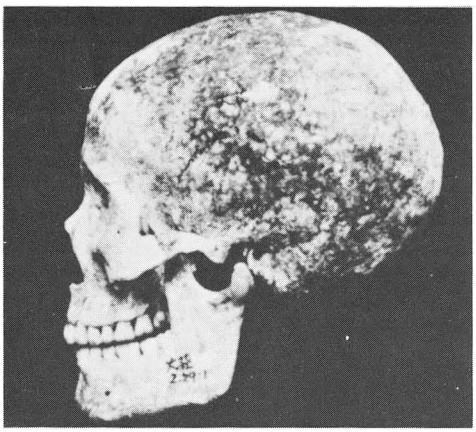


A－C区3－5（男性）

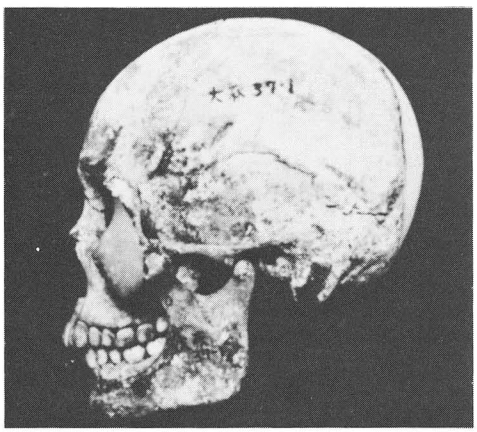
F区5－1（男性）



F区7－2（男性）

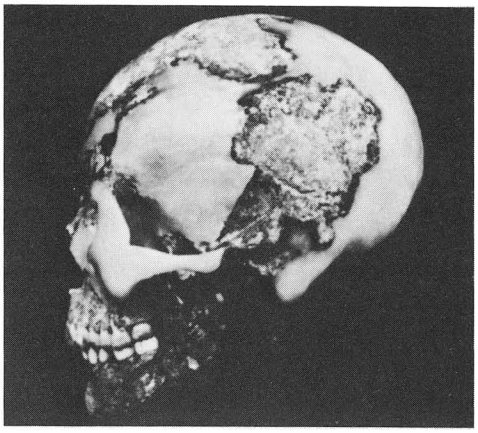



F区 9 — 1 （男性）

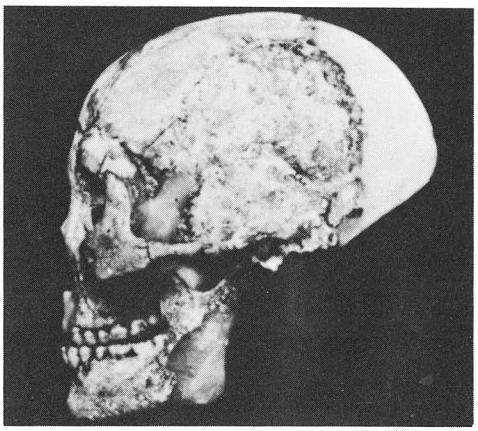


37— 1 （男性）

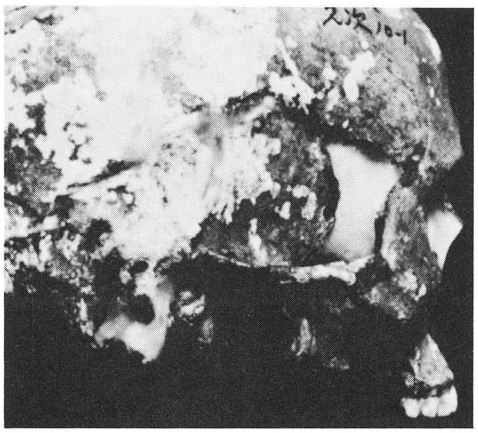
37— 3 （男性）



37－2 （女性）



37－4 （女性）



外耳道骨腫（Ｆ区10－１、男性）

宮崎県野尻町大萩地下式横穴出土の古墳時代小児・成年骨

分　部　哲　秋*

はじめに

宮崎県西諸県郡野尻町にある大萩地下式横穴（古墳）は、1973年の秋から1974年の２月にA～C区が、1974年の秋から1975年の１月にF区が、1981年２月に37号墳が発掘調査され、合計26体の人骨が出土し、そのうち５体が小児・成年骨であった。なお、これらの人骨群は考古学的所見により、古墳時代後期に属するものである。

筆者は、縄文時代から現代に至る幼小児・成年の成長、化骨あるいは歯の萌出等の問題を研究するため、資料を収集するとともに、各遺跡から出土する幼小児骨および成年骨についての報告を行なっている。大萩遺跡出土の小児・成年骨は、数少ない古墳時代のもので、当時の幼小児や成年の形質を知るうえで貴重な資料となると考えられ、詳細な観察および計測を行なったので、その結果を報告したい。

資料・方法

大萩地下式横穴出土の小児・成年骨の資料数は、表１に示しているように、A～C区では10例中３例が小児骨、F区では未成人骨はなく、37号墳では５例中２例が成年骨であった。小児骨と成年骨の年令、年令区分および性別は、表２に示すとおりである。

年令については、小児骨は藤田（1965）の歯の萌出時期と金田（1957）の歯根形成時期を用い、成年骨は、鈴木（1943）のレ線学的調査による骨癒合年令と、筆者（未発表）の肉眼的観察による近代人の骨癒合年令を用いて、古墳時代とそれらの時期が大差ないと仮定したうえで推定を行なった。

性別に関しては、成年骨２例は同定することができた。幼小児骨の性差については、種々の研究がなされているが、なお、性別を同定することは難しいのが現状である。

計測については、Martin—Saller（1957）の方法で行なったが、脛骨の横径については森本（1971）にならい、オリビエの方法に従った。

比較資料は、小児骨については、近代（明治）小児骨（分部、未発表）と大友弥生時代小児骨（分部、1981）の成績を用い、成年骨については、大萩成人骨（松下）、上の原成年骨（分部、1981）、旭台成年骨（分部、1983）の地下式横穴出土古墳人の成績を用いた。

---

* Tetsuaki Wakebe （長崎大学医学部解剖学第二教室）
(Department of Amatomy, Faculty of Medicime, Nagasaki University)

表1　資料数

	成人	幼児	小児	成年	合計
A－C区	7	0	3	0	10
F　区	11	0	0	0	11
37号墳	3	0	0	2	5
合　計	21	0	3	2	26

表2　小児・成年骨資料

人　骨	番　号	推定年令	年令区分	性別
A－C区	3号墳3号人骨	8才	小児Ⅰ期	不明
	5号墳1号人骨	10～11才	小児Ⅰ期	不明
	5号墳3号人骨	不明	小児Ⅰ期	不明
37号墳	1号人骨	18～19才	成年	男性
	2号人骨	17～18才	成年	女性

所　見

≪A～C区出土人骨≫

3号墳3号人骨（小児Ⅰ期、8才）

小児骨の中では最も保存状態が良いものであるが、頭蓋のみが残存していた。計測値は表3、4に示すとおりである。

⑴　頭蓋

1）脳頭蓋

後頭部および側頭骨の岩様部と錐体を欠損している。骨壁は薄く、前頭結節はよく膨隆している。また、眉上弓の隆起も認められない。

頭蓋最大長は165㎜、頭蓋最大幅は144㎜で、頭蓋長幅示数は87.27となり、頭型はhyperbrachykran（過短頭）に属している。また、最小前頭幅は93㎜、最大前頭幅は117㎜、両耳幅は117㎜、頭蓋水平周は492㎜、横弧長は319㎜である。

2）顔面頭蓋

顔面頭蓋は、下顎骨の下顎角と下顎枝を欠くほかは、ほぼ完全である。

頬骨弓幅は118㎜、中顔幅は96㎜、顔高は99㎜、上顔高は56㎜で高径の割に幅径は大きいものである。従って、顔示数、上顔示数は83.90（K）、47.46（K）、103.13（V）、58.33（V）となり、顔型としては、それぞれ、euryprosop（広顔）、euryen（広上顔）hyperchamaeprosop（過低顔）、hyperchamaeprosop（過低顔）に属している。

鼻根部は広くて扁平で、前眼窩間幅は17㎜、両眼窩幅は83㎜で、眼窩間示数は20.48となり、示数値は大きい。

眼窩は、眼窩幅が35㎜（右）、34㎜（左）、眼窩高が31㎜（右、左）で、眼窩示数は88.57（右）、91.18（左）となり、面側ともにhypsiknoch（高眼窩）に属している。また、鼻幅は21㎜、鼻高は41㎜で、鼻示数は51.22となり、chamaerrhin（低鼻）に属している。

3）歯

歯はすべて残存しており、歯式で示すと次のとおりである。

(M2)	M1	m2	m1	c	I2	I1	I1	I2	c	m1	m2	M1	(M2)
(M2)	M1	m2	m1	c	I2	I1	I1	I2	c	m1	m2	M1	(M2)

（　）歯槽内埋伏

歯の萌出状態は永久歯では、上顎、下顎ともに I_1、I_2、M_1 が萌出し、C、P_1、P_2、M_2 は未萌出である。咬耗の程度は、乳歯はすべて Broca の2度、永久歯は上・下顎の I_1、M_1 が2度で、I_2 には咬耗が認められない。従って、上、下顎の I_2は萌出直後と推測される。

(2)　化骨

化骨の状態は、前後頭内軟骨結合はすでに骨癒合しているが、蝶後頭軟骨結合は未癒合である。その他は欠損のため観察不能である。

(3)　年令

藤田（1965）の永久歯の萌出時期（現代人）によれば、萌出している歯のうち最も遅く萌出するのは、上顎の I_2 で、男性平均8才7ケ月、女性平均8才1ケ月である。上顎の I_2 は萌出直後であることから、本人骨の年令は8才と推定される。また、本人骨の歯根のレ線像は、金田（1957）の歯根形成時期（現代人）の8才後半に相当するものである。

5号墳1号人骨（小児I期、10～11才）

頭蓋のみが残存していた。

(1)　頭蓋

1）脳頭蓋

前頭骨左半、左側の頭頂骨、後頭骨の外側部から底部、左側頭骨の錐体および蝶形骨体が残存していた。保存状態が悪く頭型を知ることはできないが、骨壁は薄く、前頭骨の前頭結節はよく膨隆している。また、眉上弓の隆起は認められない。

2）顔面頭蓋

左側の下顎枝の上部と遊離歯が7本残存していたにすぎない。

残存していた歯を歯式で示すと次のとおりである。

(M2)	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	M1	(M2)
／	／	／	P1	C	I2	／	／	／	C	／	／	／	／

（　）歯槽内埋伏
／　不明

歯はすべて歯冠のみが残存している。咬耗の程度は、上顎の M_2 、下顎の I_2、C、P_1 がが Broca の1度で、上顎のM_2 には咬耗が認められない。従って、上顎 M_2 は、未萌出と推測される。

⑵　化骨

化骨の状態は、前後頭内軟骨結合と後後頭内軟骨結合はすでに骨癒合を完了し、蝶後頭軟骨結合は未癒合である。

⑶　年令

藤田（1965）によると、萌出していたと推測される歯の中で最も遅く萌出するのは、下顎のP_1で男性平均9才10ケ月、女性平均9才7ケ月である。また、未萌出と推測される上顎M_2は、男性平均11才11ケ月、女性平均12才である。従って、P_1の咬耗度を考え合わせると、本人骨の年令は、10～11才と推定される。

5号墳3号人骨（小児Ⅰ期、不明）

保存状態がきわめて悪く、左頭頂骨の後部、後頭骨の後頭鱗正中部および左側頭骨の錐体が残存していたにすぎない。

歯が残っていないために、これからの年令の推定はできないが、脳頭蓋の各骨の大きさや骨壁の厚さは、幼児骨（0～6才）のものよりはやや大きくて厚く、小児Ⅱ期（12～15才）のものより小さくて薄い。また、外後頭隆起もほとんど認められないことから、本人骨の年令は、小児Ⅰ期（7～11才）に相当するものと推定される。

≪37号墳出土人骨≫

各骨の主要計測値は表5～12に示すとおりである。

37号墳1号人骨（男性、成年、18～19才）

松下が別項で報告しているように、性別は男性である。

⑴　頭蓋

1）脳頭蓋

脳頭蓋はうしろ約1／3を欠損しており、頭蓋最大長は計測できないが、頭蓋最大幅は139㎜、バジオン・ブレグマ高は140㎜である。観察による頭型は、短頭型と推測される。その他、最小前頭幅は95㎜、最大前頭幅は112㎜、両耳幅は131㎜、横弧長は312㎜である。

2）顔面頭蓋

顔面頭蓋は、左側頬骨の一部を欠く以外は、ほぼ完全である。

頬骨弓幅は139㎜、中顔幅は復元値で（105）㎜、顔高は109㎜、上顔高は58㎜である。従って、顔示数（K）は78.42、上顔示数（K）は41.73となり、それぞれ　hypereuryprosop

（過広顔）、 hypereuryen（過広上顔）に属している。

眼窩では、眼窩幅が42㎜（右）、眼窩高が33㎜（右）で、眼窩示数は 78.57 （右）となり、右側は mesokonch（中眼窩）に属している。また、鼻部では、鼻幅が27㎜、鼻高が49㎜で、鼻示数は 55.10 となり、 chamaerrhin（低鼻）に属している。

3）歯

残存していた歯を歯式で示すと次のとおりである。

○	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3
(M_3)	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	(M_3)

○歯槽開存
（ ）歯槽内埋伏

上顎の M_3 まで萌出しているが、下顎の M_3 は両側とも水平智歯で、歯槽内に埋伏している。咬耗度は、すべて Broca の1度である。

⑵ 四肢骨

1）上肢骨

肩甲骨（右、左）、鎖骨（左）、上腕骨、橈骨、尺骨が残存していた。

1. 上腕骨

左側がほぼ完全であるが、左側は骨体が残存していた。上腕骨最大長は291㎜（右）でやや長い。中央最大径は23㎜（右）、22㎜（左）、中央最小径は16㎜（右、左）で、骨体断面示数は 69.57 （右）、 72.73 （左）となり、骨体は扁平である。また、骨体最小周は59㎜（右）、57㎜（左）で、中央周は64㎜（右）、63㎜（左）である。

2. 橈骨

右側は頸部が欠損しているほかは完全であるが、左側は両端を欠く骨体が残存していた。骨体中央横径は14㎜（右、左）、骨体中央矢状径は12㎜（右）、11㎜（左）で、中央断面示数は 85.71 （右）、 78.57 （左）となる。また、最小周は40㎜（右）、38㎜（左）で、骨体中央周は40㎜（右、左）である。

3. 尺骨

左側の骨体のみが残存していた。中央最大径は16㎜、中央最小径は12㎜で、中央断面示数は 80.00 となる。また、最小周は36㎜、中央周は46㎜である。

2）下肢骨

寛骨（右、左）、大腿骨、脛骨が残存していた。

1. 大腿骨

左右とも大転子と遠位端を欠いていた。骨体中央矢状径は25㎜（右）、26㎜（左）、骨体

中央横径は24㎜（右）、23㎜（左）で、骨体断面示数は104.17（右）、113.04（左）となる。また、骨体中央周は78㎜（右）、77㎜（左）で、骨体はやや小さい。

2. 脛骨

両側とも近位端を欠いていた。中央最大径は28㎜（右、左）、中央横径は20㎜（右、左）で、中央断面示数は71.43（右、左）となる。骨体周は、78㎜（右）、76㎜（左）で、最小周は72㎜（右）、70㎜（左）である。

⑶ 化骨

頭蓋では、蝶後頭軟骨結合がすでに骨癒合を完了している。

上肢骨で骨癒合を完了している部は、肩甲骨の烏口突起、上腕骨の滑車、小頭および内側上顆、橈骨の近位端で、未癒合の部は、鎖骨の胸骨端、上腕骨の骨頭、橈骨と尺骨の遠位端である。なお、尺骨の近位端は欠損しているため観察不能である。

下肢骨で骨癒合を完了している部は、寛骨臼、大腿骨の骨頭と小転子、脛骨の遠位端で、未癒合の部は、腸骨稜のみである。その他の部は、欠損のため観察不能である。

⑷ 年令

歯はM_3まで萌出し、M_2の歯根も完成しているので、年令は20才に近いものと考えられるが、さらに詳細な年令を追究するため、化骨の進行状態から年令の推定を行なった。ちなみに、鈴木（1943）のレ線学的調査による現代人の骨癒合年令と、筆者が肉眼的観察により、現在資料収集および検討中である近代人の骨癒合年令は、表13に示すとおりである。

頭蓋底の蝶後頭軟骨結合は骨癒合を完了しており、本例は男性であるので、この部からは18才以上と推測される。四肢骨では、比較的遅い年令で化骨する上腕骨の内側上顆、大腿骨の骨頭と小転子、脛骨の遠位端が骨癒合を完了しているので、少なくとも17才以上である。また、未癒合の部は、近代人の成績によれば、上腕骨の骨頭が19～20才、橈骨および尺骨の遠位端が20才で骨癒合することから、この部からは、19才以下となる。従って、本人骨の年令は、18～19才と推定される。

37号墳2号人骨（女性、成年、17～18才）

松下が別項で述べているように、性別は女性である。

⑴ 頭蓋

1）脳頭蓋

脳頭蓋は、うしろ半分を欠損しているため頭蓋最大長は計測できないが、頭蓋最大幅は

146㎜、バジオン・ブレグマ高は131㎜で、頭蓋幅高示数は、89.73となる。また、最小前頭幅は95㎜、両耳幅は131㎜、横弧長は321㎜である。

2）顔面頭蓋

顔面頭蓋は左側の頬骨を欠く以外は、ほぼ完全である。頬骨弓幅および中顔幅は計測できないが、顔高は112㎜、上顔高は64㎜である。

眼窩幅は41㎜（右）、眼窩高は31㎜（右）で、眼窩示数は75.61（右）となり、右側はchamaekonch（低眼窩）に属している。鼻幅は29㎜、鼻高は50㎜で、鼻示数は58.00となり、hyperchamaerrhin（過低鼻）に属している。

3）歯

残存していた歯を歯式で示すと次のとおりである。

(M3)	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	(M3)	⊗歯槽閉鎖
M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	⊗	M1	M2	(M3)	( )歯槽内埋伏

歯の萌出状態は、下顎の右側M3まで萌出し、下顎の左側M3と上顎の両側M3は未萌出である。咬耗の程度は、Brocaの1～2度である。

⑵ 四肢骨

1）上肢骨

鎖骨（右）、肩甲骨（右、左）、上腕骨、橈骨が残存していた。

1. 上腕骨

右側は遠位部を欠き、左側は骨体の一部が残存していた。中央最大径は23㎜（右）、中央最小径は15㎜（右）で、骨体断面示数は65.22（右）となり、骨体は扁平である。また、骨体最小周は58㎜（右）、中央周は67㎜（右）で骨体はやや大きい。

2. 橈骨

右側のみが残存し、遠位部を欠損していた。骨体中央横径は15㎜、骨体中央矢状径は11㎜で、中央断面示数は73.33となる。また、骨体中央周は45㎜である。

2）下肢骨

寛骨（右）、大腿骨、脛骨が残存していた。

1. 大腿骨

両側とも骨体および骨頭が残存していた。骨体中央矢状径は23㎜（右）、24㎜（左）、骨体中央横径は22㎜（右、左）で、骨体断面示数は、100.00（右）、104.35（左）である。また、骨体中央周は76㎜（右、左）でやや細い。

2. 脛骨

右側は骨体が残存し、左側は近位端を欠いていた。中央最大径は28㎜（右、左）、中央最小径は18㎜（右、左）で、骨体断面示数は64.29（右、左）となり、骨体は扁平である。また、骨体周は75㎜（右）、73㎜（左）、最小周は66㎜（左）である。

⑶ 化骨

頭蓋では、蝶後頭軟骨結合がすでに骨癒合している。

上肢骨において骨癒合している部は、肩甲骨の烏口突起、橈骨の近位端で、未癒合は上腕骨の骨頭である。下肢骨では、大腿骨の骨頭と小転子、脛骨の遠位端が骨癒合を完了している。その他は、欠損のため観察不能である。

⑷ 年令

歯は下顎の右側M_3はすでに萌出しており、上・下顎のM_2の歯根も完成していることから、本人骨の年令は少なくとも16才以上と推測されるが、さらに詳細な年令を追究するために、化骨の状態から推定を行なった。（表13）

蝶形後頭軟骨結合はすでに骨癒合していることから、16才以上と推定される。四肢骨では、近代人の成績で17才で骨癒合を完了する大腿骨の骨頭や小転子、脛骨の遠位端はすでに骨癒合を完了し、19才で骨癒合する上腕骨骨頭は未癒合である。従って、これらのことから、本人骨の年令は17～18才と推定される。

表3　脳頭蓋主要計測値（㎜）

		大萩A－C区 3－3	大友弥生人		近代人			
		8才	9才		7才（男性）		8才（女性）	
			n	M	n	M	n	M
1.	頭蓋最大長	165	1	164	4	168.75	3	163.33
8.	頭蓋最大幅	144	2	137.00	4	138.00	3	129.33
8／1	頭蓋長幅示数	87.27	1	80.49	4	81.96	3	79.22
9.	最小前頭幅	93	1	90	4	90.00	3	86.00
10.	最大前頭幅	117	1	106	4	113.25	3	104.33
11.	両耳幅	117	2	116.50	4	114.75	3	108.33
23.	頭蓋水平周	492	1	469	4	484.50	3	455.00
24.	横弧長	319	1	294	4	312.25	3	292.33

表 4　顔面頭蓋主要計測値（㎜）

		大萩A－C区 3－3	大友弥生人		近代人			
		8才	9才		7才（男性）		8才（女性）	
			n	M	n	M	n	M
41.	側顔長	68	1	62	4	64.75	3	60.00
43.	上顔幅	95	2	92.50	4	90.75	3	88.00
45.	頬骨弓幅	118		—	4	110.00	3	104.33
46.	中顔幅	96	1	86	4	80.00	3	79.67
47.	顔　高	99	2	98.00	4	94.00	3	91.00
48.	上顔高	56	2	55.50	4	54.25	3	51.00
47／45	顔示数（K）	83.90		—	4	85.47	3	87.30
48／45	上顔示数（K）	47.46		—	4	49.34	3	48.93
47／46	顔示数（V）	103.13	1	118.60	4	117.63	3	114.27
48／46	上顔示数（V）	58.33	1	67.44	4	65.70	3	64.04
49[a].	眼間幅	20	1	18	4	17.25	3	16.00
50.	前眼窩間幅	17	2	15.50	4	13.25	3	13.00
44.	両眼窩幅	83	2	89.00	4	84.75	3	81.67
50／44	眼窩間示数	20.48	2	17.42	4	15.63	3	15.91
51.	眼窩幅（右）	35	2	40.00	4	37.75	3	37.00
	（左）	34	2	40.00	4	38.25	3	36.33
52.	眼窩高（右）	31	1	（35）	4	31.50	3	30.67
	（左）	31	2	（32.00）	4	32.00	3	30.33
52／51	眼窩示数（右）	88.57	1	（83.33）	4	83.43	3	82.88
	（左）	91.18	2	（80.00）	4	83.66	3	83.43
54.	鼻幅	21	2	23.00	4	20.25	3	21.67
55.	鼻高	41	2	41.00	4	38.75	3	38.00
54／55	鼻示数	51.22	2	56.11	4	52.28	3	57.24

表 5　脳頭蓋主要計測値（㎜）

		大　萩		大　萩				上の原	旭　台
		37－1	37－2	成人骨				8－1	3－3
		男性	女性	男性		女性		性別不明	性別不明
		成年	成年	n	M	n	M	成年	成年
1.	頭蓋最大長	—	—	5	183.20	2	173.50	164	172
8.	頭蓋最大幅	143	146	3	144.00	1	142	—	（147）
17.	バジオン・ブレグマ高	140	131	5	133.40	2	128.50	127	136
8／1	頭蓋長幅示数	—	—	1	80.56		—	—	（84.48）
17／1	頭蓋長高示数	—	—	4	72.55	2	74.07	77.44	78.16
17／8	頭蓋幅高示数	97.90	89.73	2	94.78		—	—	（92.52）
5.	頭蓋底長	101	105	5	103.20	2	99.50	91	96
9.	最小前頭幅	95	95	5	93.00	2	90.50	96	99
10.	最大前頭幅	112	—	4	117.00	2	112.00	—	123
11.	両　耳　幅	131	131	1	132	1	125	—	—
24.	横　弧　長	312	321	1	309		—	—	—

表6　顔面頭蓋主要計測値（㎜）

		大　萩		大萩				上の原	旭台	旭台
		37－1	37－2	成人骨				8－1	3－3	11－2
		男性	女性	男性		女性		性別不明	性別不明	性別不明
		成年	成年	n	M	n	M	成年	成年	成年
40.	顔　長	94	107	5	102.80	2	97.50	89	94	－
41.	側顔長	73（右）	73（右）	6	74.50	3	70.67	74	65	－
42.	下顔長	104	119	5	112.60	1	109	－	－	－
43.	上顔幅	106	－	5	106.40	1	101.50	－	106	－
45.	頬骨弓幅	139	－	2	142.00		－	－	－	－
46.	中顔幅	(105)	－	4	102.25		－	95	94	98
47.	顔　高	109	112	5	115.80	2	108.00	－	－	－
48.	上顔高	58	64	6	65.00	3	58.00	58	57	59
47／45	顔示数（K）	78.42	－	2	79.28		－	－	－	－
48／45	上顔示数（K）	41.73	－	2	45.09		－	－	－	－
47／46	顔示数（V）	(103.81)	－	4	113.73	1	105.83	－	－	－
48／46	上顔示数（V）	(55.24)	－	4	63.39	1	59.78	61.05	60.64	60.20
50.	前眼窩間幅	18	19	7	19.00	4	18.25	18	－	－
44.	両眼窩幅	－	－	3	100.33	2	95.00	(99)	99	－
50／44	眼窩間示数	－	－	3	19.60	2	17.90	18.18	－	－
51.	眼窩幅（右）	42	41	3	42.67	3	40.33	42（左）	－	42
52.	眼窩高（右）	33	31	6	32.33	4	32.00	33（左）	33	32
52／51	眼窩示数（右）	78.57	75.61	3	74.27	3	79.33	78.57（左）	－	76.19
54.	鼻　幅	27	29	8	26.75	3	25.00	25	25	25
55.	鼻　高	49	50	7	50.71	4	46.25	45	43	43
54／55	鼻示数	55.10	58.00	7	52.76	3	54. 76.	55.56	58.14	58.14

表7　鎖骨主要計測値（右、㎜）

		大　萩		大　萩			
		37－3	37－2	成人骨			
		男性	女性	男性		女性	
		成年	成年	n	M	n	M
4.	中央垂直径	11（左）	10	2	9.50	1	9
5.	中央矢状径	10（左）	11	2	13.00	1	12
6.	中央周	31（左）	36	2	39.00	1	36
4／5	鎖骨断面示数	110.00（左）	90.91	2	73.81	1	75.00

表8　上腕骨主要計測値（右、㎜）

		大　萩	大　萩					上の原	旭台
				成人骨					
		37－1	37－2	男性		女性		8－1	11－2
		男性	女性					性別不明	性別不明
		成年	成年	n	M	n	M	成年	成年
1.	上腕骨最大長	291	－		－		－	－	－
2.	上腕骨全長	288	－		－		－	－	－
5.	中央最大径	23	23	2	22.00		－	18	17.6
6.	中央最小径	16	15,	2	17.00		－	12	13.2
7.	骨体最小周	59	58	2	56.00		－	47	49.0
7(a)	中　央　周	64	67	2	66.00		－	51	51.0
6／5	骨体断面示数	69.57	65.22	2	77.28		－	66.67	75.00
7／1	長厚示数	20.27	－		－		－	－	－

表9　橈骨計測値（右、㎜）

		大　萩	大　萩					旭台	旭台
				成人骨				3－3	11－2
		37－1	37－2	男性		女性		性別不明	性別不明
		男性	女性						
		成年	成年	n	M	n	M	成年	成年
3.	最小周	40	－	2	42.00	1	34	31.5	－
4.	骨体横径	15	15	3	16.33	1	16	12.3	12.4
4a.	骨体中央横径	14	15	3	15.33	1	13	12.0	12.0
5.	骨体矢状径	11	10	3	11.33	1	10	9.5	9.3
5a.	骨体中央矢状径	12	11	3	11.33	1	10	9.2	9.1
5(5)	骨体中央周	40	45	3	42.33	1	37	34.0	34.0
5(6)	骨下端幅	29	－	1	32		－	－	－
5／4	骨体断面示数	73.33	66.67	3	69.28	1	62.50	77.24	75.00
5a／4a	中央断面示数	85.71	73.33	3	74.03	1	76.92	76.67	75.83

表10　尺骨計測値（右、㎜）

		大萩	大萩		旭台
			成人骨		
		37－1	男性		11－2
		男性			性別不明
		成年	n	M	成年
3.	最　小　周	36	1	38	－
11.	尺骨矢状径	13		－	11.0
12.	尺骨横径	14		－	12.9
S.	中央最小径	12	1	12	10.7
L.	中央最大径	15	1	16	12.5
C.	中　央　周	46	1	45	36.5
11／12	骨体断面示数	92.86		－	85.27
S／L	中央断面示数	80.00	1	75.00	85.60

表11　大腿骨主要計測値（右、㎜）

		大　萩		大萩				上の原	旭台	旭台
		37－1	37－2	成人骨				8－1	3－3	11－2
		男性	女性	男性		女性		性別不明	性別不明	性別不明
		成年	成年	n	M	n	M	成年	成年	成年
6.	骨体中央矢状径	25	23	5	28.20	3	25.33	22	22.4	22.3
7.	骨体中央横径	24	23	5	25.60	3	23.67	18	19.5	19.6
8.	骨体中央周	78	76	5	84.40	3	77.33	63	65.0	66.5
9.	骨体上横径	30	27	1	31	3	28.00	20	—	—
10.	骨体上矢状径	22	22	1	23	3	21.67	23	—	—
6／7	骨体中央断面示数	104.17	100.00	5	110.44	3	107.51	122.22	114.87	113.78
10／9	骨体上断面示数	73.33	81.48	1	74.19	3	77.63	115.00	—	—

表12　脛骨主要計測値（右、㎜）

		大　萩		大萩				上の原	旭台	旭台
		37－1	37－2	成人骨				8－1	3－3	11－2
		男性	女性	男性		女性		性別不明	性別不明	性別不明
		成年	成年	n	M	n	M	成年	成年	成年
8.	中央最大径	28	28	3	29.33	1	25	20（左）	23.5	24.2（左）
8a.	栄養孔位最大径	31	30	2	32.50	1	30	22（左）	25.4	—
9	中央横径	20	18	3	20.33	1	18	16（左）	18.2	17.3（左）
9a.	栄養孔位横径	22	21	2	22.50	1	22	17（左）	19.5	—
10	骨　体　周	78	75	3	78.33	1	71	58（左）	66.0	65.0（左）
10a.	栄養孔位周	86	79	2	88.00	1	82	61（左）	70.0	—
10b.	最　小　周	72	—	2	75.00	1	64	54（左）	62.5	—
9／8	中央断面示数	71.43	64.29	3	69.44	1	72.00	80.00（左）	77.45	71.49（左）
9a／8a	栄養孔位断面示数	70.97	70.00	2	69.45	1	73.33	77.27（左）	76.77	—

表13　化　骨

		大萩 37－1 (男性)	大萩 37－2 (女性)	骨癒合年令 近代人（分部） 男性	近代人（分部） 女性	現代人（鈴木） 男性	現代人（鈴木） 女性
頭　蓋	蝶後頭軟骨結合	○	○	17～18	15～16		
鎖　骨	胸骨端	×	－	20以上	20以上	24	23
肩甲骨	烏口突起	○	○	16	14～16	16.5	15
上腕骨	骨　頭	×	×	19～20	19	17.5	17
	滑　車	○	－	14	13	16.5	14.5
	小　頭頭	○	－	14	13	15	13
	内側上顆	○	－	17～19	16	17	15
橈　骨	近位端	○	○	16	14	16	14
	遠位端	×	－	20	19	18	17
尺　骨	近位端	－	－	16	13	15.5	13.5
	遠位端	×	－	20	19	18	17
寛　骨	寛骨臼	○	－	16	14	16	14
	腸骨稜	△	－	20以上	19	20	20
	坐骨結節	－	－	20以上	20以上	20	20
大腿骨	骨　頭	○	○	17～20	17	16	15
	大転子	－	－	17～19	17	17	16
	小転子	○	○	17～20	17	17	16
	遠位端	－	－	20	17	18	16.5
脛　骨	近位端	－	－	20	17	16.5	16.5
	遠位端	○	○	17～19	17	16.5	15

〔○骨癒合完了，△骨癒合途中，×未癒合，－観察不能〕

考　察

幼小児骨の出土率

大萩地下式横穴から出土した人骨総数26体のうち、小児骨３体の占める割合は11.54％と低いものである。各遺跡出土の幼小児骨の例数は、表14に示しているように、弥生時代の遺跡から出土する幼小児骨の割合はかなり高く20％以上を占めており、古墳時代および近世のそれは低率である。また、弥生時代の遺跡においては、幼児骨の割合が高く、低年令での死亡例が多いのに対して、古墳時代や近世の遺跡では、その割合は低く、低年令での死亡例は少ない。

大萩地下式横穴の場合も、出土総数に対する幼小児骨の割合は低く、かつ幼児骨は出土しておらず、いままで報告した限りでは、従来の古墳時代の各遺跡にみられる特徴と一致するものである。

表14　各遺跡における幼小児骨の出土数

遺　跡　名	時代	出土人骨総数	幼児	小　児		不明	合計（％）
				Ⅰ期	Ⅱ期		
宮の本	弥生	39	6	2	0	1	9（23.08）
宇久松原	弥生	34	11	5	0	1	17（50.00）
大友（3.、4次）	弥生	55	10	3	1	0	14（25.45）
安永田	弥生	9	2	2	0	0	4（44.44）
大友（3、4次）	古墳	3	0	1	0	0	1（33.33）
朝田墳墓群第Ⅱ地区	古墳	25	1	0	1	0	2（ 8.00）
日守地下式	古墳	5	1	0	0	0	1（20.00）
旭台地下式	古墳	36	0	4	1	0	5（13.89）
大萩地下式	古墳	26	0	3	0	0	3（11.54）
成川	古墳	103	1	3	0	0	4（ 3.88）
松の尾	中・近世	25	1	0	1	0	2（ 8.00）
成岡・西ノ平	近世	29	1	1	1	0	3（10.34）

小児・成年骨の形質

小児骨（Ａ～Ｃ区、３号墳３号人骨）

頭蓋における主要計測値をほぼ同年令の大友弥生小児骨（９才）、近代小児骨男性（７才）および同年令の近代小児骨女性（８才）と表３、４において対比してみた。

脳頭蓋においては、大萩小児骨の頭蓋最大長は165㎜、頭蓋最大幅は144㎜で、頭蓋長幅示数は87.27となり、比較小児骨群の頭型がほぼ短頭型であるのに対して、過短頭に属している。一方、大友弥生成人骨（松下、1981）の頭蓋長幅示数は男性の平均値が77.93で、中頭型に属し、また、大萩地下式横穴出土の成人骨は、短頭型のものが多いことが内藤（19

74）、松下（1984）によって指摘されており、成人骨においては、大萩古墳人は大友弥生人に比べ短頭の傾向が著しい。一般に幼小児の頭型は短頭であることが明らかにされており、筆者による近代人の成績によっても同様な特徴が認められるが、大萩小児骨には、大友弥生小児骨に比べ、短頭の傾向がよりいっそう強く認められる。このように、大萩小児骨の頭型における特徴は、成人骨における大友弥生人と大萩古墳人との間にみられる傾向と一致していることから、すでに幼小児期から成人の特徴を現わしていることを推測させるものがある。

顔面頭蓋においては、頬骨弓幅は118㎜、中顔幅は96㎜、顔高は99㎜、上顔高は56㎜で、比較小児骨群に比べ、幅径がとくに大きい。従って、顔示数、上顔示数は、それぞれ83.90（K）、47.46（K）、103.13（V）、58.33（V）となり、それらの示数値は、比較小児骨群に比べてかなり小さいもので、低・広顔の傾向が著しい。一方、大友弥生人骨男性（松下、1981）の顔示数、上顔示数は、それぞれ83.85（K）、47.55（K）、116.55（V）、64.46（V）で、大萩古墳成人骨男性（松下、1984)の顔示数、上顔示数は、それぞれ78.99（K）、43.97（K）、113.73（V）、63.39（V）で、両者とも低・広顔を特徴とする人骨群であるが、大萩古墳人は大友弥生人に比べて、その傾向がより著しい。一般に、幼小児の顔面型態は低顔を特徴とするが、大萩小児骨の顔面には、低・広顔の傾向が大友弥生小児骨よりもいっそう強く認められる。この特徴は、大友弥生成人骨と大萩古墳成人骨との間に認められる傾向と一致することから、頭型と同様に、すでに幼小児期から成人の特徴が現われていることを推測させるものがある。

成年骨〔37号墳1号人骨（男性）、37号墳2号人骨（女性）〕

年令は両人骨とも成年期の後半と推定されるもので、大萩地下式横穴出土の成人男性および女性、成年期の前半と推定される上の原8号墳1号、旭台3号墳3号、旭台11号墳2号の各人骨と表5～12において対比を行なった。

脳頭蓋における大萩37－1号および2号の計測値は、大萩成人骨とほぼ同じか、それをややうわまわるものである。他の古墳成年骨との比較では、頭蓋底長は両成年骨よりかなり大きいが、その他は大差ないものである。また、大萩37－1号の頭型は、観察所見によれば短頭型で、上の原および旭台成年骨の頭型と同じである。

顔面頭蓋では、大萩37－1号の頬骨弓幅は139㎜、中顔幅は（105）㎜、顔高は109㎜、上顔高は58㎜で、これらの計測値は、成人男性骨と比較して大差ないが、幅径については、上の原および旭台成年骨よりも大きい。従って、大萩37－1の顔示数、上顔示数は、78.42（K）、41.73（K）、（103.81）（V）、（55.24）（V）となり、大萩成人男性骨や

比較成年骨群に比べ、低・広顔の傾向が著しい。眼窩の計測値や示数値は、大萩37－1号、2号ともに、大萩成人骨および他の成年骨群とほぼ同じ値である。鼻幅、鼻高も、大萩37－1号、2号ともに成人骨と大差ないものであるが、他の成年骨群に比べてやや大きい。

四肢骨において、大萩成年骨の上腕骨骨体の大きさは、他の成年骨群に比べかなり大きく、大萩成人骨とほぼ同じである。また、大萩37－1号、2号の骨体断面示数は、それぞれ69.57（右）、66.22（左）で、上の原成年骨と同様に骨体は扁平である。大腿骨の骨体は、成人骨に比べてやや小さいが、他の成年骨群よりもかなり大きいものである。骨体中央断面示数は、大萩37－1号が104.17（右）、2号が100.00(右)で、いわゆる柱状形成の像は全く認められない。脛骨では、骨体の諸径は大萩成人骨の値と大差なく、他の成年骨群よりも大きい。中央断面示数は、大萩37－1号、2号が、それぞれ71.43（右）、64.29（左）で、大萩37－2号の骨体は扁平である。

このように、四肢骨の骨体の大きさは、大萩成人骨のものに近似しており、上の原および旭台成年骨のものよりかなり大きい。大萩地下式横穴出土の成年骨2例の年令は、化骨の状態から成年期後半と推定したものであるが、四肢骨の大きさからみても、同様に化骨より成年期前半と推定した上の原および旭台成年骨よりはかなり大きく、骨の成長は成人の域に達していたものといえる。

要　　約

宮崎県西諸県郡野尻町にある大萩地下式横穴（古墳）からは、古墳時代後期人骨26体が出土し、そのうち5体が小児・成年骨であった。小児・成年骨についての観察および計測の結果を要約すると、次のとおりである。

1. 出土総数26体のうち、3体が小児（Ⅰ期）骨、2体が成年骨で、幼児骨は存在しなかった。小児骨3体の占める割合は、11.54％で、他の古墳時代の遺跡と同様に、幼小児骨の割合は低いものである。
2. 小児骨1例（8才）の頭蓋最大長は165㎜、頭蓋最大幅は144㎜で、頭蓋長幅示数は87.27となり、頭型は過短頭に属している。

   頬骨弓幅は118㎜、中顔幅は96㎜、顔高は99㎜、上顔高は56㎜で、顔示数、上顔示数は、それぞれ83.90（K）、47.46（K）103.13（V）、58.33（V）となり、低・広顔の傾向が著しい。また、眼窩は高眼窩、鼻部は低鼻に属している。
3. 成年骨2例のうち、37号墳1号人骨（男性）の頭型は、短頭型に属している。

37号墳1号人骨の頬骨弓幅は139㎜、顔高は109㎜、上顔高は58㎜で、顔示数、上顔示数は、それぞれ78.42（K）、41.73（K）となり、低・広顔の傾向が著しい。37号墳2号人骨（女性）の顔高は112㎜、上顔高は64㎜である。また、眼窩および鼻部の型態は、37号墳1号人骨が中眼窩、低鼻に、37号墳2号人骨が低眼窩、過低鼻に属している。

4. 成年骨2例の四肢骨は、成人骨とほぼ同じ大きさで、骨の成長はすでに成人の域に達したものである。また、上腕骨や脛骨の骨体は扁平である。

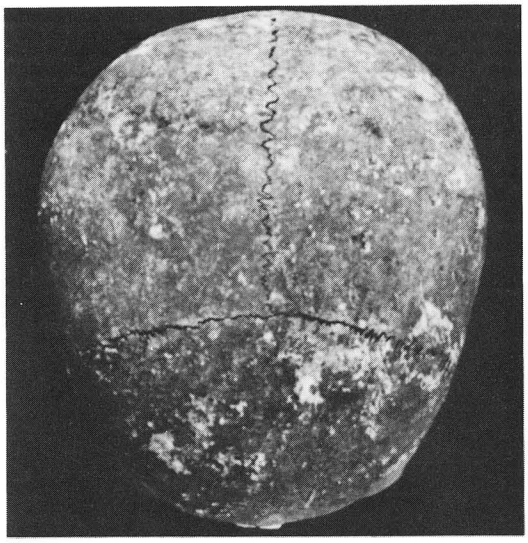
5. 大萩地下式横穴出土の小児・成年骨には、短頭かつ低・広顔の傾向が強く認められ、成人骨にみられる地域的特徴がすでに小児期に現われているものと推測されるが、小児骨の例数はわずか1例であるので、今後、この地域での小児骨の収集につとめ、追究していきたい。

≪擱筆するにあたり、本研究の機会を与えていただいた宮崎県教育委員会文化課ならびに人骨研究に関して御指導いただいた内藤芳篤教授に感謝いたします。≫

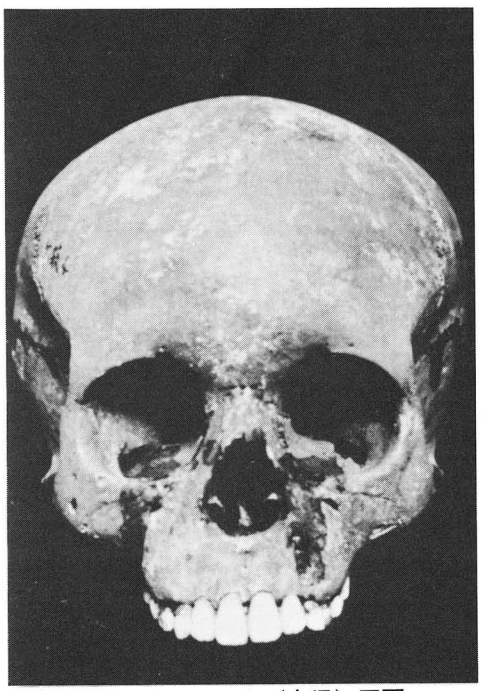
参　考　文　献

1. 金田義夫、1957：日本人の永久歯における歯根完成時期の研究。歯科月報、30：165－172.
2. 藤田恒太郎、1965：歯の話。岩波書店。東京：57－98.
3. Martin—Saller, 1957：Lerhrbuch der Anthropologie. Bd. I. Gustav Fisher Verlarg, Stuttgart：429—504.
4. 松下孝幸、1981：大友遺跡出土の弥生時代人骨。大友遺跡（佐賀県呼子町文化財調査報告書1）：223－253.
5. 内藤芳篤、1974：人骨。大萩遺跡（1）－瀬戸ノ口地区特殊農地保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告：55－62.
6. 鈴木重一、1943：四肢化骨核発育に関するレ線学的研究。千葉医学会雑誌、21：349－417.
7. 分部哲秋、1981：宮の本遺跡出土の幼小児骨。宮の本遺跡（佐世保市埋蔵文化財調査報告書）：110－113, 119, 147.
8. 分部哲秋、1981：鹿児島県松之尾遺跡出土の乳児・小児骨。松之尾遺跡（枕崎市松之尾土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書（1）：229－235.

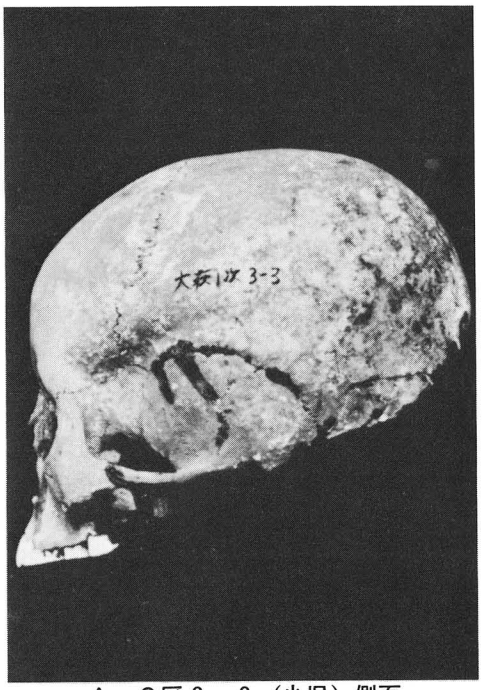
9. 分部哲秋、1981：日守地下式古墳出土の幼小児骨。日守地下式古墳群発掘調査（55－1－4号）（宮崎県文化財調査報告書23）：179－181.
10. 分部哲秋、1981：宮崎県上の原地下式古墳出土の成年骨。上の原地下式古墳群発掘調査（宮崎県文化財調査報告書24）：135－140.
11. 分部哲秋、1981：佐賀県大友遺跡出土の幼小児骨。大友遺跡（佐賀県呼子町文化財調査報告書1）：254－264.
12. 分部哲秋、1982：山口県朝田墳墓群第Ⅱ地区出土の幼小児・成年骨。朝田墳墓群Ⅴ（山口県埋蔵文化財調査報告64）：207－211.
13. 分部哲秋、1983：宮崎県高原町旭台地下式横穴出土の古墳時代小児・成年骨。宮崎県文化財調査報告書、26：112－128.
14. 分部哲秋、1983：長崎県宇久松原遺跡出土の弥生時代幼小児骨。長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅵ（長崎県文化財調査報告66）：124－134.
15. 分部哲秋、1983：佐賀県鳥栖市安永田遺跡出土の弥生時代幼小児骨。安永田遺跡（鳥栖市文化財調査報告書16）：112－114.
16. 分部哲秋、1983：鹿児島県成川遺跡出土の古墳時代幼小児骨。成川遺跡（鹿児島県埋蔵文化財調査報告書24）：262－267.
17. 分部哲秋、1983：成岡・西ノ平遺跡出土の近世幼小児骨。成岡・西ノ平・上ノ原遺跡（鹿児島県埋蔵文化財調査報告書28）：383－388.



A－C区３－３（小児）上面



A－C区３－３（小児）正面



A－C区３－３（小児）側面

(付)　**昭和57・58年度埋蔵文化財発掘調査一覧**

（昭58. 2～昭59. 3）

番号	遺跡名	所在地	発掘調査日	調査主体	調査員	遺構・遺物	備考
1	塚本古墳	日向市大字 富高字塚本	S 58. 2.28 S 58. 3. 4	日向市 教委	永友良典	現代陶磁器等	古墳と認められず
2	中村遺跡	山田町 大字山田	S 58. 3. 7 S 58. 4. 8	山田町 教委	日高孝治	竪穴住居跡 縄文土器・石器	
3	越シ遺跡	日向市大字 日知屋字越シ	S58. 3.28 S58. 3.31	日向市 教委	面高哲郎	集石遺構 縄文土器・石器 弥生土器	
4	生目古墳群	宮崎市大字 跡江字城平	58. 4.13 58. 4.15	宮崎市 教委	野間重孝	円墳 現代陶磁器	
5	山塚原古墳群	木城町大字 高城字山塚原	58. 4.25 58. 7. 4	木城町 教委	石川恒太郎	円形周溝状遺構 須恵器 土師器	
6	尾畑遺跡	西都市大字 穂北字 大木ノ原	58. 6.20 58. 7. 5	県教委	日高正晴	縄文土器・石器 土師器・須恵器 陶磁器	
7	セベット遺跡	高千穂大字 三田井	58. 5.16 58. 6.11	高千穂町 教委	長津宗重	竪穴住居跡 縄文土器・石器	
8	下屋敷遺跡	新富町大字 上富田	58. 5.23 58. 5.27	新富町 教委	永友良典	円墳 前方後円墳 須恵器	
9	野首遺跡	日向市大字 日知屋野首	58. 6.13 58. 8. 6	県教委	菅付和樹	柱穴・敷石状遺構・輸入陶磁器 土師器・石器 弥生土器	
10	芳ケ迫第1遺跡	田野町字 芳ケ迫甲	58. 7. 4 59. 2.28	田野町 教委	面高哲郎	集石遺構・土壙 縄文土器・石器	
11	下屋敷遺跡	新富町大字 上富田	58. 7. 6 58. 9.21	新富町 教委	石川恒太郎 有田辰美 山中悦雄	古墳 須恵器・土師器 勾玉.管玉.剣	

番号	遺跡名	所在地	発掘調査日	調査主体	調査員	遺構・遺物	備考
12	九塚地下式横穴	野尻町東麓	58. 8.16 ～ 58. 8.25	県教委	北郷泰道	地下式横穴 剣・直刀 鉄鏃	
13	西ノ原遺跡	宮崎市大字 熊野字西ノ原	58. 9. 8 ～ 58. 9.14	県教委	永友良典	溝状遺構・柱穴 縄文土器 土師器 須恵器・土製品	
14	本庄古墳群	国富町大字 本庄字義門寺	58.10. 1 ～ 58.12.28	国富町 教委	長津宗重		
15	越シ遺跡	日向市大字 日知屋字越シ	58. 9.12 ～ 59. 1.27	日向市 教委	緒方博文	集石遺構 竪穴住居跡 縄文土器・石器 弥生土器	
16	上床遺跡	須木村大字 中原字上床	58.10.27 ～ 58.11. 3	焼畑農耕 史研究会	甲元真之	縄文土器 石器	
17	寺原第1遺跡	西都市大字 三宅	58. 9.26 ～ 58.10.13	西都市 教委	日高正晴	竪穴住居跡 土師器 弥生土器 縄文土器	
18	茶臼原古墳群	西都市大字 穂北字上野	58.11.28 ～ 58.12. 8	西都市 教委	日高正晴	円形周溝墓 弥生土器	
19	又五郎遺跡	田野町字 又五郎	58.12. 5 ～ 59. 3.31	田野町 教委	伊東但	集石遺構 竪穴住居跡 土器・石器	
20	西ノ原遺跡	宮崎市大字 熊野字西ノ原	58.12.12 ～ 58.12.27	宮崎市 教委	野間重孝	溝状遺構 縄文土器 弥生土器 土師器	
21	蔵園地下式横穴	新富町大字 三納代字蔵園	59. 1.18 ～ 59. 1.21	新富町 教委	北郷泰道	地下式横穴 骨片	
22	浮ノ城遺跡他	宮崎市吉村町 浮ノ城他	59. 1.17 ～ 59. 2.10	宮崎市 教委	野間重孝	水田跡？ 弥生土器 土師器 須恵器	

番号	遺跡名	所在地	発掘調査日	調査主体	調査員	遺構・遺物	備考
23	権現掘地下式横穴	国富町大字八代南俣字権現掘	59. 2. 6 ～ 59. 2. 8	国富町教委	茂山護	地下式横穴 直刀・鉄鏃	
24	栗須地下式横穴	国富町大字八代南俣字栗須	59. 1. 30 ～ 59. 2. 3	〃	〃	地下式横穴 直刀・刀子 管玉・切子玉 小玉・土師器 高坏	
25	地蔵寺地下式横穴	国富町大字本庄字地蔵寺	59. 2. 8 ～ 59. 2.10	〃	〃	地下式横穴 直刀・刀子 鋤先	朱線文あり
26	瀬戸口遺跡	新富町大字新田字瀬戸口	59. 2.13 ～ 59. 3.31	新富町教委	日高孝治	集石遺構 縄文土器 石器	
27	上の原遺跡	国富町大字本庄字上の原	59. 2. 14 ～ 59. 2. 20	国富町教委	長津宗重	竪穴住居跡 集石遺構 縄文土器 弥生土器	
28	寺原第1遺跡	西都市大字三宅	59. 3. 5 ～ 59. 3.10	西都市教委	日高正晴		
29	宮崎学園都市遺跡	4・9・10 11・14 号地 宮崎市大字熊野 農高用地 清武町大字木原	58.4.5 59.3.20 59.2.29 59.3.30	県教委	県文化課職員	集石遺構 竪穴住居跡 縄文・土師器	

宮崎県文化財調査報告書

第２７集

昭和５９年３月３１日

発　行　　宮崎県教育委員会

編　集　　宮崎県教育庁文化課